

車坂・山下遺跡群  
車坂第1・2・3遺跡  
山下第1・2・3遺跡

宮崎広域都市計画事業 車坂・山下土地区画  
整理事業に伴う遺跡調査報告書

1997  
宮崎市教育委員会

## はじめに

近年宮崎市では、民間企業による宅地開発を始めとして広域土地区画整理事業、道路改良事業、圃場整備事業等数多くの開発造成事業が行われております。これらの開発事業にともないまして埋蔵文化財の発掘調査も数多く行われるようになりました。その結果、ナイフ形石器・角錐状石器等に代表される旧石器時代、绳文時代の草創期から晩期に至る各時期の遺構、弥生時代の環濠集落、古墳時代前期・後期の集落、奈良・平安時代の集落等が発見され基礎資料の蓄積がようやく進み、宮崎平野の古代史も徐々にではありますが明らかになってきています。中でも本書で報告する車坂・山下遺跡群の所在する台地上は、宮崎県により発掘調査が行われ旧石器時代から近世までの遺跡が検出された宮崎学園都市遺跡群が隣接しておりその成果が期待されていたところでございます。

又、宮崎市では市制70周年記念事業としまして国指定史跡生日古墳群整備事業を計画しております。

その整備の過程の中で新たな事実が判明するものと期待されており、宮崎市の歴史解明に新段階がくるものと考えております。

最後になりましたが猛暑、冷夏、寒波等の中長年に渡り発掘作業に従事された作業員の方々区画整理事業関係者に感謝申し上げるとともに、本書が学術研究の一助になれば幸いです。

平成9年3月

宮崎市教育委員会  
教育長 稲倉宗知

## 例　　言

1. 本書は宮崎広域都市計画事業車坂・山下土地区画整理事業にともない、平成元年度から平成6年度にかけて宮崎市教育委員会が発掘調査を行った車坂・山下遺跡群の調査報告書である。

### 2. 調査期間

平成元年度	山下第1遺跡	平成元年12月11日～平成2年3月2日
平成2年度	車坂第1遺跡	平成2年9月6日～平成2年11月30日
平成3年度	車坂第2遺跡	平成4年2月24日～平成4年3月31日
平成4年度	山下第2遺跡	平成4年12月10日～平成5年2月23日
平成5年度	車坂第3遺跡	平成5年7月16日～平成5年10月13日
平成6年度	山下第2遺跡	平成6年11月8日～平成6年11月30日
平成6年度	山下第3遺跡	平成6年11月8日～平成6年12月27日

### 3. 調査体制

宮崎市教育委員会 文化振興課

#### 平成元年度

課長	松元正
総括	係長 野間重孝
調査	主事 米良明信
	中山豪
庶務	永井淳生

#### 平成2年度

課長	松元正
総括	主幹 野間重孝
調査	主事 米良明信
	中山豪
庶務	永井淳生

#### 平成3年度

課長	瀬戸口達
総括	係長 野間重孝
調査	主事 米良明信
	中山豪
庶務	永井淳生
	井上治美

#### 平成4年度

課長	瀬戸口達
総括	主幹 野間重孝
調査	主事 米良明信
	中山豪
庶務	井上治美

平成 5 年度

課長 濑戸口 道  
総括 係長 井手上 仁悟  
調査 主事 中山 豪  
主事補 岩城 勝志  
嘱託 日高 広人  
庶務 主事 井上 治美

平成 6 年度

課長 濑戸口 道  
総括 係長 井手上 仁悟  
調査 主事 中山 豪  
主事補 鳥枝 誠  
庶務 主事 岩城 勝志

平成 7 年度

課長 愛甲 勝彦  
総括 係長 井手上 仁悟  
整理 主事 中山 豪  
鳥枝 誠  
庶務 岩城 勝志

平成 8 年度

課長 愛甲 勝彦  
総括 係長 井手上 仁悟  
整理 技師 中山 豪  
鳥枝 誠  
庶務 主事 岩城 勝志

4. 本書の執筆は中山が行った。

5. 本書に掲載した遺構図面は野間、米良、永井、中山、岩城、鳥枝、日高が実測し製図及び図版の作成は中山、鳥枝が行った。

6. 写真撮影は、野間、中山、鳥枝が行った。

7. 本書の編集は野間、中山が行った。

8. 本書における出土遺物は宮崎市教育委員会が保管している。

# 目 次

第1章 歴史的環境	1
1. 遺跡の立地と環境	1
2. 調査に至る経緯	1
3. 調査の概要	4
第2章 車坂第1遺跡の調査	7
1. 調査の概要	7
2. 層位	7
3. 縄文時代の遺構と遺物	8
1) 遺構	8
2) 遺物	8
A. 土器	8
B. 石器	12
4. 弥生時代の遺構と遺物	16
1) 遺構	16
2) 遺物	19
A. 土器	19
B. 石器	20
5. その他の遺物	20
6. 小結	29
第3章 車坂第2遺跡の調査	37
1. 調査の概要	37
2. 層位	37
3. 縄文時代の遺構と遺物	38
1) 遺構	38
2) 遺物	38
A. 土器	38
B. 石器	42
4. 弥生時代の遺構と遺物	42
1) 遺構	42
2) 遺物	46
A. 土器	46

B. 石器	49
5. その他の遺構と遺物	49
6. 小結	50
 第4章 車坂第3遺跡の調査	56
1. 調査の概要	56
2. 層位	56
3. 純文時代の遺構と遺物	59
1) 遺構	59
2) 遺物	59
A. 土器	60
B. 石器	75
4. 弥生時代の遺構と遺物	80
1) 遺構	80
2) 遺物	83
A. 土器	83
5. その他の遺構と遺物	84
1) 遺構	84
2) 遺物	84
6. 小結	91
 第5章 山下第1遺跡の調査	107
1. 調査の概要	107
2. 層位	107
3. 純文時代の遺構と遺物	111
1) 遺構	111
2) 遺物	111
A. 土器	111
B. 石器	118
4. 弥生時代の遺構と遺物	123
1) 遺構	123
2) 遺物	131
A. 土器	131
B. 石器	136
5. その他の遺構と遺物	137
1) 遺構	137

2) 遺物	137
6. 小結	142
 第6章 山下第2遺跡の調査	154
1. 調査の概要	154
2. 層位	154
3. 遺構	156
4. 遺物	158
A. 土器	158
B. 石器	163
5. 小結	164
 第7章 山下第3遺跡の調査	169
1. 調査の概要	169
2. 層位	169
3. 遺構	172
4. 遺物	175
A. 土器	175
B. 石器	175
5. 小結	179
 第8章 まとめ	182

## 挿図目次

第1図 車坂・山下遺跡位置図	2
第2図 遺跡周辺図	3
第3図 車坂第1遺跡位置図	5
第4図 調査区図	6
第5図 土層図	7
第6図 出土状況図	9
第7図 出土土器実測図	10
第8図 出土土器実測図	11
第9図 出土石器実測図	13

第10図	遺構配置図	14
第11図	1・2号住居実測図	15
第12図	3号住居実測図	16
第13図	4・5号住居実測図	18
第14図	1・2号住居出土土器実測図	21
第15図	3・4号住居出土土器実測図	22
第16図	4号住居出土土器実測図	23
第17図	5号住居出土土器実測図	24
第18図	5号住居出土土器実測図	25
第19図	出土土器実測図	26
第20図	住居出土石器実測図	27
第21図	出土遺物実測図	28
第22図	車坂第2遺跡位置図	36
第23図	土層図	37
第24図	出土状況図	39
第25図	出土土器実測図	40
第26図	出土遺物実測図	41
第27図	遺構配置図	43
第28図	1・2号住居実測図	44
第29図	3・4号住居実測図	45
第30図	1・3号住居出土土器実測図	47
第31図	出土土器実測図	48
第32図	2号住居出土石器実測図	49
第33図	車坂第3遺跡位置図	55
第34図	土層図	56
第35図	1・2号集石遺構実測図	57
第36図	1区出土状況図	58
第37図	出土土器実測図	61
第38図	出土土器実測図	62
第39図	出土土器実測図	63
第40図	出土土器実測図	65
第41図	出土土器実測図	66
第42図	2区出土状況図	67
第43図	出土土器実測図	68
第44図	出土土器実測図	70
第45図	出土土器実測図	71

第46図	出土土器実測図	72
第47図	出土土器実測図	73
第48図	出土土器実測図	74
第49図	出土石器実測図	76
第50図	出土石器実測図	77
第51図	出土石器実測図	78
第52図	遺構配置図	79
第53図	1号住居、2号竪穴状遺構実測図	81
第54図	3号竪穴状遺構、1・2号土坑実測図	82
第55図	1号住居出土土器実測図	85
第56図	1号住居、2号・3号竪穴状遺構出土土器実測図	86
第57図	3号竪穴状遺構、1号土坑出土土器実測図	87
第58図	1・2号土坑出土土器実測図	88
第59図	5号溝出土土器実測図	89
第60図	5号溝出土土器実測図	90
第61図	山下第1遺跡位置図	108
第62図	A1グリッド土層図	109
第63図	1・2号集石実測図	110
第64図	出土状況図	112
第65図	出土土器実測図	113
第66図	出土土器実測図	115
第67図	出土土器実測図	116
第68図	出土土器実測図	117
第69図	出土土器実測図	119
第70図	出土土器実測図	120
第71図	出土石器実測図	121
第72図	遺構配置図	122
第73図	1・2号住居実測図	124
第74図	3号周溝状遺構、4号住居実測図	125
第75図	5・6号住居実測図	126
第76図	7・9号住居、8号土器溜実測図	128
第77図	10・11号住居実測図	129
第78図	12・13号住居実測図	130
第79図	1・2号住居出土土器実測図	132
第80図	2号住居出土土器実測図	133
第81図	3号周溝状遺構出土土器実測図	134

第82図	3号周溝状遺構、4・6・7号住居出土土器実測図	135
第83図	8号土器溜、9号住居出土土器実測図	138
第84図	9号住居出土土器実測図	139
第85図	10・11・12・13号住居出土土器実測図	140
第86図	出土石器実測図	141
第87図	山下第2遺跡位置図	153
第88図	土層図	154
第89図	遺構配置図	155
第90図	1・2号住居実測図	157
第91図	3号住居、1号上坑実測図	158
第92図	出土土器実測図	159
第93図	出土土器実測図	160
第94図	出土土器実測図	161
第95図	出土石器実測図	162
第96図	山下第3遺跡位置図	168
第97図	土層図	169
第98図	平成5年度調査区図	170
第99図	平成6年度調査区図	171
第100図	集石遺構実測図	173
第101図	落し穴、1・2号土坑実測図	174
第102図	出土土器実測図	176
第103図	出土遺物実測図	177
第104図	出土石器実測図	178

## 表 目 次

### 車坂第1遺跡

第1表	土器観察表	30
第2表	石器観察表	34

### 車坂第2遺跡

第3表	縄文土器観察表	51
第4表	石器観察表	52
第5表	弥生土器観察表	53

車坂第3遺跡	
第6表 繩文土器観察表	93
第7表 石器観察表	101
第8表 弥生土器観察表	104
山下第1遺跡	
第9表 繩文土器観察表	144
第10表 石器観察表	147
第11表 弥生土器観察表	149
山下第2遺跡	
第12表 土器観察表	165
第13表 石器観察表	167
山下第3遺跡	
第14表 土器観察表	180
第15表 石器観察表	181

## 図版目次

図版1 車坂第1遺跡1	186
図版2 車坂第1遺跡2	187
図版3 車坂第1遺跡3	188
図版4 車坂第1遺跡4	189
図版5 車坂第1遺跡5	190
図版6 車坂第1遺跡6	191
図版7 車坂第1遺跡7	192
図版8 車坂第1遺跡8	193
図版9 車坂第1遺跡出土遺物	194
図版10 車坂第1遺跡出土土器1	195
図版11 車坂第1遺跡出土土器2	196
図版12 車坂第2遺跡1	197
図版13 車坂第2遺跡2	198
図版14 車坂第2遺跡3	199
図版15 車坂第2遺跡4	200
図版16 車坂第2遺跡5	201
図版17 車坂第2遺跡出土遺物1	202

図版18	車坂第2遺跡出土遺物2	203
図版19	車坂第3遺跡1	204
図版20	車坂第3遺跡2	205
図版21	車坂第3遺跡3	206
図版22	車坂第3遺跡4	207
図版23	車坂第3遺跡5	208
図版24	車坂第3遺跡6	209
図版25	車坂第3遺跡7	210
図版26	車坂第3遺跡8	211
図版27	車坂第3遺跡9	212
図版28	車坂第3遺跡出土土器1	213
図版29	車坂第3遺跡出土土器2	214
図版30	車坂第3遺跡出土遺物	215
図版31	車坂第3遺跡出土石器	216
図版32	車坂第3遺跡出土土器3	217
図版33	車坂第3遺跡出土土器4	218
図版34	山下第1遺跡1	219
図版35	山下第1遺跡2	220
図版36	山下第1遺跡3	221
図版37	山下第1遺跡4	222
図版38	山下第1遺跡5	223
図版39	山下第1遺跡6	224
図版40	山下第1遺跡7	225
図版41	山下第1遺跡8	226
図版42	山下第1遺跡9	227
図版43	山下第1遺跡10	228
図版44	山下第1遺跡11	229
図版45	山下第1遺跡12	230
図版46	山下第1遺跡13	231
図版47	山下第1遺跡出土土器1	232
図版48	山下第1遺跡出土土器2	233
図版49	山下第1遺跡出土石器	234
図版50	山下第1遺跡出土土器3	235
図版51	山下第1遺跡出土土器4	236
図版52	山下第2遺跡1	237
図版53	山下第2遺跡2	238

図版54	山下第2遺跡3	239
図版55	山下第2遺跡4	240
図版56	山下第2遺跡5	241
図版57	山下第2遺跡出土土器	242
図版58	山下第2遺跡出土遺物	243
図版59	山下第3遺跡1	244
図版60	山下第3遺跡2	245
図版61	山下第3遺跡3	246
図版62	山下第3遺跡4	247
図版63	山下第3遺跡5	248
図版64	山下第3遺跡出土土器	249
図版65	山下第3遺跡出土遺物	250

# 第1章 歴史的環境

## 1. 遺跡の立地と環境（第1・2図）

車板・山下遺跡群は宮崎市大字加江田字車板、山下に所在する。当地は日南山地・家一郷に源を有する加江田川と鶴坂山に源を有する清武川に挟まれ、日向灘沿岸まで延びる清武、木花丘陵の南端部域の標高13mから24mの間に位置する。また、丘陵裾部と向河川の間は標高2mから3mの水田地帯となっている。

木花、清武丘陵上には、宮崎学園都市の建設に伴い宮崎県文化課により発掘調査が行われており宮崎学園都市遺跡群として報告された数多くの遺跡が存在する。代表的な遺跡としては、旧石器時代のナイフ形石器、縄文時代草創期の隆起線文土器・爪形文土器、早期の前平式土器・塞ノ神式土器等を出土した堂地西遺跡。縄文時代後期から晩期の土器を出土し、縄文時代晩期集落、平安時代の竪を持つ堅穴住居及び掘立柱建物群を検出した平畠遺跡。縄石器、縄文時代早期の貝殻文土器・押型文土器・塞ノ神式土器等、弥生時代後期の堅穴住居、中世の周溝墓・掘立柱建物等が検出された前原西遺跡。縄文時代早期、弥生時代中期の堅穴住居・後期の堅穴住居、古代から中世の掘立柱建物、中世の石塔、近世墓等が検出された堂地東遺跡。弥生時代の堅穴住居・周溝状遺構、古墳時代の堅穴住居・土坑、中世の掘立柱建物等が検出された熊野原遺跡。中世山城として今江城・車坂城等がある。丘陵北面には縄文時代早期・後期の土器、弥生時代から古墳時代の堅穴住居、平安時代の焼成土坑・環濠遺構が検出された西ノ原遺跡、弥生時代の堅穴住居・奈良時代の堅穴住居を検出した熊野第1遺跡等が存在している。

また、丘陵北側で清武川との間の微高地には前方後円墳2基を含む県指定史跡木花村古墳が所在していることは、当熊野地区が延喜式に見られる「救麻駅」の比定地とされていることとともにこの地区的歴史を考えるうえで重要である。

## 2. 調査に至る経緯

宮崎市では、宮崎サンテクノポリス構想で住宅整備地区に予定している本地区を、宮崎学園都市整備事業に連動する公共施設の整備改善並びに宅地の利用増進を図るために、「宮崎広域都市計画事業車板・山下土地区画整理事業」を計画し、昭和61年4月8日に国の都市計画決定を受けている。

計画区域は宮崎学園都市建設に伴って昭和55年度から昭和58年度に発掘調査された宮崎学園都市遺跡群に隣接する地区であることから、遺跡の立地が確実視されていたために、昭和62年5月28日、29日の2日間現地踏査による分布調査を行った。

その結果、宮崎学園都市遺跡群と近接する新たな遺跡もしくは同一遺跡の一部を構成していることが判明した。

のことから、当該区域内の埋蔵文化財の広がり等を判明させるために昭和62年度に試掘調査を行うことを決定した。



第1図 車坂・山下遺跡位置図

第2図 遺跡周辺図



試掘調査は、昭和63年7月5日に農作地の作付け状況の調査を行い、同18日、19日に地権者への説明会を実施した後の8月1日から9月2日まで行った。

試掘調査では、東西に長いL字状の事業区内の内、南北方向の車坂地区を北から順に1号地から5号地、東西方向の山下地区を東から順に6号地から10号地に分割し、宅地、道路、急傾斜地、明らかに旧地形が大きく削平されている部分は調査対象外とした。

調査法としては10m四方のグリッドを組み、その交点に2m×2mのトレントレーニングを基本として行ったが、土地の状況に応じグリッドとは別に、縦、横に長いトレントレーニングを設定した箇所もある。車坂地区では、赤ホヤ層の残りが悪い地区が多く遺構・遺物の検出もなされない部分が数多くみられた。その中でも4号地、5号地とした南側の部分は土層もしっかりした部分が多く居住跡と見られる遺構も確認された。

山下地区は大半が蜜柑園であるため試掘は限られたものであったが、6号地では住居跡や集石遺構を確認している。また、7号地、8号地、9号地、10号地においても集石遺構の存在が強く窺われた。

以上のことより、発掘調査は事業区の南側部分を中心に行うことと決定した。

### 3. 調査の概要

車坂第1遺跡では、縄文時代早期の土器・集石遺構、弥生時代後期の住居・土坑が検出された。

車坂第2遺跡では、縄文時代早期の土器・集石遺構、弥生時代後期の住居・溝状遺構が検出された。

車坂第3遺跡では、縄文時代早期の土器・多量の石器・集石遺構、弥生時代後期の住居・溝状遺構が検出された。

山下第1遺跡では、縄文時代早期の土器・集石遺構、弥生時代中期・後期の住居・溝状遺構が検出された。

山下第2遺跡では、縄文時代後期の住居・溝状遺構が検出された。

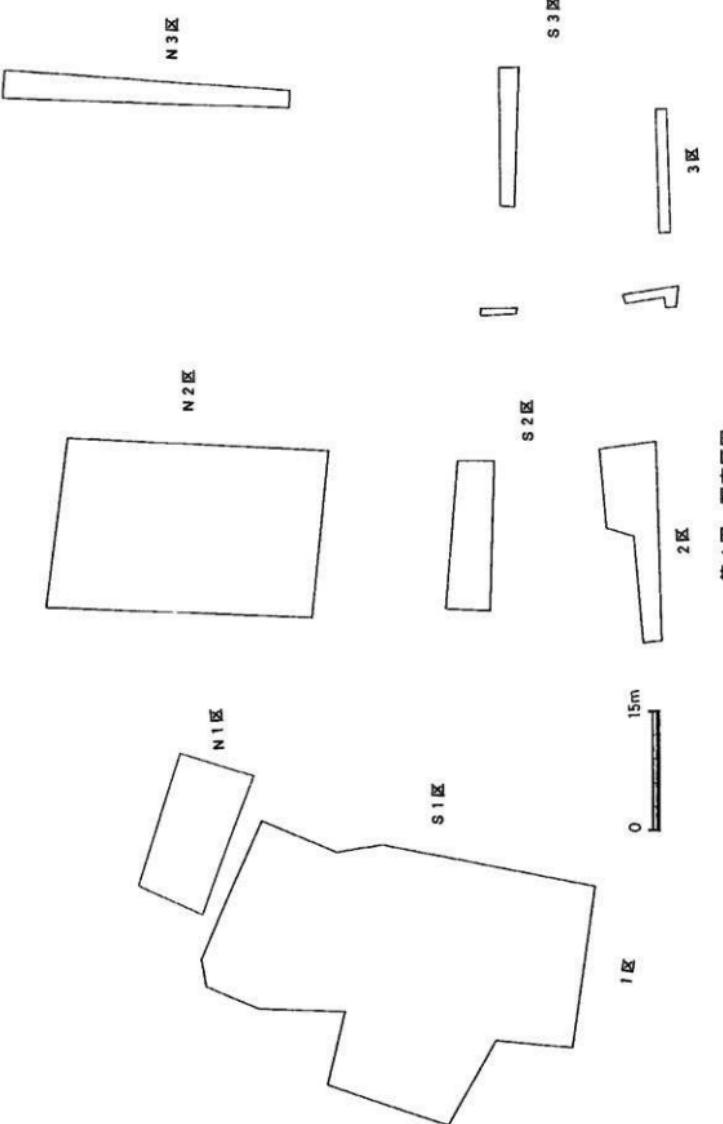
山下第3遺跡では、縄文時代早期の集石遺構、落とし穴・溝状遺構が検出された。

これらにより、縄文時代早期を初現とし弥生時代中期後期に居住域となった遺跡群と推定される。

第3図 車板第1道路位置図



第4図 調査区図



## 第2章 車坂第1遺跡の調査

### 1. 調査の概要（第3・4図）

本遺跡は車坂・山下遺跡群の最も東側に位置し、畠や蜜柑園として利用されていた区域である。発掘調査は、畠の区画に沿った形で調査区を設定し、西から東に向かって第1区、第2区、第3区と決定し、それぞれの区域を南北に分割している。

第1区については、北プロックでは赤ホヤ層上面までの遺構・遺物は検出されなかった。赤ホヤ層の下面においても縄文時代早期の土器片が若干検出されたのみであった。

南プロックでは、赤ホヤ層上面で弥生時代後期の竪穴住居4軒、土坑2基、時期不明PIT群を検出した。また、赤ホヤ層下面では縄文時代早期の集石遺構を検出した。

第2区については、北プロックでは溝状遺構1条と弥生時代中期の花弁型住居を1基検出したが大きく搅乱されたものであった。また、南プロックは搅乱が激しく旧地形をとどめていなかった。

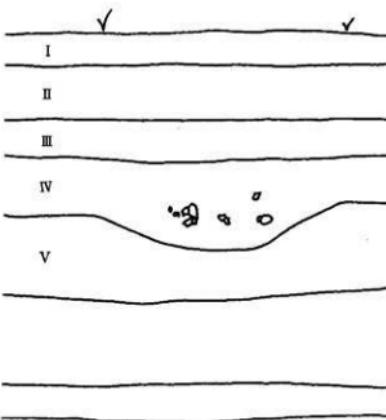
第3区は、第2区の調査段階で旧地形の削平と搅乱が進んでいることが判明していたためトレチによる遺構確認と土層確認を行った。その結果、北プロックでは蜜柑園の水路と思われる溝状遺構が1条検出されたのみで、その他の遺構・遺物は検出されなかった。南プロックでは全く遺構・遺物の検出は出来なかった。

### 2. 層位（第5図）

本遺跡の基本層序は、I層 表土（耕作土）、II層 赤ホヤ層、III層 黄褐色ローム層、IV層 黑褐色ローム層、V層 黄白色ローム層であり、基層はシラスとなっている。

本来は、赤ホヤ層の上に黒色土層があったものと思われるが、削平及び耕作によりなくなっている。

弥生時代の住居は第III層まで掘り込んである。縄文時代早期の遺物は、IV、V層で検出され、集石遺構は、V層に掘り込みがみられる。



第5図 土層図

### 3. 縄文時代の遺構と遺物

#### 1) 遺 構

縄文時代の遺構としては集石遺構が検出された。

検出状況に大きく3種類のものが見られた。

1類は、密集した円碟や破碎碟がほぼ円形に出土するもの

2類は、ほぼ円形に円碟や破碎碟が見られるが中央部分は淡黒色の土が検出されるもの

3類は、不正形な状態で碟が集まっているもの

1類、2類の規模は直径約1mから1.5m、深さ約50cm程度である。

このうち、1類、2類はスリパチ状の掘り込みを有し、掘り込み内に碟が隙間なく充填されていた。3類は掘り込み等は見られず、どちらかと云えば浮いた形の出土である。

このうち2類、3類は比較的近接した場所で検出されていることは注目される。

#### 2) 遺 物 (第6図)

出土した縄文時代の遺物は土器と石器であり、調査区全面から検出された。

#### A. 土 器 (第7・8図)

出土した土器は全て縄文時代早期の土器であり、調整、文様、器形等から次のように分類される。

1類 貝殻条痕土器類 条痕による調整を行う。1

2類 桑ノ丸式土器類 口縁端を平に仕上げ、内外面をナデた後に櫛状施文具による文様を施すもの。

綾杉状の施文 2、3、4、5、7

流水文状の施文 6、8、9

格子状の施文 10

#### 3類 下剥峰式土器類

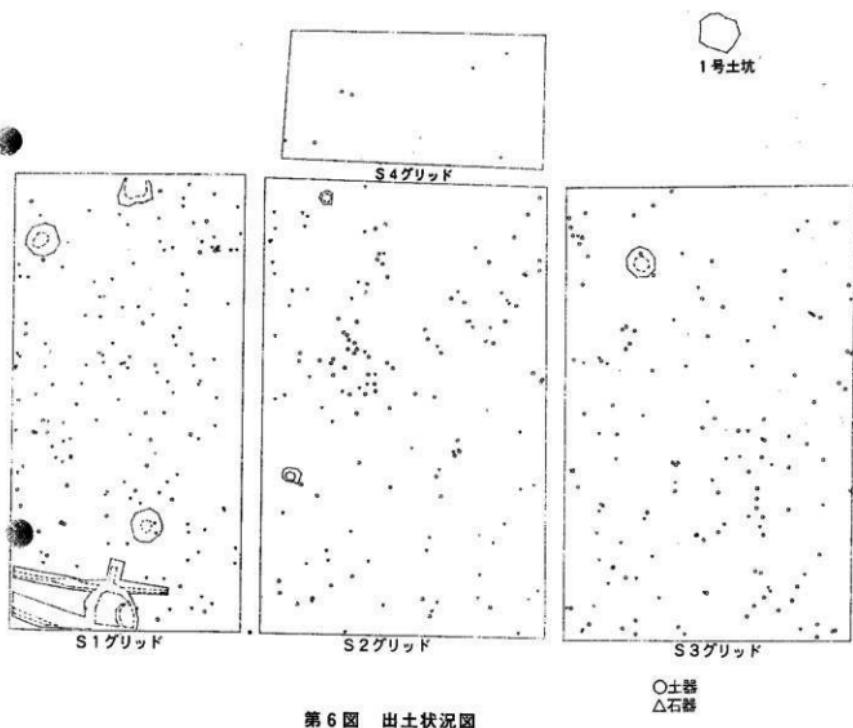
a 口縁端を平に仕上げ、内外面をナデた後に貝殻腹縁の刺突により文様を施すもの。

綾杉状の施文 11

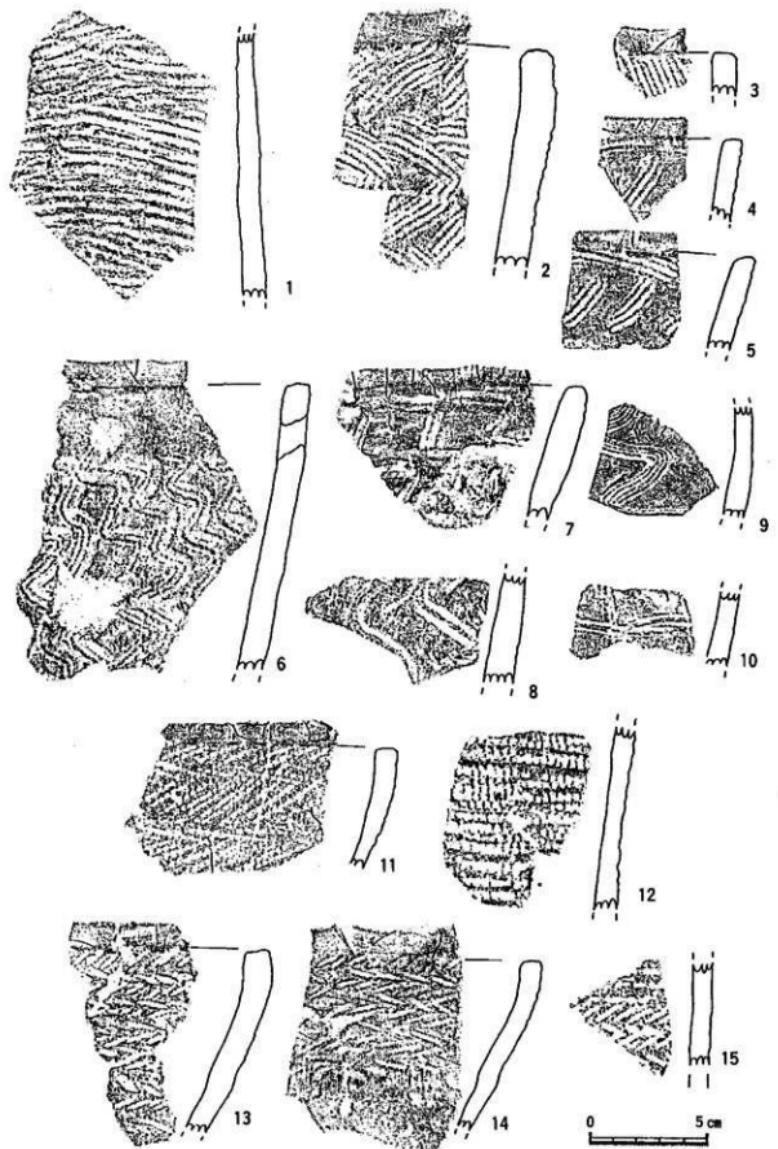
横位の施文 12

b 口縁端を平に仕上げ、内外面をナデた後にヘラ状工具や貝殻腹縁の刺突により文様を施すもの。

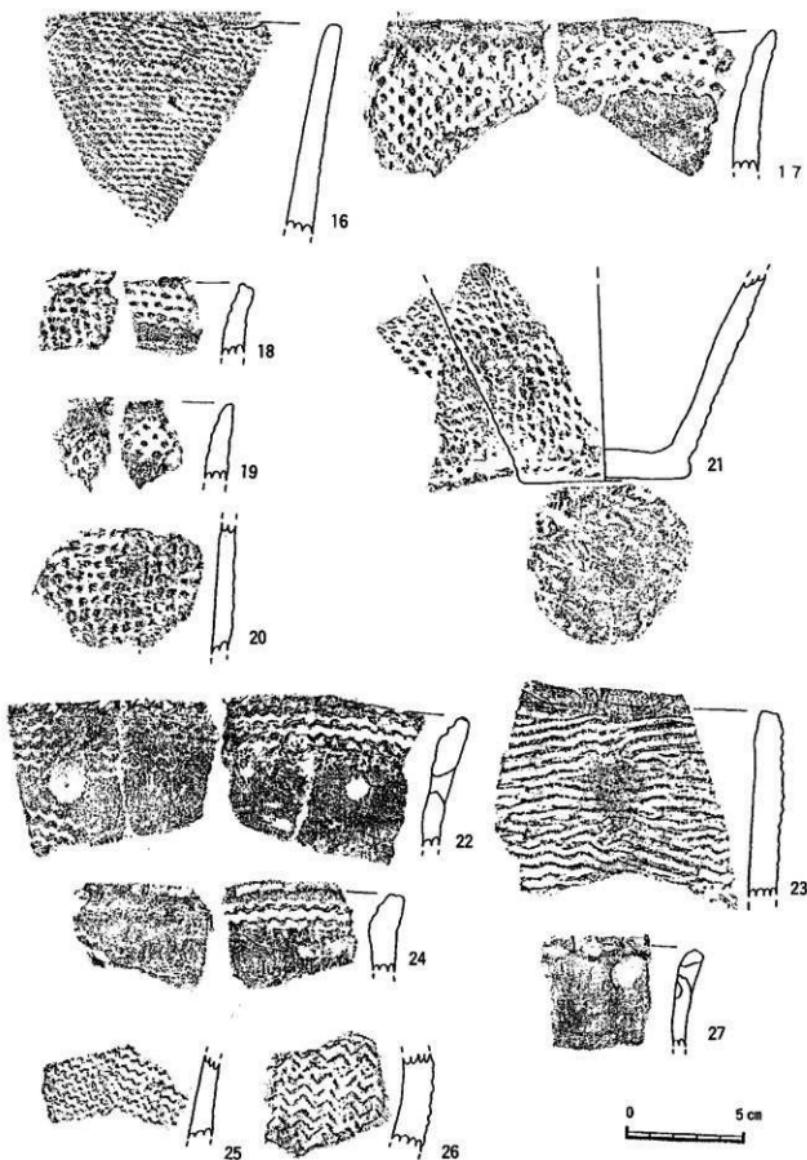
ヘラ状工具による綾杉状の施文 13



第6図 出土状況図



第7図 出土土器実測図



第8図 出土土器実測図

ヘラ状工具による綾杉状の施文を口縁下に施し、その下部に貝殻腹縁の刺突による綾杉状の施文を施すもの 14

ヘラ状工具による綾杉状の施文を施し、横位の貝殻腹縁の刺突による施文を施すもの 15

#### 4類 押型文土器

##### a 楕円押型

細かな楕円押型を外面に施し口縁端を平にするもの 16

楕円押型を外面に施し、内面に原体1つ分の文様帯を持ち、平にした口縁端に刻みを入れるもの 18

楕円押型を外面に施し、内面に原体1つ分の文様帯を持ち、口縁部を丸く仕上げ両面に無文帯を持つもの 17、19

20は胴部片、21は底部で網代底である。

##### b 山形押型

山形押型を外面に施し、内面に原体1つ分の文様帯を持ち、平にした口縁端に刻みを入れるもの 22、24

山形押型を外面に施し、口縁端を平にするもの 23

原体の形状に、山形が鋭いもの 26、山形が丸みを帯びたもの 25、山形が帯状になるもの 23 の3種類に分けられる。

#### 5類 その他の土器

27はナデ調整で口唇部に深い押圧が入る。

### B. 石 器 (第9・21図)

石器は、石鎚、凹石、敲石等が出土している。

石鎚は各調査区から出土している。石材は、黒曜石、チャート、頁岩等多種である。

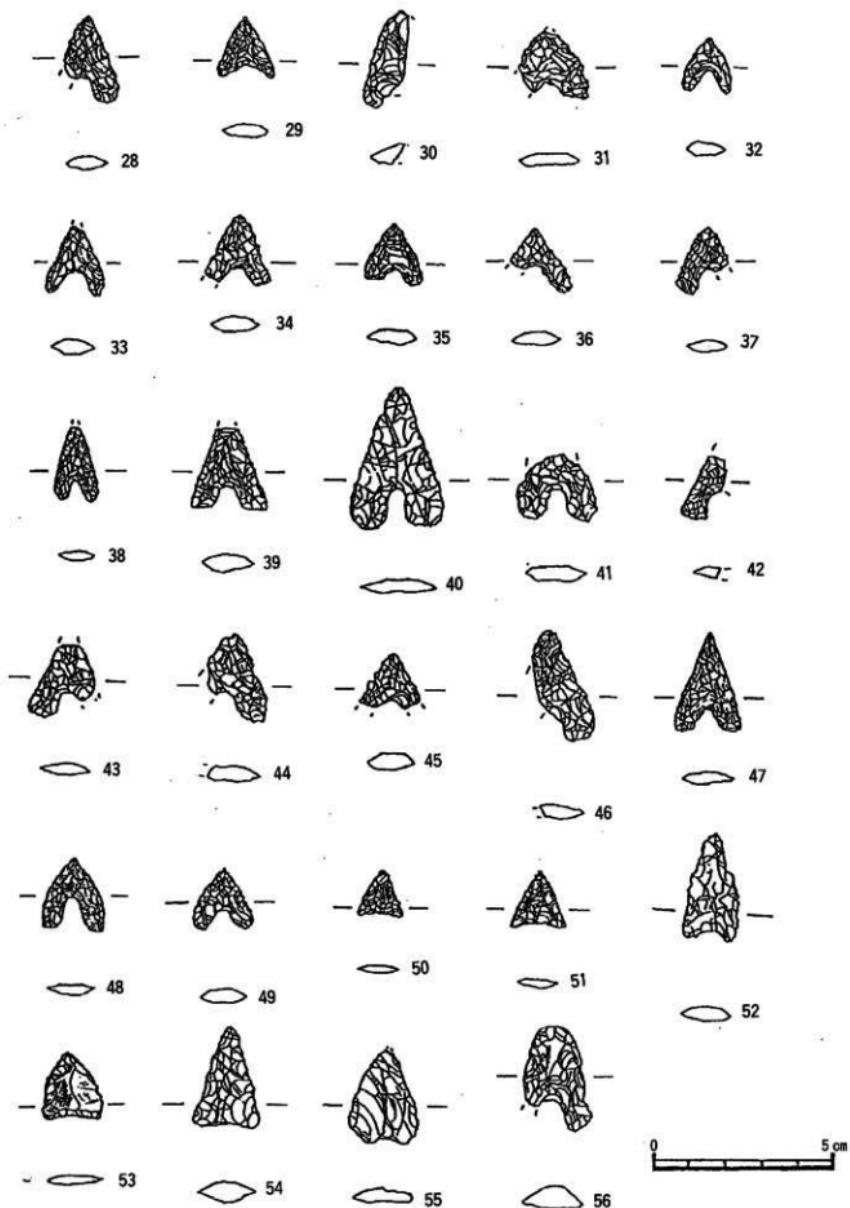
凹基鎚 28~49、平基鎚 50~54、所謂トロトロ石器 56が有り、大きさは多様である。

敲石は、縱長でその端部を敲打に使用し、凹石を兼ねる。129、132

凹石は、円若しくは楕円で中央に窪みを持ち、側面に敲打痕を持つ。130、131

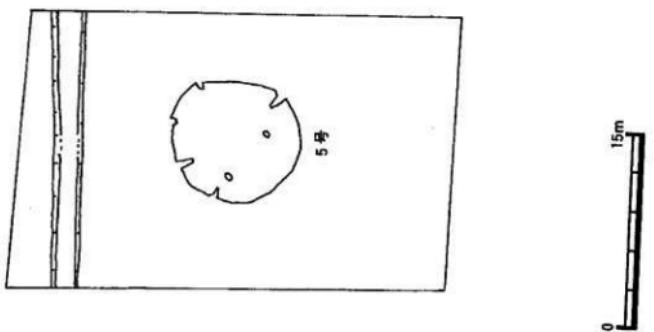
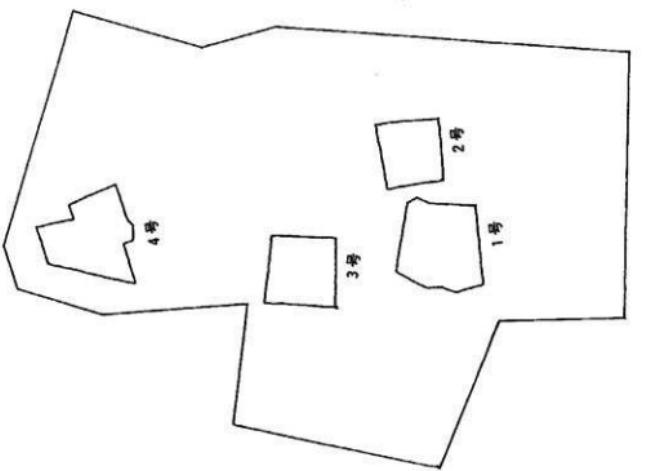
敲石、凹石は図示した以外にも出土しているが掲載は行っていない。

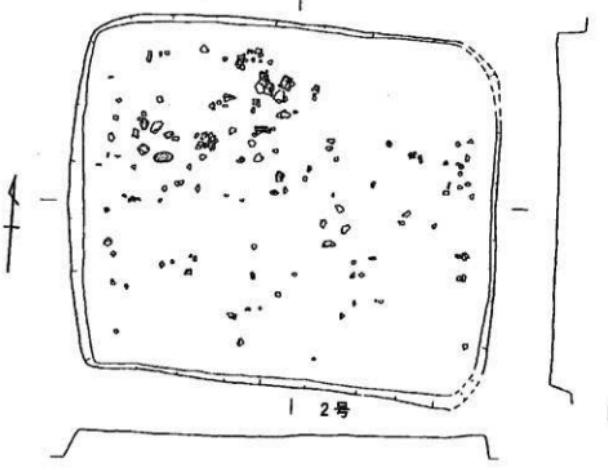
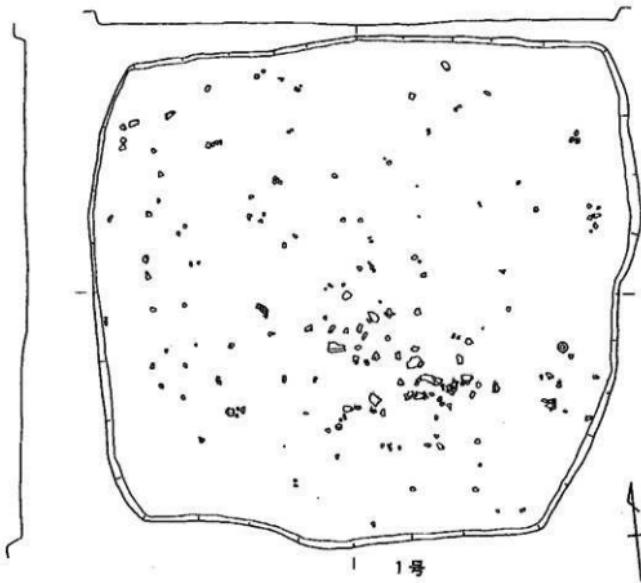
その他、剣片、チップ等は多数出土している。



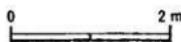
第9図 出土石器実測図

第10図 造林記番図





第11図 1・2号住居実測図



#### 4. 弥生時代の遺構と遺物

##### 1) 遺構（第10図）

弥生時代の遺構としては、第1区から竪穴住居が4軒、上坑が2基、溝状遺構、第2'区から竪穴住居が1軒検出されている。

##### 1号竪穴住居（第11図）

6.6m×6.6mの方形の竪穴住居で深さ約20cmを残し、東西方向・南北方向の各方位には各辺が平行する。

遺物は、床面からやや浮いた形で検出され、壺・甕・蓋・高坏・器台が出土した。

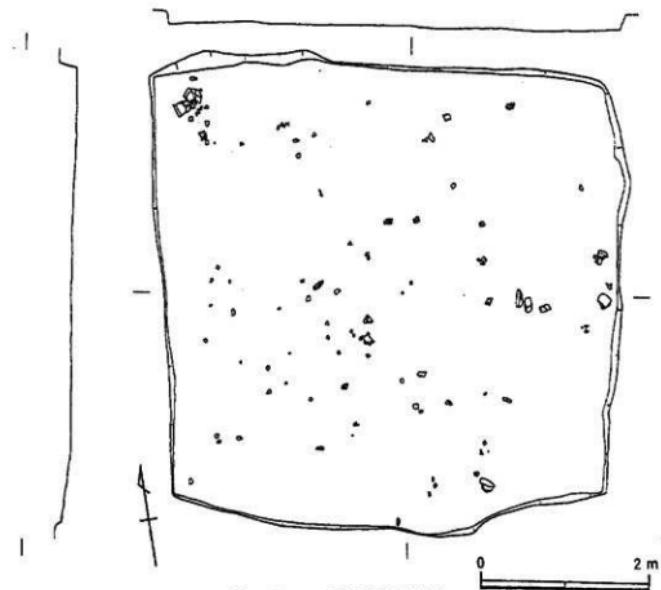
柱穴は検出出来なかった。

##### 2号竪穴住居（第11図）

5.4m×4.5mの方形の竪穴住居で深さ約30cmを残し、東西方向・南北方向の各方位には各辺が平行する。

遺物は、床面からやや浮いた形で検出され、甕と石器が出土した。

柱穴は検出出来なかった。



第12図 3号住居実測図

### 3号堅穴住居（第12図）

5.6m×5.4mの方形の堅穴住居で深さ約20cmを残し、東西方向・南北方向の各方位には各辺が平行する。

遺物は、床面からやや浮いた形で検出され、壺・高杯と石器が出土した。

柱穴は検出出来なかった。

### 4号堅穴住居（第13図）

4.7m×4mの方形の小型の堅穴住居と7.5m程度の方形で大型の堅穴住居が切り合っていると思われるが、大型の住居は約半分が調査区から外れていたために住居との確信は得られなかった。両住居共に、東西方向・南北方向の各方位には各辺が平行する。

遺物は、床面からやや浮いた形で検出され切り合い部分に集中していた。壺・壺・高杯・鉢が出土した。

柱穴は検出出来なかった。

### 5号堅穴住居（第13図）

直径9.8mの花弁型の堅穴住居で深さ約20cmを残すが、南東から中央部にかけての約3分の1と南西部の壁に搅乱を受けている。間仕切を現状で5箇所に残し、柱穴が南、西のほか中央に検出された。原型は4本柱で北半分に間仕切を持つものと思われる。

遺物は、床面からやや浮いた形で検出され、中央部の赤色に焼けた部分に集中していた。壺・壺・鉢が出土した。

柱穴は、間仕切の前に2箇所で検出された。

### 1号土坑

アカホヤ層を除去する際に発見したため、上端をカットしている。楕円の上坑であったと思われる。

出土遺物としては、壺・壺であり、貯蔵穴と思われる。

### 2号土坑

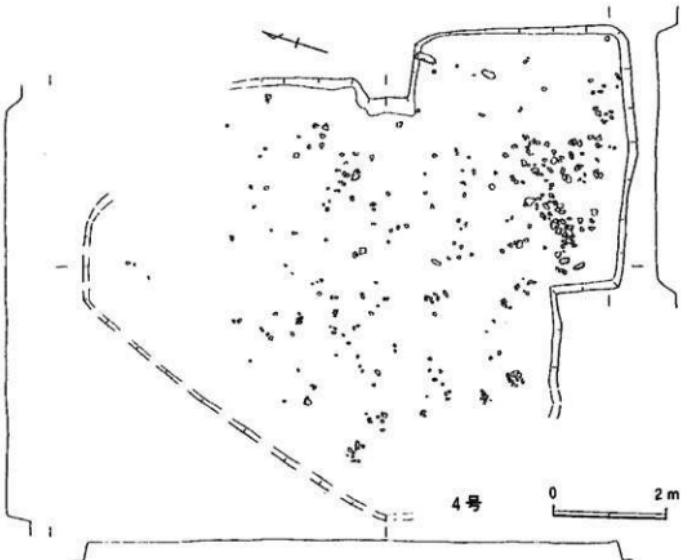
アカホヤ層を除去する際に発見したため、上端をカットしている。楕円の土坑であったと思われる。

出土遺物としては、壺・壺であり、土器敷き土坑若しくは貯蔵穴と思われる。

### 溝状遺構

調査区南東端に一部検出された溝状遺構で、全容は不明である。

出土遺物としては、壺・壺がある。



第13図 4・5号住居実測図

## 2) 遺物

### A. 土器 (第14~19図)

2号住居・4号住居は弥生時代中期、1号住居・3号住居・5号住居は後期のものである。

#### 1号堅穴住居出土土器 (第14図)

57は壺で口縁部を平にし3本の沈線を巡らす。58~60は壺で、口縁がくの字外反するもので屈曲部に稜を持ち、59は刻目突帯を持つ。61は小型の高坏で口縁端部を逆L字状に幅広く作る。62は壺で径約13cmと小型である。63は壺の底部、64は小型の器台である。

#### 2号堅穴住居出土土器 (第14図)

57は壺で口縁端を平にし3本の沈線を巡らす。66~69は壺で、逆L字状の口縁である。65は肩に沈線を入れ、66、67は山形、68は刻目突帯を持つ。

#### 3号堅穴住居出土土器 (第15図)

70~73は壺で、口縁がくの字外反するもので屈曲部に稜を持ち、胴部の張りが強い。74は小型の高坏で脚裾の狭い台付鉢的なものである。

#### 4号堅穴住居出土土器 (第15・16図)

75~79は壺で、75、76は口縁部がラッパ状、77は直線的である。80~85は壺で、80~82は口縁がくの字外反するもので屈曲部に稜を持ち、底部がやや上げ底となる。83は口縁半ばから強く外反させるもので短頸壺の可能性もある。84、85は壺で、逆L字状の口縁である。84は肩に沈線を入れ、85は山形突帯を持つ。86は壺である。87は小型の高坏で口縁端部、脚部に横方向の沈線を入れ、裾部に縱の刻みを入れる。88は高坏の脚裾部である。89~95は底部で壺の底部は平底、壺の底部はやや上げ底である。

#### 5号堅穴住居出土土器 (第17・18図)

96~98、104、107は壺で、96、104は口縁がくの字外反し屈曲部に稜を持ち、逆卵型の胴部である。97、98は口縁が大きくなる字外反し、屈曲部の稜はやや不明瞭で、逆三角形胴部である。99~103は壺で、99は直線的、100はラッパ状の口縁で頸部に三角突帯を持つ。胴部には逆卵型と球型がある。105は台付鉢で径11cmと小型である。106は壺で径11cmである。

#### 1号土坑出土土器 (第19図)

108、109は共に壺で、口縁は不明である。

### 2号土坑出土土器（第19図）

110～113は壺で、逆L字状の口縁である。110はII線がくの字気味で、111は三角突帯を持つ。113は厚みのある底部である。

### 溝状遺構出土土器（第19図）

114はII線がくの字外反し屈曲部に稜を持つもので、115は薄手で口縁がほぼ直角に外反する。116は壺の底部である。

## B. 石 器（第20図）

石器は住居から、磨石・敲石・凹石・台石が出土している。

117は磨石、118は敲石で1号住居出土である。

119は敲石、120は台石で2号住居出土である。

121は凹石で敲石としても使用、122は台石で3号住居出土である。

123、124は台石で4号住居出土である。

125は敲石、126は磨石、127、128は凹石で5号住居出土である。

## 5. その他の遺物（第21図）

133～136は不明土坑出土の坏である。

133は径12cmでヘラ切りの後ナデている。

134は径7.6cmで糸切り底である。

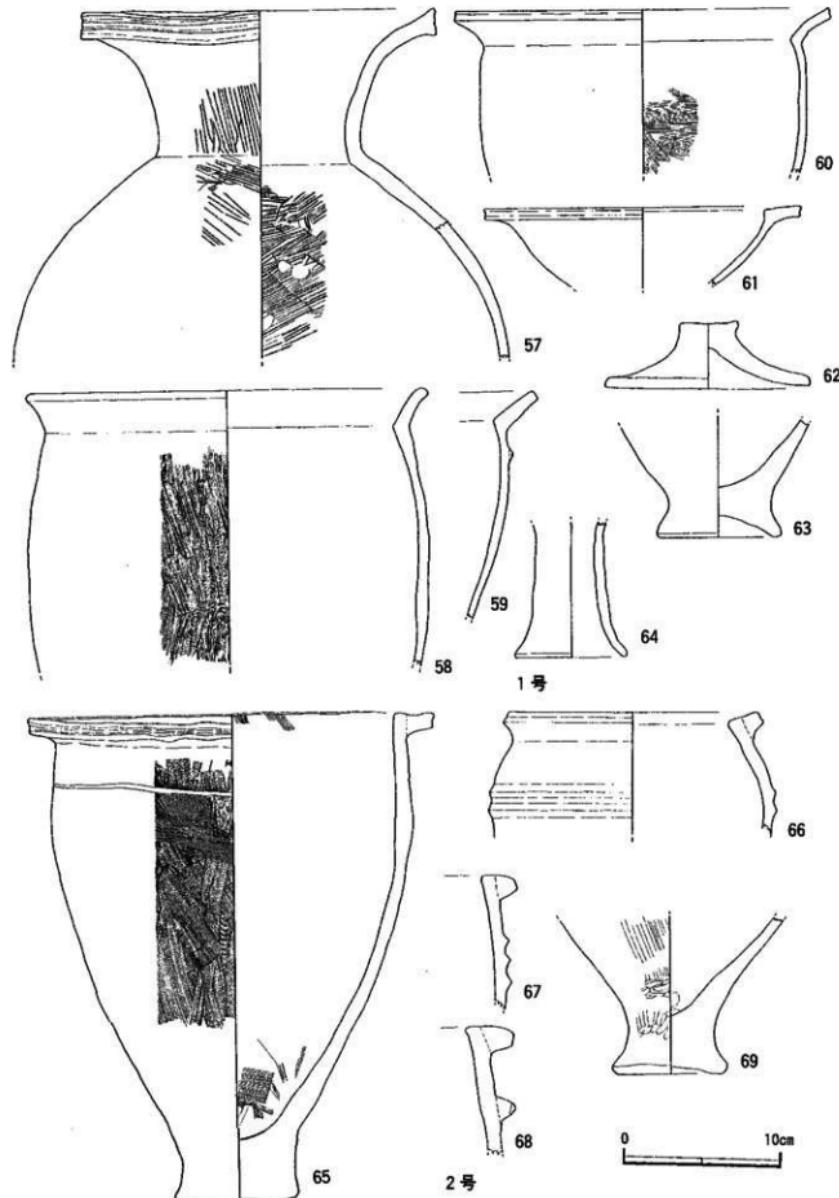
135は径9cmでヘラ切り底である。

136は径7.6cmの糸切り底で、墨書きが見られる。

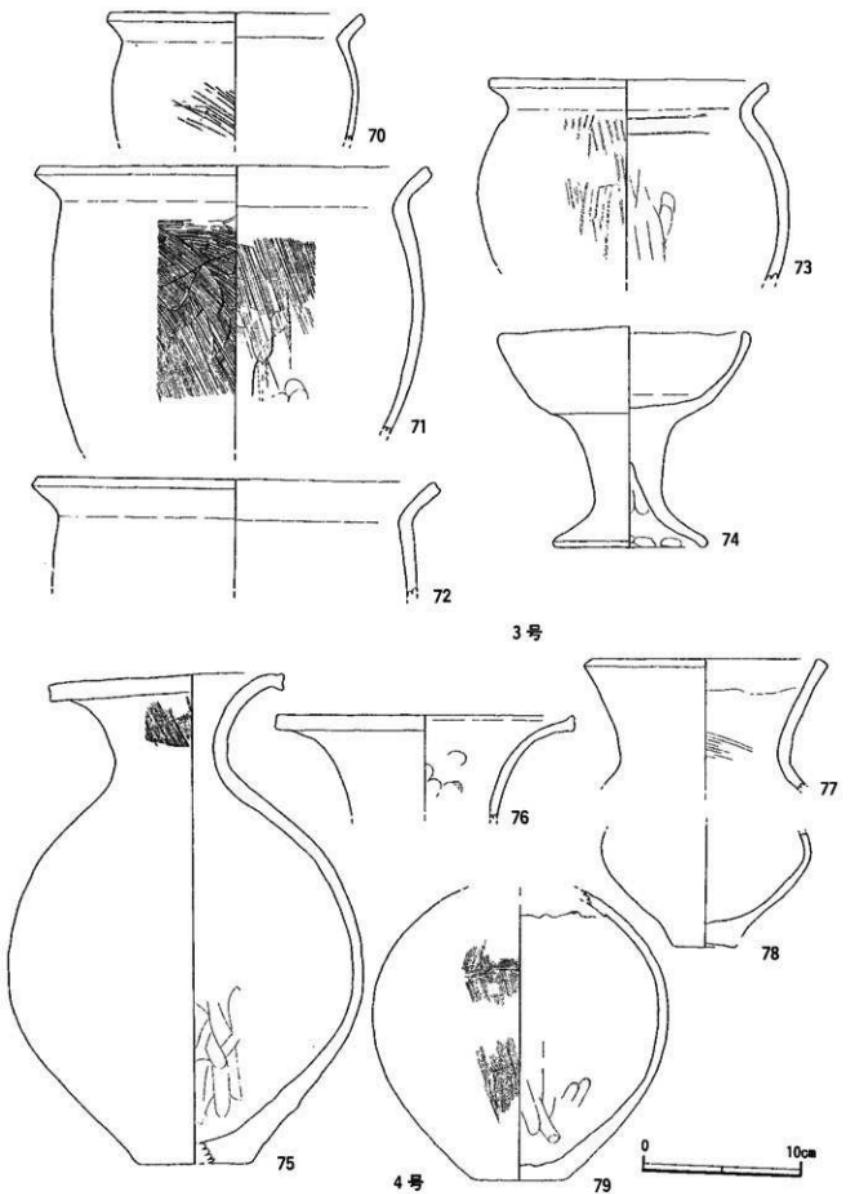
137・138は、表採品である。

137は大型の石斧であるが、基部を欠損し、刃部は不整形である。弥生時代のものと考えられる。

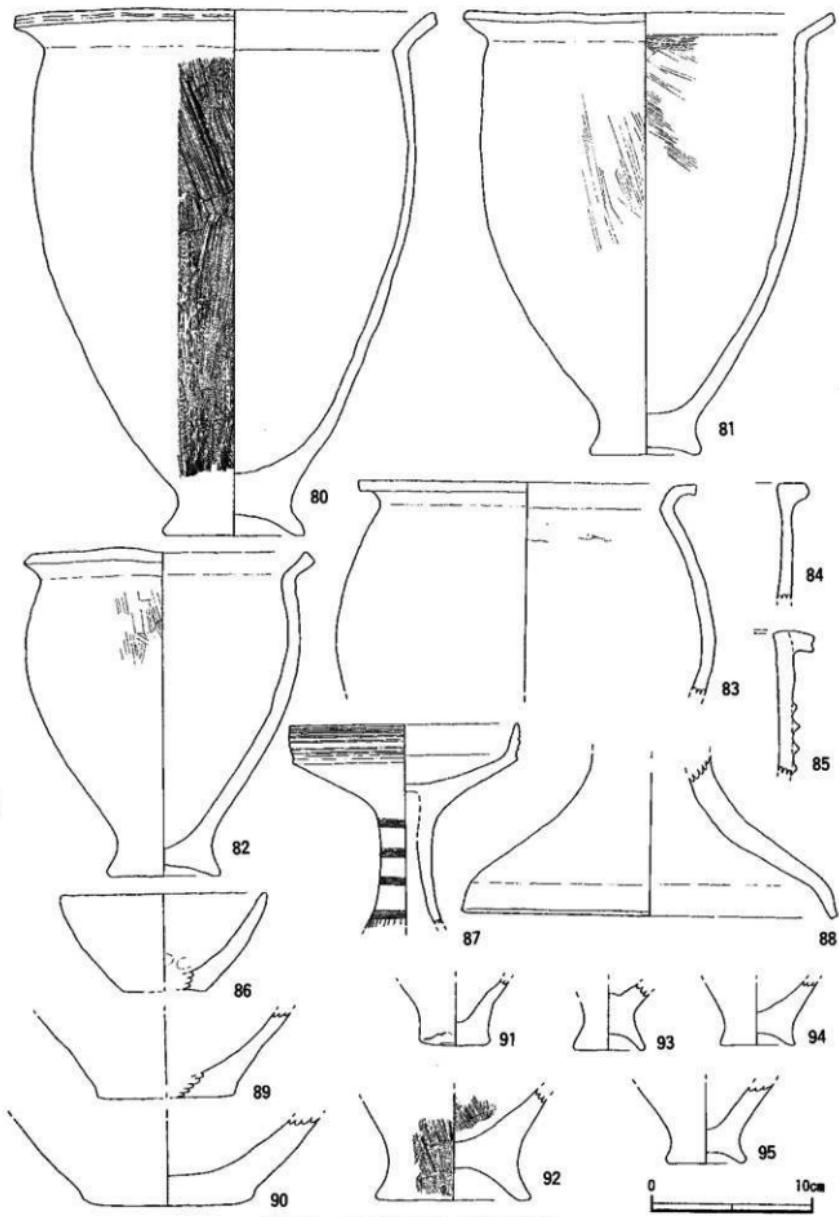
138は小型の勾玉で、偏平な形状をしており、穿孔を両側から施している。縄文時代のものと思われる。



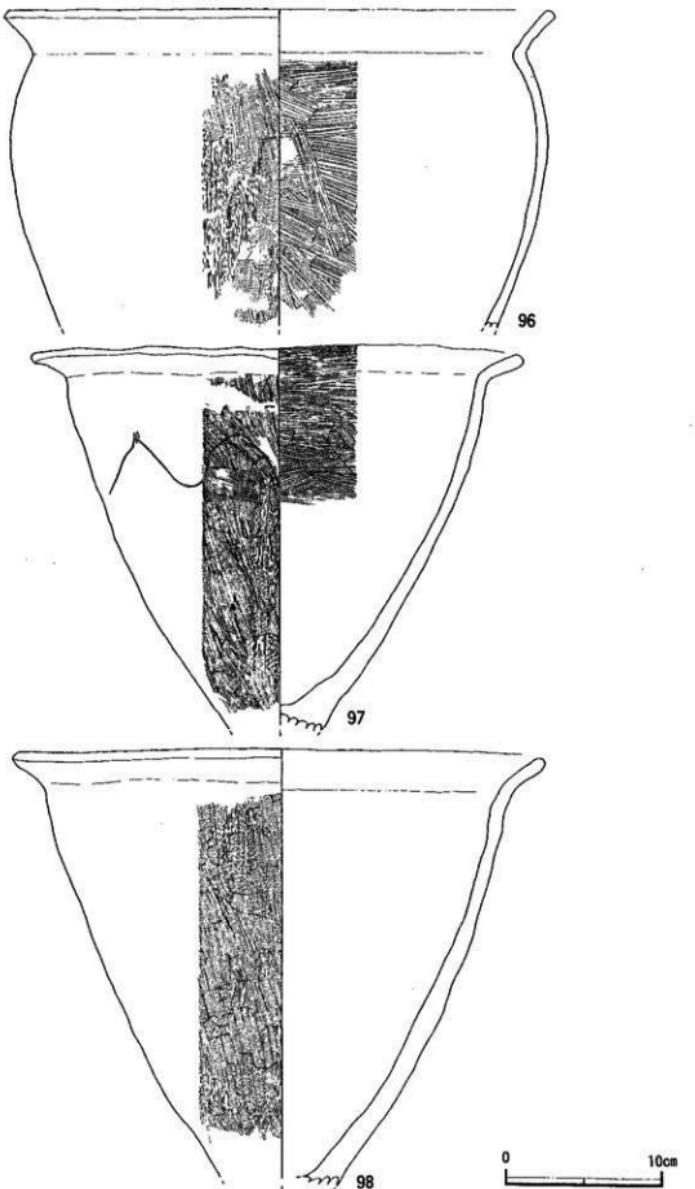
第14図 1・2号住居出土土器実測図



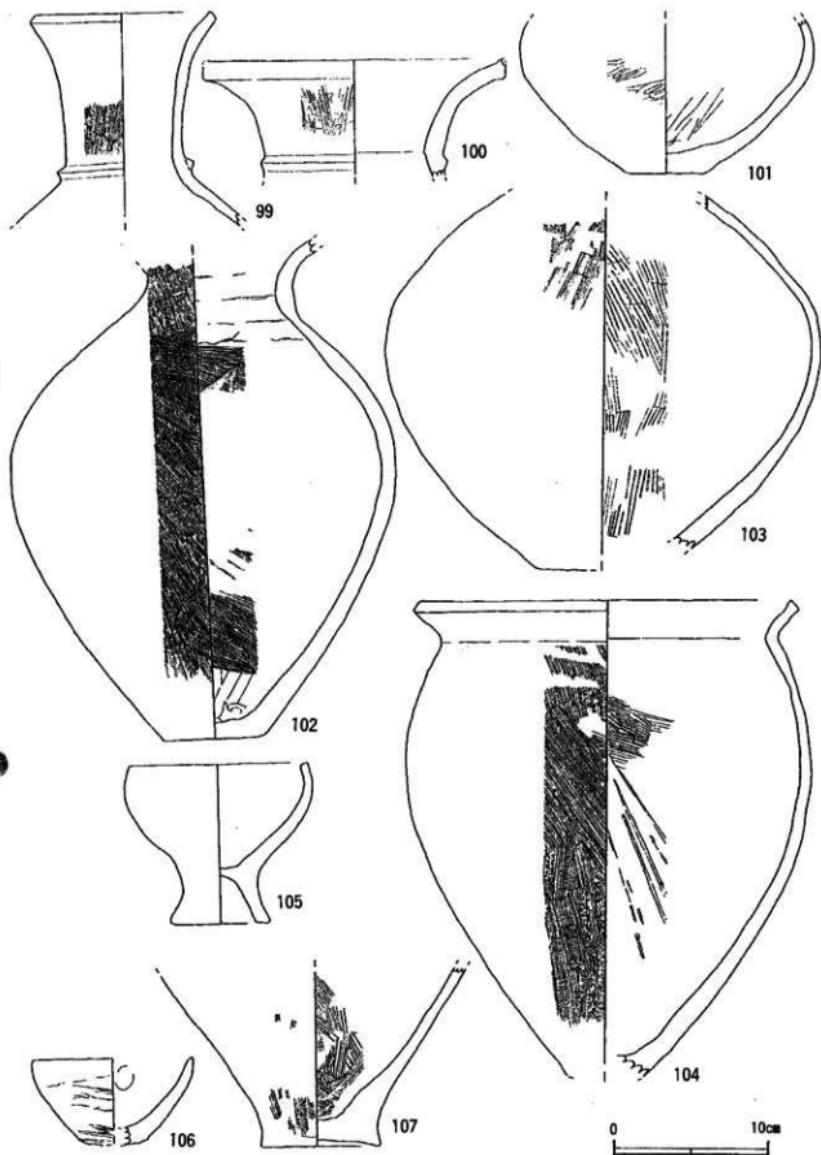
第15図 3・4号住居出土土器実測図



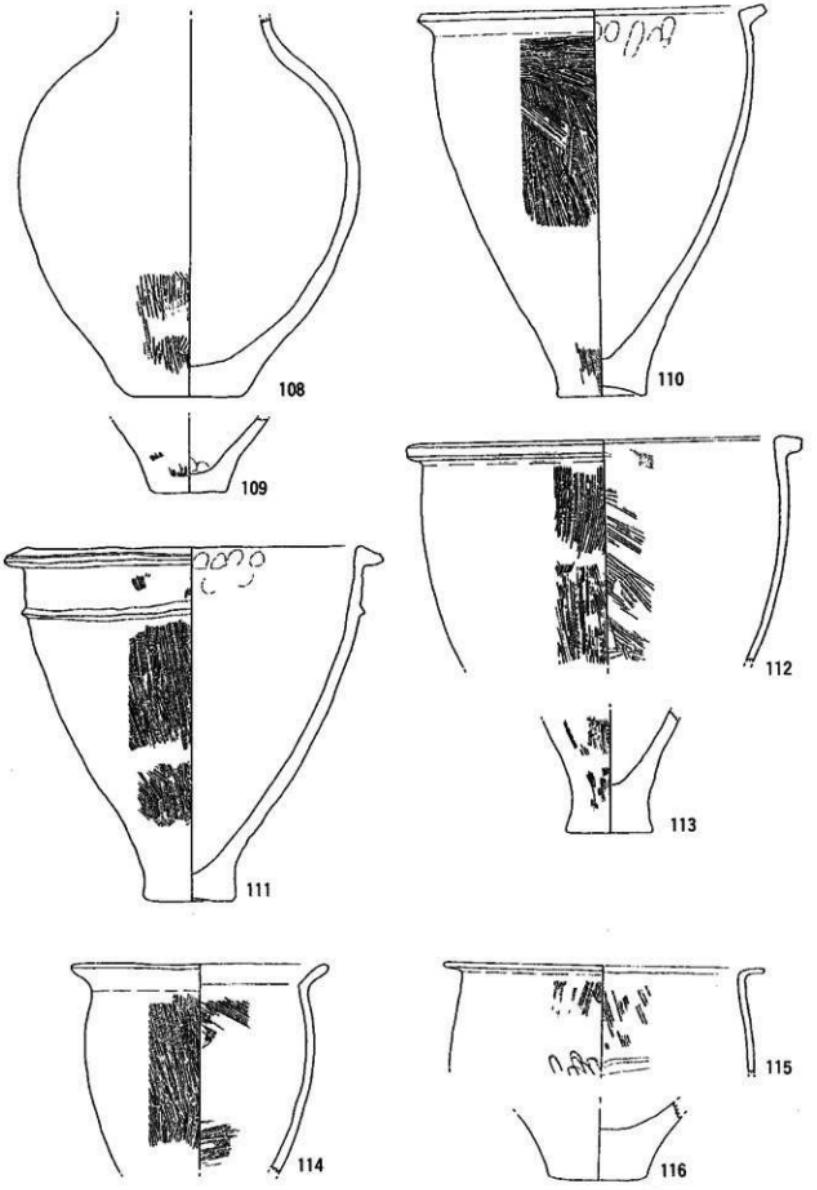
第16図 4号住居出土土器実測図



第17図 5号住居出土土器実測図

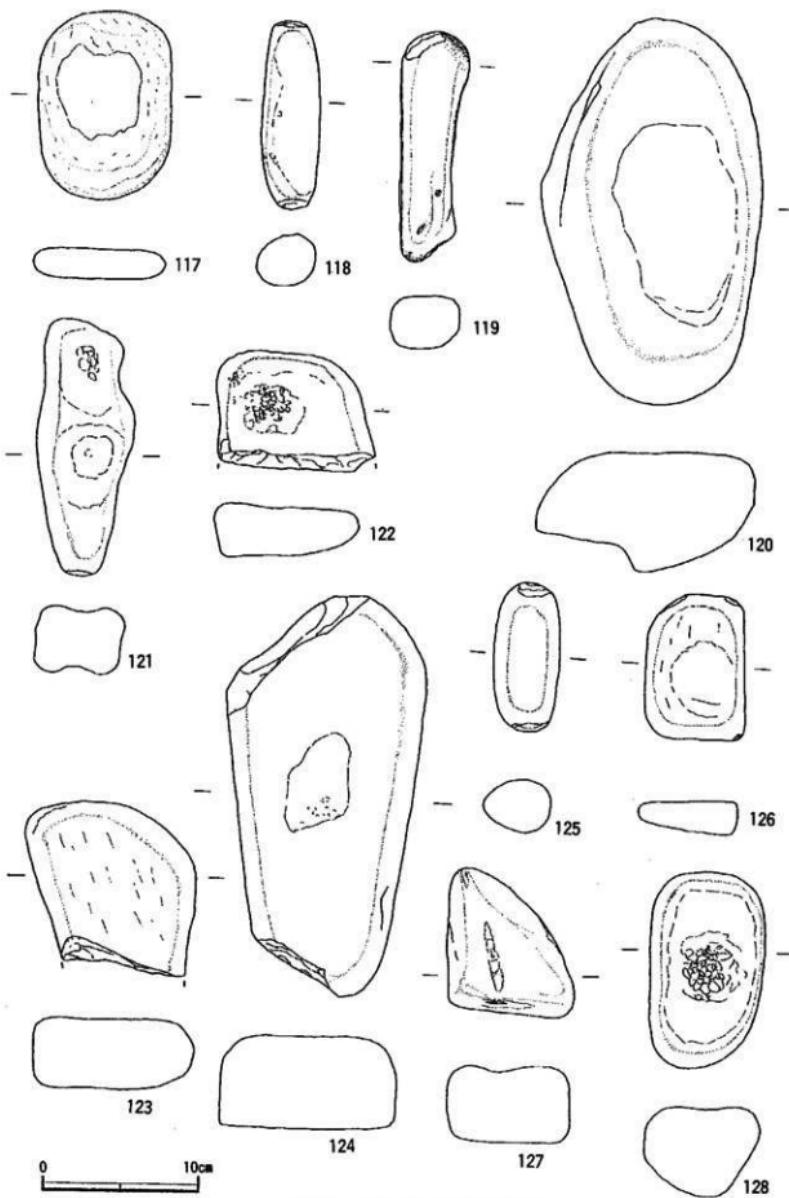


第18図 5号住居出土土器実測図

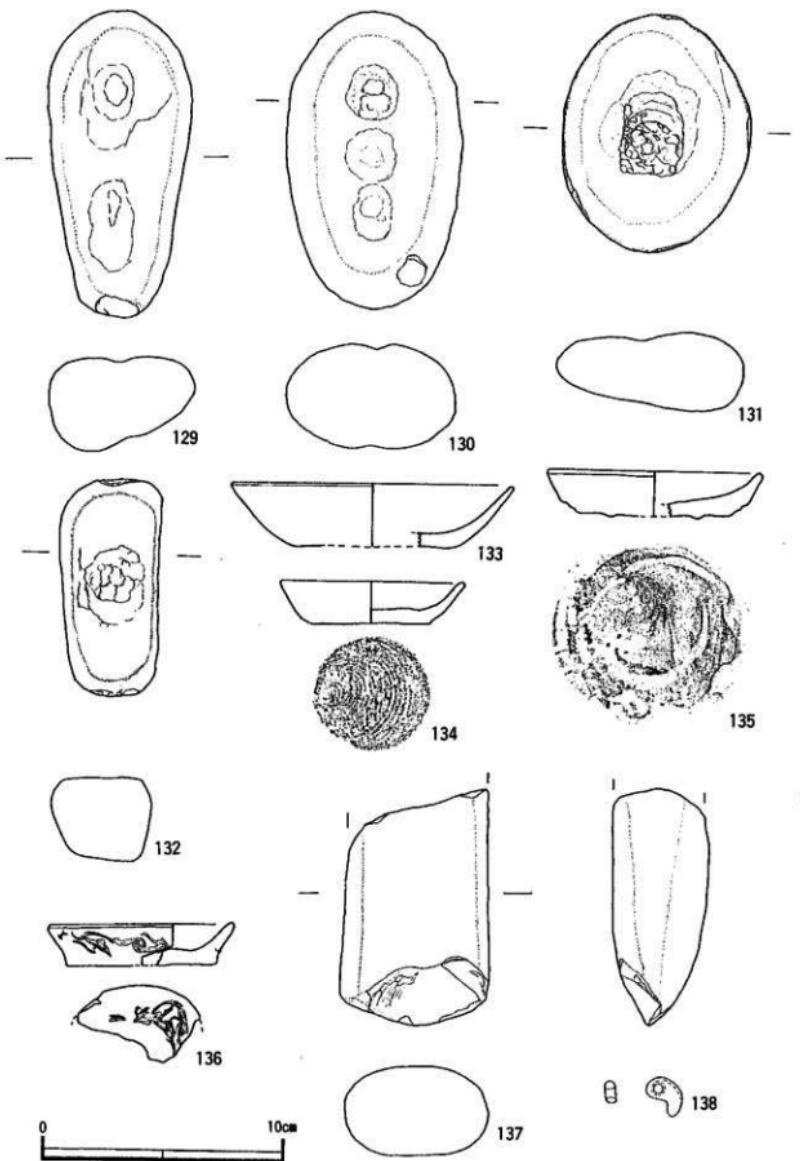


第19図 出土土器実測図

0 10cm



第20図 住居出土石器実測図



第21図 出土遺物実測図

## 6. 小 結

車坂第1遺跡の縄文時代早期について特徴として言えることは、1. 土器・漆の出土量が少なく、遺跡北側、東側の出土がほとんど見られない点、2. 押型文土器の出土率がかなり高い点である。

1については、本遺跡が丘陵の南側斜面近くに位置しているうえ、東側には車坂城という中世山城があったということから、旧地形は尾根筋が本遺跡を取り巻くように北側に延びた窪地的な場所であったためと思われる。言い換れば宮崎学園都市遺跡群、車坂・山下遺跡群の中でも最も東南端の遺跡ということである。

2については押型文土器の一時的な使用か、継続的な使用かが問題となるが限られた資料では判断できなかった。

弥生時代について見ると、逆L字状の口縁を持つ壺等から中期中葉頃に利用が始まると思われる。住居としては花弁型住居、方形住居の2通りがあり、方形住居は大きさが全て異なっており、それぞれの住居の関係が問題となる。

各住居出土の遺物を見ると壺の口縁形態から中期中葉と後期の前葉頃の2時期に比定され、2号・4号住居からは中期中葉の土器片が出土している点と、2号・4号は共に小型であること、1号・3号・5号住居からは後期前半の土器が出土し、大型であることが留意される。土器片の出土のみで判断するのは危険だが、2号住居と3号住居が近接する事も考え合わせると、この住居間の大小の差は時期差に因るものと思われ、中期後葉から後期にかけて住居が大型化すると考えられる。また、住居間の規模の差が時期差でない場合は集落における住居規模の差が持つ意味が今後の課題となる。

いずれにしても、円形の花弁型住居と方形の住居が共存していることに変わり無い訳であり、間仕切を持つ住居と持たない住居の性格の差の解明も今後の課題である。

その他の時代については、遺構に伴わない遺物であるが、ヘラ切りや糸切り底の壺が出土し、中でも記載内容は判別出来ないが墨書きされた糸切り底の壺は、中世山城の車坂城との関係を想起させる資料と思われる。

余談ではあるが、本遺跡の調査は9月の一箇月に3週連続して台風に襲われ、その度毎に泥に埋没した遺構を作業員の皆様に掘り上げて頂いたのが、その際に弥生時代や古墳時代等も台風が来ると家が埋まって使えなくなるだろうから、家の周囲にはかなりの盛土や溝切りが必要で有ったろうと感じ、何故それが検出出来ないか不思議に思った次第である。

第1表 土器観察表

番号	部 位	調 整	文 様	色 調	胎 土	備 考
1	胴 部	内面 条痕 外面 斜め条痕	— —	黄褐色 々	3mm以下の砂粒を含む	
2	口縁部	内面 ナデ 外面 タ	— 櫛状施文具による綾杉文	明褐色 々	4mm以下の砂粒を含む	
3	口縁部	内面 鈎形条痕 外面 ナデ	— 櫛状施文具による綾杉文	黄褐色 々	1mm以下の砂粒を含む	
4	口縁部	内面 ヨコナデ 外面 ナデ	櫛状施文具による綾杉文 櫛状施文具による綾杉文	明褐色 々	1mm以下の砂粒を含む	
5	口縁部	内面 ヨコナデ 外面 ナデ	櫛状施文具による綾杉文 櫛状施文具による綾杉文	暗褐色 々	1mm以下の砂粒を含む	
6	口縁部	内面 ナデ 外面 タ	櫛状施文具による流文水	暗褐色 々	5mm以下の砂粒を含む	
7	口縁部	内面 ナデ 外面 タ	櫛状施文具による流文水	暗黄褐色 々	3mm以下の砂粒を含む	
8	胴 部	内面 ナデ 外面 タ	櫛状施文具による流文水	暗黄褐色 々	2mm以下の砂粒を含む	
9	胴 部	内面 ナデ 外面 タ	櫛状施文具による流文水	暗橙色 —	0.5mm以下の砂粒を含む	
10	胴 部	内面 ナデ 外面 タ	櫛状施文具による格子文	明黄褐色 橙色	5mm以下の砂粒を含む	
11	口縁部	内面 ヨコナデ 外面 ナデ	— 貝殻腹縁の刺突: 綾杉文	明褐色 暗褐色	2mm以下の砂粒を含む	
12	胴 部	内面 ナデ 外面 タ	貝殻腹縁の押引状	暗褐色 —	2mm以下の砂粒を含む	
13	口縁部	内面 ナデ 外面 タ	ヘラ状施文具による綾杉文	暗褐色 々	1mm以下の砂粒を含む	
14	口縁部	内面 ナデ 外面 タ	ヘラ状施文具による綾杉文	褐色 暗赤褐色	1mm以下の砂粒を含む	
15	胴 部	内面 ナデ 外面 タ	ヘラ状施文具による綾杉文	暗赤褐色 々	4mm以下の砂粒を含む	
16	口縁部	内面 ナデ 外面 タ	横円押型	暗黄橙色 々	2mm以下の砂粒を含む	
17	口縁部	内面 ヨコナデ 外面 ナデ	横円押型	褐色 々	1mm以下の砂粒を含む	
18	口縁部	内面 ナデ 外面 タ	横円押型 横円押型・口唇部に刻み	黄褐色 明赤褐色	5mm以下の砂粒を含む	
19	口縁部	内面 ナデ 外面 タ	横円押型	褐色 々	1mm以下の砂粒を含む	
20	胴 部	内面 ナデ 外面 タ	横円押型	オリーブ褐色 赤褐色	1mm以下の砂粒を含む	
21	底 部	内面 ナデ 外面 タ	— 横円押型	黄褐色 暗褐色	2mm以下の砂粒を含む	網代底
22	口縁部	内面 ナデ 外面 タ	山形押型・口唇部に刻み 山形押型	暗黄褐色 々	3mm以下の砂粒を含む	
23	口縁部	内面 ヨコナデ 外面 ナデ	— 山形押型	橙色 明黄褐色	2mm以下の砂粒を含む	
24	口縁部	内面 ナデ 外面 ヨコナデ	山形押型 —	黄褐色 —	3mm以下の砂粒を含む	
25	胴 部	内面 ナデ 外面 タ	山形押型	暗黄褐色 々	2mm以下の砂粒を含む	
26	胴 部	内面 ナデ 外面 タ	山形押型	暗褐色 暗赤褐色	5mm以下の砂粒を含む	
27	口縁部	内面 ナデ 外面 タ	— 口唇部に刻み	暗褐色 々	0.5mm以下の砂粒を含む	

番号	器種	調整	色調	胎土	備考
57	壺	内面ナデ 外面タ	褐色 淡褐色	2mm以下の砂粒を含む	口縁端に沈線
58	壺	内面口縁部ナデ 外面ハケ	褐色 暗黄褐色	2mm以下の砂粒を含む	
59	壺	内面ナデ 外面ハケ後ナデ	暗褐色 タ	2mm以下の砂粒を含む	刻目貼付突帯
60	壺	内面ハケ・ナデ 外面ナデ	暗黄褐色 タ	2mm以下の砂粒を含む	
61	高坏	内面ナデ 外面タ	暗褐色	2mm以下の砂粒を含む	
62	壺	内面ナデ 外面タ	暗黄褐色 明黄褐色	5mm以下の砂粒を含む	
63	壺	内面ナデ 外面ハケ後ナデ	灰褐色 暗黄褐色	2mm以下の砂粒を多く含む	
64	器台	内面ナデ 外面タ	灰褐色 黄灰褐色	3mm以下の砂粒を含む	
65	壺	内面ハケ、口縁部ナデ 外面タ	淡褐色 タ	5mm以下の砂粒を含む	肩部に沈線
66	壺(京)	内面ナデ 外面タ	暗黄褐色 タ	2mm以下の砂粒を含む	胴部に貼付突帯
67	壺	内面ナデ 外面タ	灰褐色 暗黄褐色	2mm以下の砂粒を含む	貼付突帯3本
68	壺	内面ナデ 外面タ	明赤褐色 タ	3mm以下の砂粒を含む	刻目貼付突帯
69	壺	内面丁寧なナデ 外面荒いミガキ	赤色 暗赤色	2mm以下の砂粒を含む	丹塗りか
70	壺	内面ナデ 外面ハケ、ナデ	暗黄褐色 タ	3mm以下の砂粒を含む	スス付着
71	壺	内面ハケ、口縁部ナデ 外面タ	淡褐色 タ	3mm以下の砂粒を含む	スス付着
72	壺	内面ナデ 外面ハケ、ナデ	暗黄褐色 タ	2mm以下の砂粒を含む	スス付着
73	壺	内面ナデ 外面ハケ、ナデ	褐色 タ	3mm以下の砂粒を含む	全面スス付着
74	高坏	内面ナデ 外面タ	暗褐色 茶褐色	4mm以下の砂粒を多く含む	指頭痕有
75	壺	内面ナデ 外面ハケ、ナデ	灰黑色 茶褐色	2mm以下の砂粒を含む	
76	壺	内面ナデ 外面タ	暗褐色 明赤褐色	3mm以下の砂粒を含む	
77	壺	内面ハケ、ナデ 外面不明	暗黄褐色 暗赤褐色	2mm以下の砂粒を含む	
78	壺	内面ナデ 外面ハケ、ナデ	黄褐色 暗赤色	2mm以下の砂粒を多く含む	丹塗りか
79	壺	内面ナデ 外面ハケ、ナデ	暗褐色 タ	2mm以下の砂粒を含む	
80	壺	内面ナデ 外面ハケ、口縁部ナデ	褐色 タ	3mm以下の砂粒を含む	
81	壺	内面ハケ、口縁部ナデ 外面タ	褐色 タ	4mm以下の砂粒を含む	やや上底
82	壺	内面ナデ 外面ハケ、口縁部ナデ	淡褐色 褐色	4mm以下の砂粒を含む	やや上底
83	壺	内面ナデ 外面タ	黄褐色 黑褐色	2mm以下の砂粒を含む	スス付着
84	壺	内面ナデ 外面タ	黄褐色 赤褐色	3mm以下の砂粒を含む	肩部に沈線

番号	器種	調 整	色 調	胎 土	備 考
85	壺	内面 ハケ、口縁部ナデ 外面 ナデ	暗 橙 色 黄 橙 色	2mm以下の砂粒を含む	貼付突帯4本
86	塊	内面 ナデ 外面 タ	暗 赤 極 色 タ	4mm以下の砂粒を含む	
87	高 坏	内面 ナデ 外面 ナデ、研磨	明 赤 極 色 タ	4mm以下の砂粒を含む	脚部に沈線、割み
88	高 坏	内面 ナデ 外面 タ	暗 橙 色 タ	2mm以下の砂粒を含む	
89	壺	内面 ナデ 外面 タ	暗 橙 色 淡 黒 色	5mm以下の砂粒を含む	
90	壺	内面 ナデ 外面 タ	淡 黑 色 暗 極 色	3mm以下の砂粒を含む	
91	壺	内面 ナデ 外面 タ	暗 黄 橙 色 暗 黄 極 色	3mm以下の砂粒を含む	
92	壺	内面 ハケ 外面 ハケ、底部ナデ	褐 色 黄 橙 色	3mm以下の砂粒を含む	
93	壺	内面 ナデ 外面 タ	暗 極 色 タ	3mm以下の砂粒を含む	
94	壺	内面 ナデ 外面 タ	暗 橙 色 赤 極 色	2mm以下の砂粒を含む	
95	壺	内面 ナデ 外面 タ	暗 極 色 黄 極 色	2mm以下の砂粒を含む	
96	壺	内面 ハケ、口縁部ナデ 外面 タ	褐 色 タ	2mm以下の砂粒を含む	
97	壺	内面 ハケ 外面 ハケ、口縁部ナデ	褐 色 暗 褐 色	4mm以下の砂粒を含む	山形沈線 スス付着
98	壺	内面 ナデ 外面 ハケ、口縁部ナデ	茶 褐 色 褐 色	3mm以下の砂粒を含む	スス付着
99	壺	内面 ナデ 外面 ハケ、丁寧なナデ	暗 橙 色 タ	2mm以下の砂粒を含む	頭部欠帶
100	壺	内面 ナデ 外面 タ	暗 橙 色 タ	4mm以下の砂粒を含む	頭部突帯
101	壺	内面 ナデ 外面 研磨	淡 黑 色 明 黄 褐 色	2mm以下の砂粒を含む	
102	壺	内面 ハケ、ナデ 外面 ハケ	褐 色 タ	2mm以下の砂粒を含む	スス付着
103	壺	内面 ハケ、ナデ 外面 タ	灰 褐 色 褐 色	4mm以下の砂粒を含む	スス付着
104	壺	内面 ハケ、口縁部ナデ 外面 タ	褐 色 タ	3mm以下の砂粒を含む	スス付着
105	台付鉢	内面 ナデ 外面 タ	暗 黄 褐 色 タ	3mm以下の砂粒を含む	
106	塊	内面 ナデ 外面 タ	暗 黄 極 色 タ	3mm以下の砂粒を含む	
107	壺	内面 ハケ 外面 タ	暗 極 色 赤 褐 色	3mm以下の砂粒を含む	
108	壺	内面 ナデ 外面 ハケ	茶 褐 色 タ	2mm以下の砂粒を含む	
109	壺	内面 ナデ 外面 ハケ、ナデ	暗 黄 極 色 暗 褐 色	2mm以下の砂粒を含む	
110	壺	内面 ナデ 外面 ハケ、口縁部ナデ	赤 褐 色 タ	3mm以下の砂粒を含む	
111	壺	内面 ナデ 外面 ハケ、口縁部ナデ	褐 色 タ	4mm以下の砂粒を含む	貼付突帯
112	壺	内面 ハケ、口縁部ナデ 外面 タ	茶 褐 色 タ	2mm以下の砂粒を含む	スス付着

番号	器種	調整	色調	胎土	備考
113	壺	内面 不明 外面 ハケ、ナデ	灰褐色 暗赤褐色	2mm以下の砂粒を含む	
114	壺	内面 ハケ、ナデ、口縁部ナデ 外面 タ	暗赤褐色	3mm以下の砂粒を含む	スス付着
115	壺	内面 ハケ、ナデ 外面 タ	暗橙色	2mm以下の砂粒を含む	
116	壺	内面 不明 外面 丁寧なナデ	赤橙色 赤褐色	1mm以下の砂粒を多量に含む	スス付着

133	坏	内面 ナデ 外面 タ	暗橙色 タ	1mm以下の砂粒を含む	
134	坏	内面 ナデ 外面 タ	橙色 タ	2mm以下の砂粒を含む	糸切底
135	坏	内面 ナデ 外面 タ	橙色 タ	1mm以下の砂粒を含む	ヘラ切成
136	坏	内面 ナデ 外面 タ	暗橙色 タ	0.5mm以下の砂粒を含む	ヘラ切底 墨書有

第2表 石器観察表

番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
28	石鎌	2.4	1.5+α	0.35	0.97	黒曜石	
29	石鎌	1.55+α	1.55	0.35	0.57	黒曜石	
30	石鎌	2.7	1.2	0.5	1.25	チャート	
31	石鎌	1.8+α	1.85+α	0.4	1.15	チャート	
32	石鎌	1.5	1.3	0.4	0.52	頁岩	
33	石鎌	1.9+α	1.6	0.45	0.86	チャート	
34	石鎌	1.9	1.7	0.45	0.91	チャート	
35	石鎌	1.65	1.5	0.4	0.77	チャート	
36	石鎌	1.75	1.65+α	0.35	0.52	チャート	
37	石鎌	1.8+α	1.45+α	0.3	0.46	チャート	
38	石鎌	2.05+α	1.2	0.2	0.44	チャート	
39	石鎌	2.2+α	2.05	0.45	1.45	チャート	
40	石鎌	3.9	2.55	0.3	2.58	チャート	
41	石鎌	1.7+α	2.1	0.4	1.06	チャート	
42	石鎌	1.7+α	0.8+α	0.3	0.47	黒曜石	
43	石鎌	1.95+α	1.8+α	0.35	0.94	チャート	
44	石鎌	2.4+α	1.55+α	0.45	1.11	チャート	
45	石鎌	1.55+α	1.65+α	0.45	0.75	黒曜石	
46	石鎌	3.0	1.6+α	0.35	1.29	チャート	
47	石鎌	2.7	1.8	0.35	1.26	チャート	
48	石鎌	2.0	1.7	0.3	0.66	チャート	
49	石鎌	1.7	1.65	0.4	0.75	チャート	
50	石鎌	1.25	1.25	0.2	0.2	黒曜石	
51	石鎌	1.45	1.5	0.25	0.34	黒曜石	
52	石鎌	2.95	1.45	0.4	1.41	チャート	
53	石鎌	1.85	1.7	0.2	0.78	頁岩	
54	石鎌	2.75+α	1.8	0.6	1.83	頁岩	槍先か
55	石鎌	2.5	1.9	0.4	1.87	チャート	

番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
56	石鎌	2.85	1.8+α	0.6	2.89	チャート	

117	磨石	11.9	8.4	1.95	330		
118	敲石	12.0	3.7	3.3	200	砂岩	
119	敲石	14.7	4.6	3.4	342	砂岩	
120	台石	24.6	14.1	7.6		砂岩	
121	凹石	16.3	5.8	4.3	555	砂岩	敲石兼用
122	台石	7.5+α	9.4	3.5	350	砂岩	
123	台石	11.1	10.3	4.5	868	砂岩	
124	台石	25.5	11.5	6.1		砂岩	
125	敲石	9.5	4.4	3.4	212		
126	磨石	9.3	6.3	2.1	189		
127	凹石	9.4	8.0	4.9	575	砂岩	
128	凹石	12.4	7.4	5.7	839	砂岩	
129	敲石	12.8	6.0	3.9	370	砂岩	凹石兼用
130	凹石	12.4	7.0	4.3	530	砂岩	
131	凹石	9.9	7.8	3.3	315	砂岩	敲石兼用
132	凹石	10.5	4.2	3.5	210	砂岩	敲石兼用

137	石斧	9.8	6.0	3.7	360		
138	勾玉	1.7	0.9	4.6	0.15	ヒスイ	

第22図 車坂第2遭陥位置図



### 第3章 車坂第2遺跡の調査

#### 1. 調査の概要（第22図）

本遺跡は、車坂第1遺跡の東に隣接するが、西側を道路に切られ北側をアパートと民家に囲まれた狭い範囲である。また、地元の方の話では当遺跡地は、江戸時代から明治時代までお寺が在ったと云う事であり、その名残が南側斜面に見られ、廻國供養塔や墓石、小さな祠の中に木彫りの仏像が祀られており往時を偲ばせるものがあった。

調査は排土の搬出が不可能であったため調査区を2分割し東側を1区、西側を2区に設定した。更に、縄文時代の調査は北側に3グリッド、南側に2グリッドを設定した。東側の1区には試掘調査のグリッドが残っていたが、遺構を巧く外していた。

土層は南傾斜をしているために、遺跡南側の削平が進み、遺跡西側では赤ホヤ層まで耕作が入っており全体に遺構の残りは良くなかった。

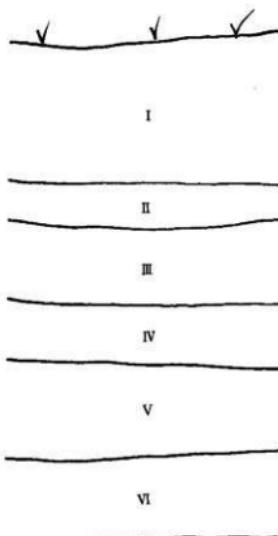
調査の結果、近世以降のお寺に係わると思われる溝状遺構、不明PIT群、弥生時代の住居を4軒、縄文時代早期の土器、集石等を検出した。

#### 2. 層位（第23図）

本遺跡の基本層序は、I層 表土（耕作土）、II層 黒色土、III層 赤ホヤ層、IV層 黄褐色ローム層、V層 黑褐色ローム層、VI層 黄白色ローム層である。

遺跡西側では赤ホヤ層と黒色土が耕作のため搅乱しているうえ、最も西側では黄褐色ローム層まで削平されていた。

遺跡南側では赤ホヤ層は検出されず、弥生時代の竪穴住居が表土直下の黒褐色ローム層で検出された。



第23図 土層図

### 3. 縄文時代の遺物と遺構

#### 1) 遺 構

遺構としては集石が2基検出された。1基は石の密集度が弱く掘り込みを持たないもので、もう1基は石が密集し掘り込みを持ち、掘り込み底部に黒色土が見られるものである。

#### 2) 遺 物 (第24図)

出土した縄文時代の遺物は土器と石器であり、調査区全面から検出された。

#### A. 土 器 (第25・26図)

出土した土器は全て縄文時代早期の土器であり、調整、文様、器形等から次のように分類される。

##### 1類 条痕文土器類

条痕による調整を行うもので、口縁等の調整は不明である。 1~4

##### 2類 ヘラ状施文具による文様を施すもの。

横長の平行文 5、6

##### 3類 貝殻腹縁を口縁に強く刺突するもの。

口唇部に刺み、口縁部に綾杉状の刺突を施す 8

山形口縁で貝殻腹縁刺突を1列施した下に沈線を入れるもの 13

##### 4類 下剥峰式土器類 貝殻腹縁の刺突により文様を施すもの。

口縁端に横位の刺突、胴部に綾杉状の刺突を施すもの 9~12

横位2列の刺突を施すもの 14~16

##### 5類 吉田式土器類 貝殻腹縁で押引を施すもの。

押引が明瞭なもの 17

押引が浅日のもの 18

##### 6類 手向山式土器類

凹線文を施すもの 7

##### 7類 平格式土器類

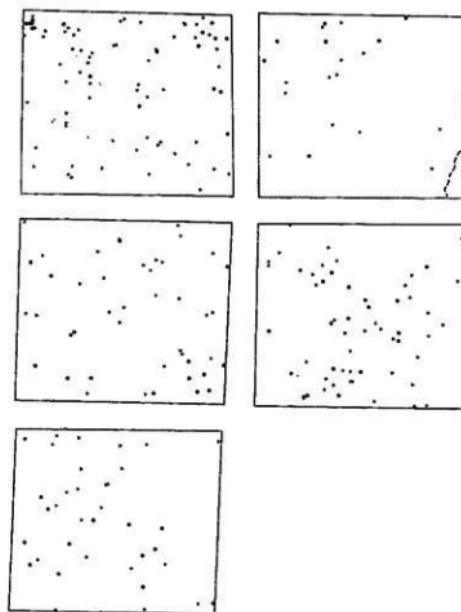
凹線状の沈線と列点文を施すもの 19、20

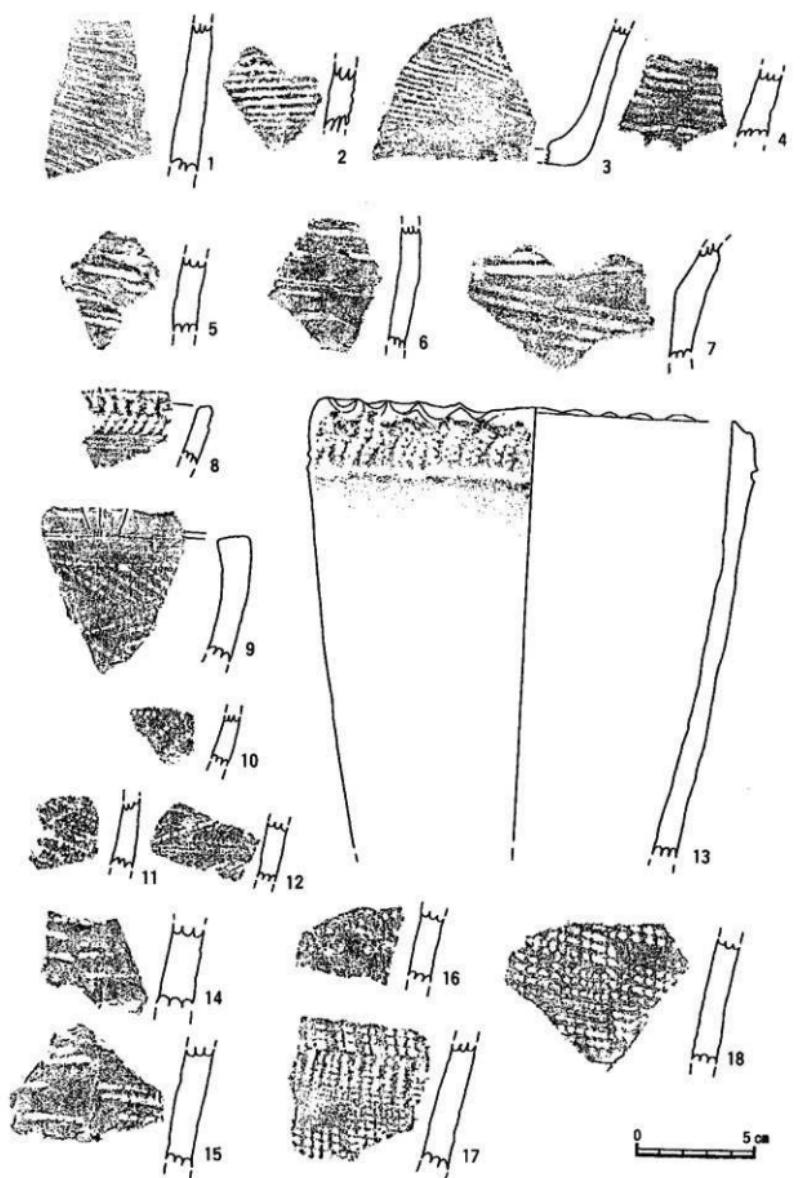
凹線状の沈線と撚糸文を施すもの 21~23

第24圖 出土狀況圖

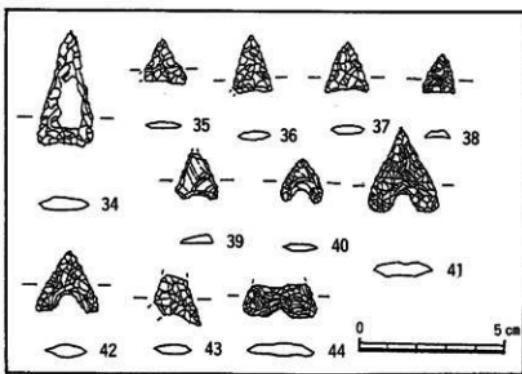
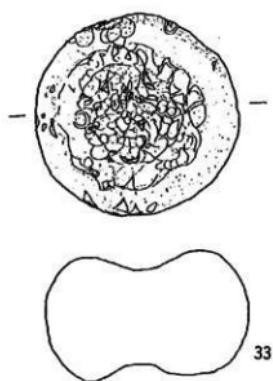
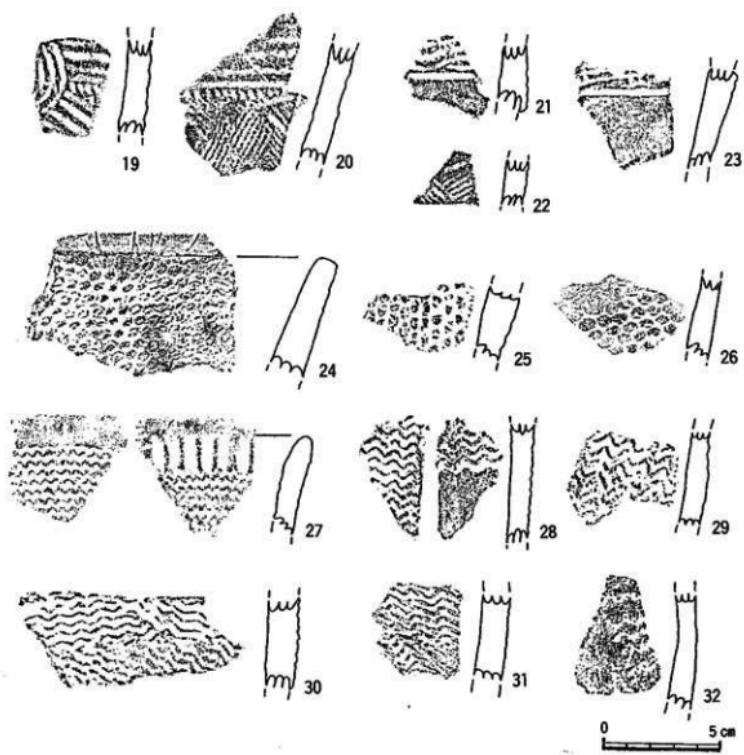
○土器  
△石器

0 5m





第25図 出土土器実測図



第26図 出土遺物実測図

## 8類 押型文土器

- a 楕円押型 外面のみに施文し口縁端から内面はナデである 24、25  
　　椭円形状の明瞭なものがある 26
- b 山形押型 原体の形状により、山形が小さく鋭いもの 27、山形が丸みを帯びたもの 28、  
　　29、山形が帶状になるもの30、31の3種類に分けられる。また、外面口縁部下に無文帶を  
　　設けその下部に施文し、さらに、内面施文は、口唇部に竹管状の押圧文を施しその下部に  
　　施文するものがある。

## 9類 その他の土器

32は貝殻腹線文を平行に施文するものである。

## B 石 器（第26図）

凹石、石鎌が出土している。

33は凹石で両面をかなり使用し、敲石としても使用している。

石鎌は、平基式のもの 35～39、凹基式のもの 40～44が出土している。

比較すると平基式のものが小型で、凹基式のものは多様である。

## 4. 弥生時代の遺構と遺物

### 1) 遺構（第27図）

弥生時代の遺構としては、竪穴住居が4軒検出された。

#### 1号住居（第28図）

調査区南東の端で北側半分ほどを検出した。1辺約4m、壁の残存は約40cmで各辺の方向は方位と平行する。中央部に浅い黒変部が見られたが住居との関係は不明である。

柱穴は検出されなかった。

出土遺物は床面よりやや浮いた形で、壺・甕が出上している。

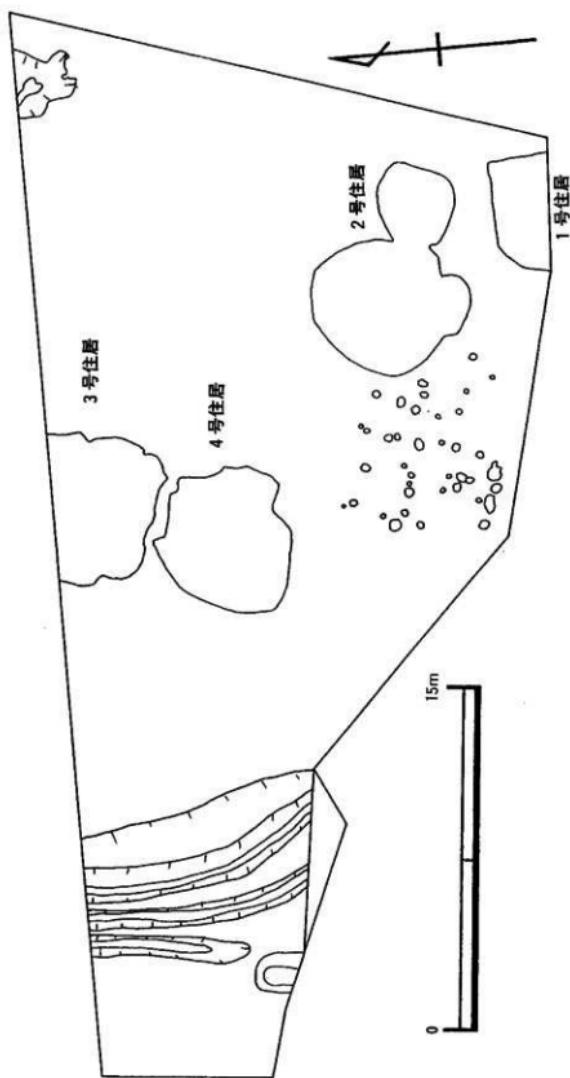
#### 2号住居（第28図）

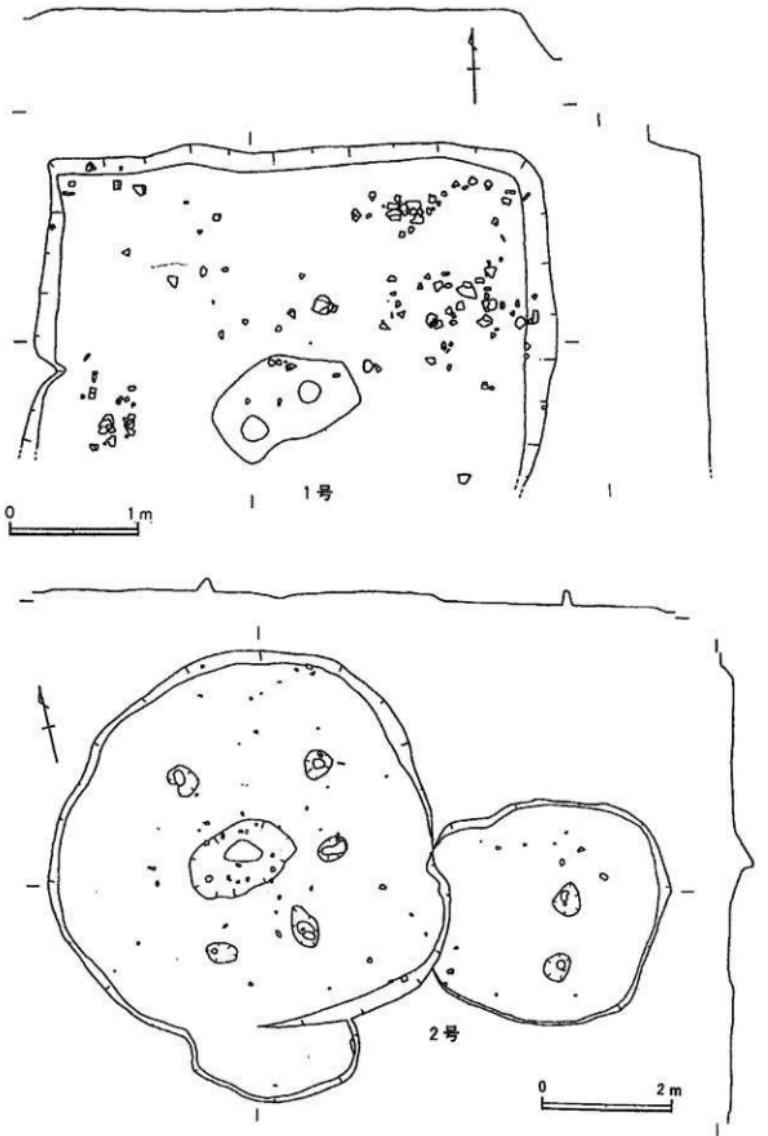
直径約6mの円形住居で、南部に南北1m、東西幅2.6mの間仕切状の突起が付く。また、南東部に径約3.5mの竪穴状遺構が切り合っている。両遺構共に壁の残存は20cm程しかなく先後関係はつかめなかった。

2号住居からは柱穴が5基と中央に1.5m、1.2m、0.3mの炉穴状のものが検出され、竪穴状遺構から柱穴が2基検出されている。2号住居と竪穴状遺構とは、セットとも考えられるが確証は得られなかった。

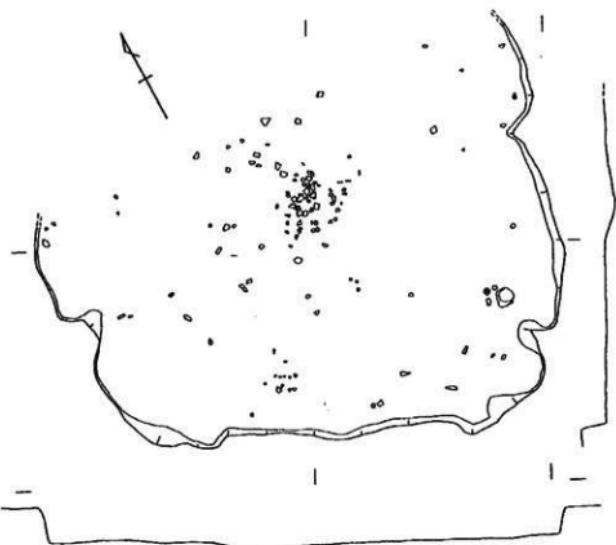
出土遺物は、細片化した土器と石斧片等である。

第27図 遺構配置図

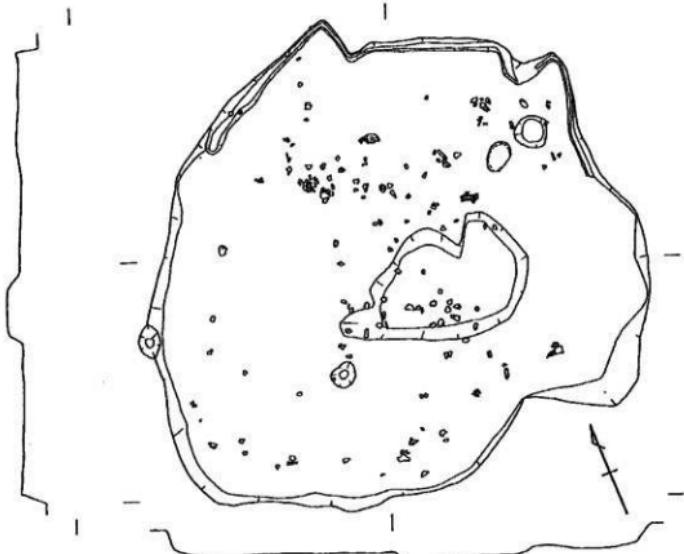




第28図 1・2号住居実測図



3号



4号

第29圖 3・4号住居実測図



### 3号住居（第29図）

調査区中央の北側で検出されたため、住居の北側3分の1は不明である。直径6.5m、壁の残存50cmの円状だが、南側を直線的にした円形と方形の折衷型の住居で、間仕切状の突起が3箇所に認められる。

柱穴は検出できなかった。

出土遺物は、壺、甕等が床面近くで検出された。

### 4号住居（第29図）

3号住居の南側約30cmに隣接する、径約6m、壁の残存30cmの不整な円形住居で、間仕切状の突起が3箇所に認められる。本住居の周辺は畑の耕作による搅乱が深くまで入っているため壁の形状はある程度変化しているが、南側が直線的で、北側が円形で間仕切を持つ形だと思われる。

中央やや東寄りに1.2m×2mの掘り込みが検出されたが、柱穴は検出されなかった。

遺物は、床面から浮いた形で壺、甕、鉢等が出土した。

## 2) 遺物

### A 土器（第30・31図）

弥生時代中期後葉から後期前半の土器である。

### 1号住居出土土器（第30図）

45～48は壺である。45は無頸壺で、口唇部及び3本の突帯に刻みを施す。46は肩部で3本の三角突帯を巡らすもの、47は胴部で幾何学文を沈線で施すもの、48も胴部で低い三角突帯を巡らすものである。

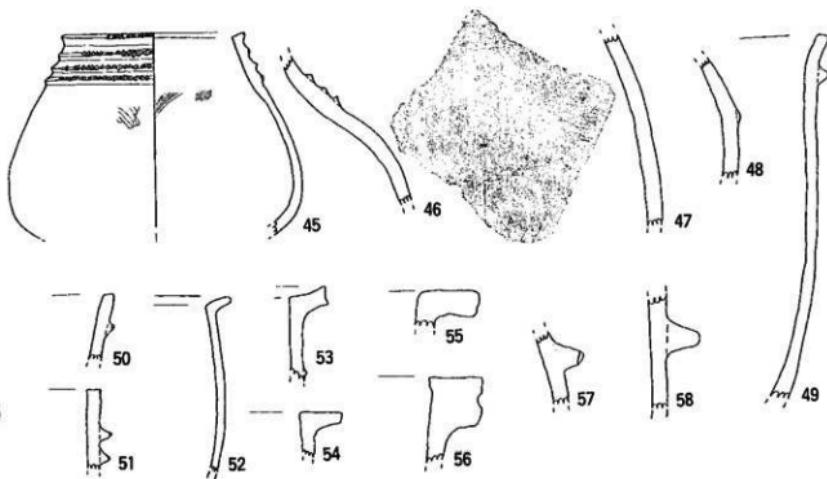
49～58は甕である。49～51は、僅かに外反する口縁で突帯を持つものである。49、51は口唇部と突帯に刻目を入れ、50は突帯に刻目を入れる。52はくの字外反するもので器壁は薄い。53～55は所謂逆L字状の口縁で、53はやや立ち上がるるもの、54、55、56は平坦になるもので、56は分厚くした後に凹線を入れている。57、58は大型の突帯を持つもので、57は刻目を入れる。

### 3号住居出土土器

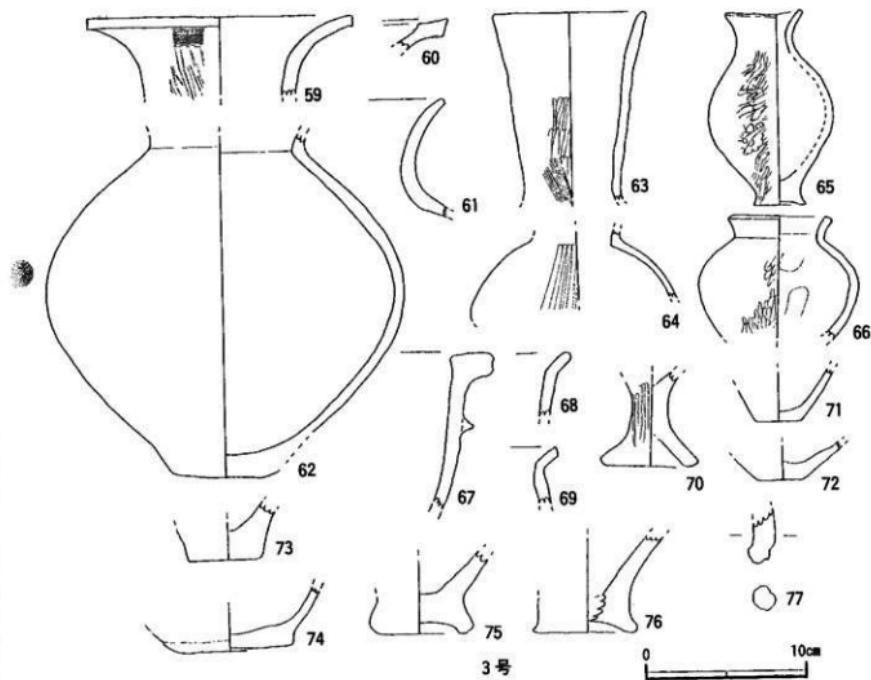
59～66は壺である。59、60はラッパ状に開く口縁で、61は大きく外反する口縁である。63、64は長頸壺である。65は口径4.5cm、高さ12cmの徳利形壺で丹塗りされている。66は口径6.5cm、胴部最大径10cmの短頸壺である。

67～69は甕の口縁で、67は逆L字状の口縁で三角突帯を持ち、68、69は短く外反するものである。

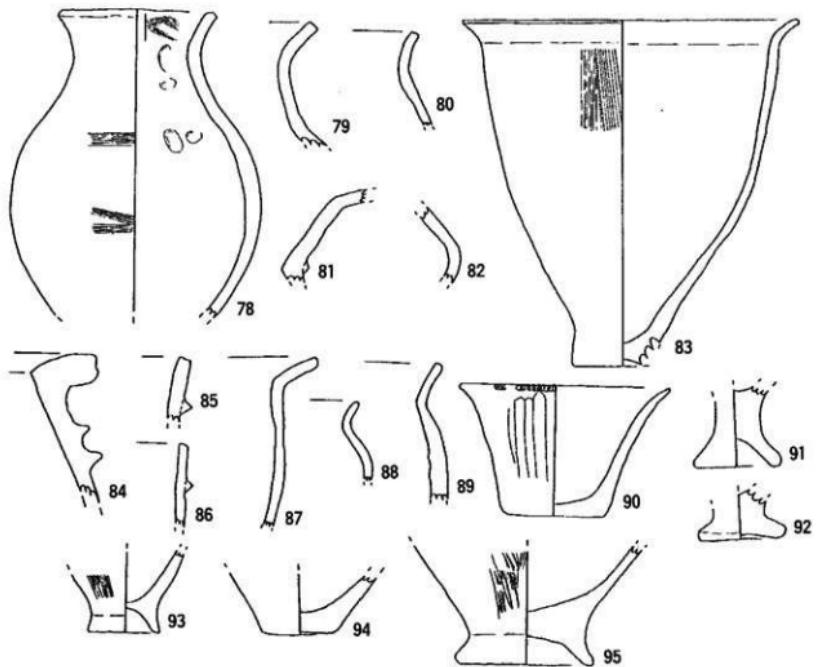
70は小型高坏の脚で丹塗りである。



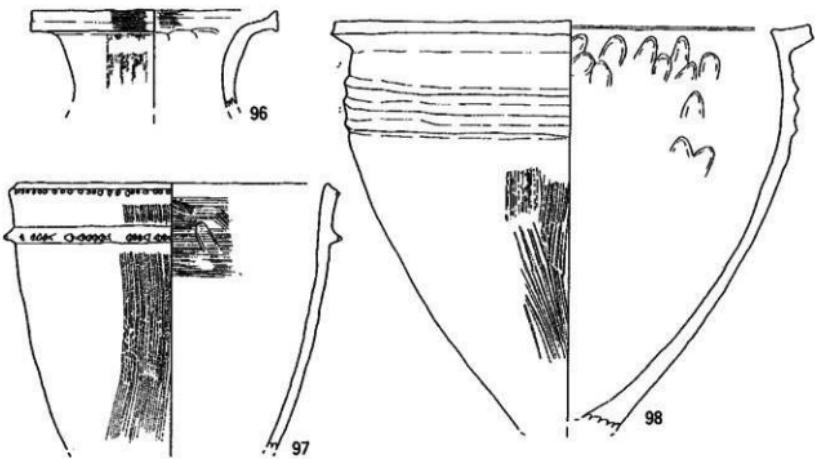
1号



第30図 1・3号住居出土土器実測図



4号



第31図 出土土器実測図

0 10cm

71~74は壺の底部で、71、72は小型壺の底部である。

75、76は甕の底部でやや上げ底である。

77は土製勾玉と思われるが欠損しているため確かではない。

#### 4号住居出土土器（第31図）

78~82は壺で、78~80は緩やかに外反する口縁の長胴甕、81はラッパ状に開く口縁で、82は胴部である。

83~89は甕で、83、87~89はくの字外反する口縁、84は逆L字状の口縁で2本の三角突帯を持つもの、85、86は僅かに外に開く口縁と1本の突帯を持つものである。

90は口径13cm、高さ8cmの鉢の脚で口唇に刻日を持つ。

91、92は脚付き鉢の脚部と思われる。

93、94は壺の底部で93は上げ底である。

95は上げ底の甕の底部である。

#### B 石 器（第26~32図）

34は4号住居出土の打製石鏃で平基式である。

99は2号住居出土の大型磨製石斧で、刃部を欠損している。上面、下面共に平で摩耗しており、柄に差し込んだ痕跡と思われる。

100は偏平片刃石斧と思われるが、刃部の端を研磨して狭い面を作り出している点から、石庖丁への転用の途中とも考えられる。

#### 5. その他の遺構と遺物（第31図）

1区の西南部にPIT群が検出されたが、その性格は判断できなかった。

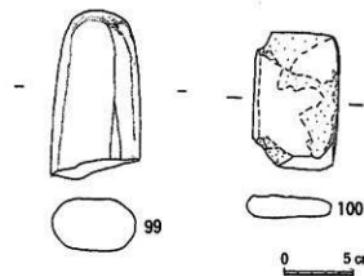
2区の東に南北方向で西寄りに弧を描く溝状遺構が検出されたが茶碗等が出土する近世以降のものであった。

96~98はPIT出土遺物である。

96はラッパ状に開く口縁の端部を撫で上げるものである。

97は僅かに外に開く口縁と1本の突帯を持つもので、口唇部と突帯に刻日を施す。

98は逆L字状の口縁で、3本の低い三角突帯を持つものである。



第32図 2号住居出土石器実測図

## 6. 小 結

車坂第2遺跡は狭い範囲の調査であったが、一定の成果が上げられた。

縄文時代では、出土遺物は全て早期のものであった。量的には少ないものであったが、貝殻腹縁文を口縁に綾杉状や連続刺突するもの、平格式土器と車坂第1遺跡とは異なる上器群が出土し、桑ノ丸式等が出土していないこと、押型文土器が共に出土した点が注目され、台地上での土器分布の差により利用区域が追える可能性が有ると思われる。

特に、南九州在地系と云われる土器に偏差が見られ、押型文土器が共通して見られることは重要であろう。つまり2通りのことが考えられ、一つはそれぞれの土器が異なった時代に使用された場合、もう一つは押型文土器は使用され続けているが在地系の土器は時期的に変化して行った場合であり、土器分布差を丘陵利用の場所の変化と捉えるものである。ただし、層位による時期把握が出来なかった点に問題が有ることは留意しておく必要がある。しかし、平格式土器の出現期における両遺跡の差は、重要なと思われる。

弥生時代については4軒の住居を検出したが、1号が方形の平面形であることを除いて他の3軒が円形を基本とした平面形であることが特徴である。

出土土器から、1号住居は弥生時代中期後葉、3号住居は後期前半、4号住居は中期末～後期初頭頃に比定されよう。また、1号住居が1辺約4m、2、3、4号住居が直径6mとその規模に大きな隔たりがあることは重要であろう。この差が住居の単なる時期差であれば、円形の間仕切を持つ住居の採用の原因が問題であり、この2形式が併行するならば異なる平面形を使用する目的や意味合いが不明である。

さらに、車坂第1遺跡で検出された円形間仕切住居は直径9mと本遺跡で検出された円形間仕切住居が6mであることに比べると大型のものであり、方形住居についても車坂第1遺跡のものは1辺6mであり、本遺跡の1号住居は1辺4mとやはり車坂第1遺跡の住居が大型であることは注目される。

これらのこととは、同じ円形間仕切住居間での規模の差、同じ方形住居間での規模の差、平面形の相違の意味、居住立地場所と住居の平面形の関係等幅広い問題を抱えており、一概には云えない問題であり、今後の課題である。

最後に、一箇月強の調査期間の内3分の1近くは雨の中で作業して頂いた作業員の皆様に厚く感謝申し上げます。

第3表 縄文土器観察表

番号	部位	調 整	文 样	色 調	胎 土	備 考
1	胴 部	内面貝殻条痕		明赤褐色	5mm以下の砂粒を多く含む	スヌ付着
		外面々		暗黃褐色		
2	胴 部	内面ナデ		暗黃褐色	2mm以下の砂粒を含む	
		外面貝殻条痕		々		
3	底 部	内面ナデ		橙	微細な砂粒を含む	
		外面貝殻条痕		暗褐色		
4	胴 部	内面ナデ		暗褐色	3.5mm以下の砂粒を含む	
		外面貝殻条痕		暗褐色		
5	胴 部	内面ヘラナデ	ヘラ状施文具による沈線	暗褐色	0.6mm以下の砂粒を多く含む	
		外面ナデ		暗褐色		
6	胴 部	内面ナデ	ヘラ状施文具による沈線	暗褐色	微細な砂粒を含む	
		外面々		暗褐色		
7	胴 部	内面ナデ	ヘラ状施文具による沈線	暗褐色	微細な砂粒を含む	
		外面々		暗褐色		
8	口縁部	内面ヨコナデ	口唇部に刺目	暗褐色	微細な砂粒を含む	
		外面貝殻条痕	貝殻腹縁による綾杉文	暗褐色		
9	口縁部	内面ナデ	貝殻腹縁による刺突	暗褐色	0.2mm以下の砂粒を含む	
		外面々		々		
10	胴 部	内面ナデ	貝殻腹縁による綾杉文	黒褐色	0.2mm以下の砂粒を含む	スヌ付着
		外面々		暗褐色		
11	胴 部	内面ナデ	貝殻腹縁による刺突	黄褐色	1mm以下の砂粒を多く含む	
		外面々		暗褐色		
12	胴 部	内面ヘラナデ	貝殻腹縁による刺突	暗褐色	0.2mm以下の砂粒を多く含む	
		外面ナデ		暗褐色		
13	口縁部 から胴部	内面貝殻条痕後ナデ	口唇部に貝の押圧	暗赤褐色	3mm以下の砂粒を多く含む	スヌ付着
		外面貝殻条痕	貝殻腹縁による刺突・沈線	々		
14	胴 部	内面ナデ	貝殻腹縁による刺突	灰黄色	微細な砂粒を含む	
		外面々		暗褐色		
15	胴 部	内面ヘラ磨き	貝殻腹縁による刺突	暗褐色	微細な砂粒を含む	
		外面々		明赤褐色		
16	胴 部	内面ナデ	貝殻腹縁による綾杉文	灰褐色	0.4mm以下の砂粒を含む	
		外面々		暗褐色		
17	胴 部	内面ヘラナデ	貝殻腹縁による刺突	暗褐色	0.2mm以下の砂粒を多く含む	
		外面ナデ		暗赤褐色		
18	胴 部	内面ヘラナデ	貝殻腹縁による刺突	暗褐色	砂粒を多く含む	
		外面ナデ		々		
19	胴 部	内面一	沈線、列点文	黄色	1.5mm以下の砂粒を含む	
		外面一		橙		
20	胴 部	内面ナデ	沈線、列点文、撚糸	淡黄色	3mm以下の砂粒を含む	
		外面一		黄褐色		
21	胴 部	内面ナデ	沈線、撚糸	黄色	2mm以下の砂粒を含む	
		外面々		々		
22	胴 部	内面ナデ	撚糸、沈線	黄色	1.5mm以下の砂粒を含む	
		外面々		々		
23	胴 部	内面ナデ	沈線、撚糸	暗黄色	3mm以下の砂粒を含む	
		外面々		暗褐色		
24	口縁部	内面ヨコナデ	貝殻腹縁による刺突	明赤褐色	0.2mm以下の砂粒を多く含む	
		外面一		暗褐色		
25	胴 部	内面ナデ	楕円押型	明赤褐色	2.5mm以下の砂粒を多く含む	
		外面一		暗褐色		
26	胴 部	内面ナデ	楕円押型	褐色	2mm以下の砂粒を多く含む	
		外面一		明赤褐色		
27	口縁部	内面ナデ	楕円押型、ヘラの押圧	明黄色	2mm以下の砂粒を多く含む	
		外面々		暗褐色		
28	胴 部	内面ナデ	楕円押型	暗褐色	3mm以下の砂粒を含む	
		外面々		々		

番号	部位	調 整	文 样	色 調	胎 土	備 考
29	脇 部	内面 ヘラナデ 外面 一	楕円押型	赤 暗	褐色 0.2mm以下の砂粒を含む	
30	脇 部	内面 ナデ 外面 一	楕円押型	黄 暗	黄 6mm以下の砂粒を含む	
31	脇 部	内面 ナデ 外面 一	楕円押型	黄 暗	灰 黄 微細な砂粒を含む	
32	脇 部	内面 ナデ 外面 一	貝殻腹縁による刺突	黑 暗	砂粒を含む 赤 褐	スヌ付着

第4表 石器観察表

番号	器 種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	石 材	備 考
33	凹 石	8.35	8.45	4.82	475	砂岩	敲石兼用
34	石 錐	4.0	1.9	0.5	3.04	頁岩	
35	石 錐	1.5	1.45	0.25	0.37	頁岩	
36	石 錐	2.0	1.4	0.35	0.66	頁岩	
37	石 錐	1.7	1.5	0.3	0.60	頁岩	
38	石 錐	1.4	1.15	0.3	0.31	黒曜石	
39	石 錐	1.55	1.4	0.3	0.72	チャート	
40	石 錐	1.5	1.4	0.25	0.45	チャート	
41	石 錐	2.8	2.4	0.55	2.56	チャート	
42	石 錐	2.15	2.15	0.5	1.24	チャート	
43	石 錐	1.7+α	1.6+α	0.35	0.64	頁岩	
44	石 錐	1.15+α	2.5	0.5	1.17	黒曜石	

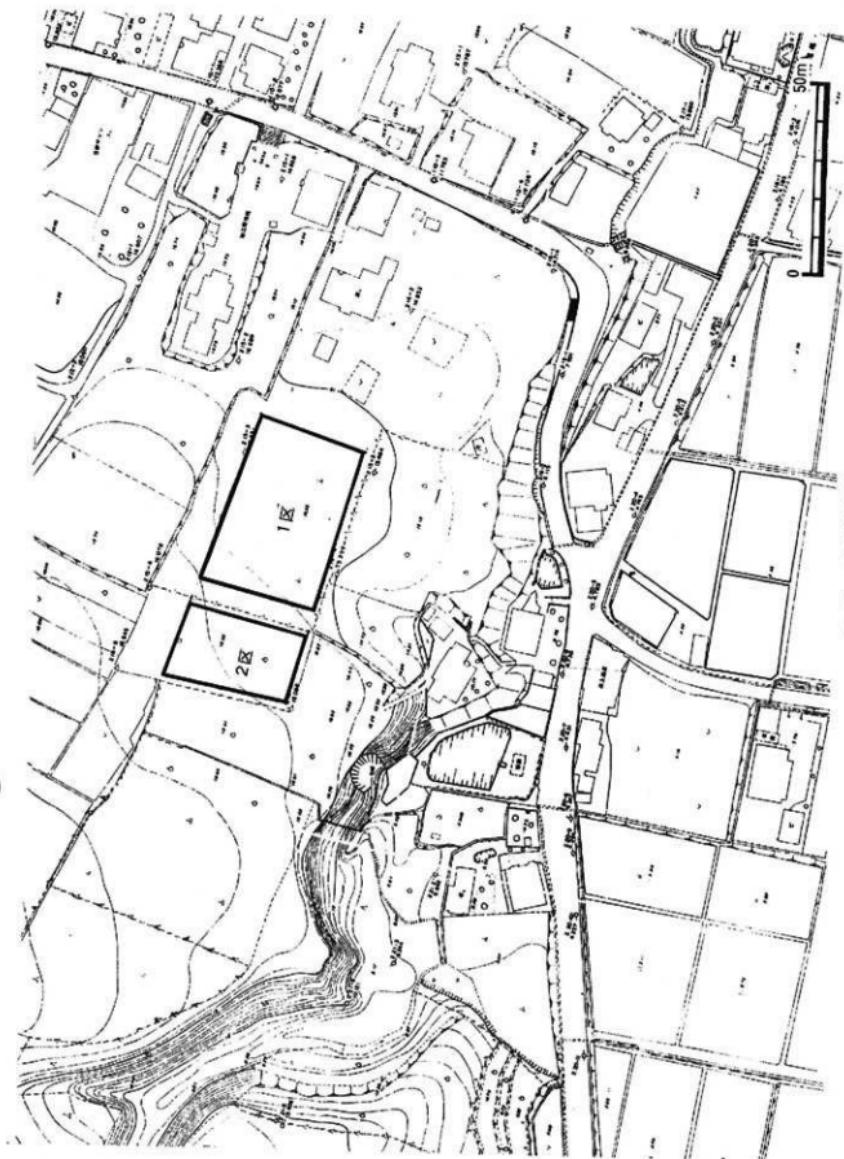
99	石 斧	10.6	5.4	3.5	371.25	安山岩	
100	石 斧	8.8	5.5	1.5	135	頁岩	

第5表 弥生土器観察表

番号	器種	調 整	色 調	胎 土	備 考
45	壺	内面ナデ、ハケ 外面研磨	暗 橙 々	2.5mm以下の砂粒を多く含む	刻目突帯、丹塗り
46	壺	内面ナデ 外面々、研磨	暗 黄 暗 黄	3mm以下の砂粒を多く含む	貼り付け突帯
47	壺	内面研磨 外面々	暗 黄 々	7mm以下の砂粒を多く含む	幾何学模様
48	壺	内面ナデ 外面々	赤 橙 々	3mm以下の砂粒を多く含む	貼り付け突帯
49	甕	内面ナデ 外面ハケ	灰 黄 暗 黄	8mm以下の砂粒を多く含む	貼り付け突帯、刻目
50	甕	内面ナデ 外面々	灰 黄 暗 黄	2mm以下の砂粒を多く含む	刻目
51	甕	内面ナデ 外面々	暗 黄 々	3.5mm以下の砂粒を多く含む	貼り付け突帯、刻目
52	甕	内面ナデ 外面々	暗 黄 橙 暗 黄 黄	微細な砂粒を含む	スス付着
53	甕	内面ナデ 外面々、ハケ	暗 黄 黄 暗 赤 黄	3.5mm以下の砂粒を多く含む	スス付着
54	甕	内面ナデ 外面々	暗 橙 々	2mm以下の砂粒を多く含む	
55	甕	内面ナデ 外面々	暗 黄 橙 々	2.5mm以下の砂粒を多く含む	
56	甕	内面ナデ 外面々	黄 橙 々	2.5mm以下の砂粒を多く含む	
57	甕	内面ナデ 外面々	明赤 黄 々	3mm以下の砂粒を多く含む	刻目、貼り付け突帯
58	甕	内面ナデ 外面々	黄 橙 暗 橙	0.3mm以下の砂粒を多く含む	貼り付け突帯
59	壺	内面ナデ 外面々、ハケ	暗 橙 々	4mm以下の砂粒を多く含む	
60	壺	内面ナデ 外面々	暗 橙 々	2mm以下の砂粒を多く含む	
61	壺	内面ナデ 外面々	暗 黄 暗 橙	0.5mm以下の砂粒を多く含む	
62	壺	内面ナデ 外面々	暗 黄 暗 橙	6mm以下の砂粒を多く含む	スス付着
63	長頸甕	内面ナデ 外面々、ハケ、研磨	橙 々	4mm以下の砂粒を含む	
64	甕	内面ナデ 外面々、研磨	黒 錫 暗 黄 橙	5mm以下の砂粒を多く含む	
65	甕	内面ナデ 外面々、研磨	橙 々	4mm以下の砂粒を多く含む	丹塗り
66	小型甕	内面ナデ 外面々	暗 橙 暗 黄 橙	砂粒を多く含む	
67	甕	内面ナデ 外面々	赤 橙 々	3mm以上の砂粒を多く含む	刻目
68	甕	内面ナデ 外面々	灰 黄 暗 黄 橙	砂粒を多く含む	
69	甕	内面ナデ 外面々	暗 黄 黄 暗 黄 黄	砂粒を多く含む	スス付着
70	高坏の脚	内面ナデ 外面々、研磨	明赤 黄 赤	3mm以下の砂粒を多く含む	丹塗り
71	小型甕	内面丁寧なナデ 外面研磨	暗 黄 橙 暗 黄 黄	砂粒を含む	
72	甕	内面ナデ 外面丁寧なナデ	暗 橙 暗 橙	2mm以下の砂粒を含む	

番号	器種	調 整	色 調	胎 土	備 考
73	壺	内面 ナデ 外面 タ	暗 橙 タ	4mm以下の砂粒を多く含む	
74	甕	内面 ナデ 外面 タ	暗 橙 タ	2.5mm以下の砂粒を多く含む	スス付着
75	甕	内面 ナデ 外面 タ	褐 灰 暗 黄 橙	5mm以下の砂粒を多く含む	
76	壺	内面 ナデ 外面 タ	黄 橙 タ	6mm以下の砂粒を多く含む	
77	勾玉?	内面 外面 ナデ	暗 橙 タ	1.5mm以下の砂粒を含む	
78	壺	内面 ナデ 外面 タ	暗 橙 タ	2mm以下の砂粒を含む	スス付着
79	甕	内面 ナデ 外面 タ	黄 橙 タ	3mm以下の砂粒を多く含む	
80	甕	内面 ナデ 外面 タ	灰 黄 褐 暗 灰 黄	砂粒を含む	スス付着
81	壺	内面 ナデ、ハケ 外面 タ、タ	暗 橙 タ	3mm以下の砂粒を多く含む	
82	壺	内面 ナデ 外面 丁寧なナデ	黒 タ	2mm以下の砂粒を多く含む	
83	甕	内面 ナデ 外面 ハケ後ナデ	暗 黄 橙 タ	砂粒を多く含む	スス付着
84	甕	内面 ナデ 外面 タ	淡 橙 タ	5mm以下の砂粒を含む	
85	甕	内面 ナデ 外面 タ、ハケ	暗 橙 タ	5mm以下の砂粒を多く含む	刻目 貼り付け突帯
86	甕	内面 ナデ 外面 タ	暗 褐 タ	0.5mm以下の砂粒を含む	スス付着 貼り付け突帯
87	甕	内面 ナデ 外面 タ	暗 黄 橙 タ	砂粒を多く含む	スス付着
88	甕	内面 ナデ 外面 タ	暗 黄 橙 タ	砂粒を多く含む	
89	甕	内面 ナデ 外面 タ	暗 黄 橙 暗 灰 灰	微細な砂粒を含む	スス付着
90	鉢	内面 ナデ 外面 タ	黄 橙 黄	2.5mm以下の砂粒を多く含む	スス付着 刻口
91	脚 部	内面 丁寧なナデ 外面 ナデ	黒 暗 橙	2mm以下の砂粒を多く含む	
92	脚 部	内面 ナデ 外面 タ	暗 橙 タ	4mm以下の砂粒を多く含む	
93	壺	内面 ナデ 外面 タ、ハケ	暗 黄 橙 タ	2.5mm以下の砂粒を含む	
94	甕	内面 ナデ 外面 タ	褐 灰 暗 橙	3mm以下の砂粒を多く含む	
95	甕	内面 ナデ 外面 タ、ハケ	灰 褐 暗 黄 橙	3.5mm以下の砂粒を含む	スス付着
96	壺	内面 丁寧なナデ、ハケ 外面 タ、タ	暗 橙 暗 橙	2.5mm以下の砂粒を含む	
97	甕	内面 ナデ 外面 タ、ハケ	暗 褐 暗 橙	11mm以下の砂粒を含む	刻目 突帯
98	甕	内面 ナデ 外面 タ	暗 褐	10mm以下の砂粒を含む	二角突帯 スス付着

第33図 車坂第3遺跡位置図



## 第4章 車坂第3遺跡の調査

### 1. 調査の概要 (第33図)

本遺跡は車坂・山下遺跡群のはば中央に位置し、山下第1遺跡のある枝丘陵とは小さな入り込み谷を挟んだ本丘陵の南端部であり、畑や蜜柑園として利用されていた区域である。

発掘調査は、畑の区画に沿った形で調査区を分割し、東側の畑を第1区、西側の蜜柑園を第2区と設定した。

第1区では、北側3分の1には赤ホヤ層が残っているが、南に行くにつれて徐々に削平され、南端部では黄褐色ローム層が表土の下層であった。また、第2区では南に行くにつれて徐々に削平され、南端部では黄白色ローム層が表土の下層であった。全体としては、東西方向で西側が削平の度合いが高い傾向が見られた。

第1区では、赤ホヤ層上面で弥生時代の竪穴住居2軒、土坑2基、時期不明溝状遺構を検出した。また、赤ホヤ層下面では縄文時代早期の集石遺構を検出した。

第2区については、赤ホヤ層上面の北側で弥生時代の竪穴状遺構1基、中央部に溝状遺構を検出した。また、赤ホヤ層下面では縄文時代早期の集石遺構を検出した。

南プロックは搅乱が激しく旧地形をとどめていなかった。

第1区、第2区共に弥生時代の遺構は調査区の北半分に寄っており、縄文時代の遺構や遺物は南半分に寄る傾向が見られた。特に縄文時代の散石は、南側の中央部に集中して1つの集石状態になっており、その間に石器や土器片が混在した状態であったことは、特記すべき点であろう。

### 2. 層位 (第34図)

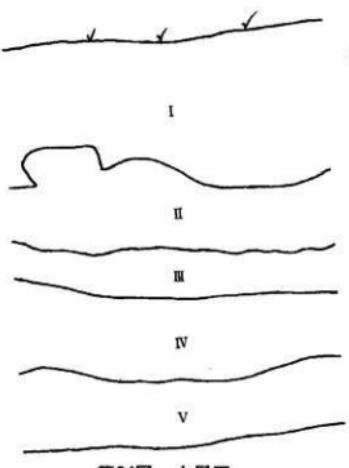
遺跡の基本層序は、I層 表土（耕作土）、II層 赤ホヤ層、III層 黄白色ローム層、IV層 黒褐色ローム層、V層 黄褐色ローム層である。

本来は、赤ホヤ層の上に黒色土層があったものと思われるが、削平及び耕作によりなくなっている。

溝状遺構の埋土は黒色土と表土の搅乱状態であり、弥生時代の遺構埋土は淡黒色土であった。

弥生時代の住居は第III層まで掘り込んである。

縄文時代早期の遺物は、IV、V層で検出され、集石遺構は、V層に掘り込みがみられる。

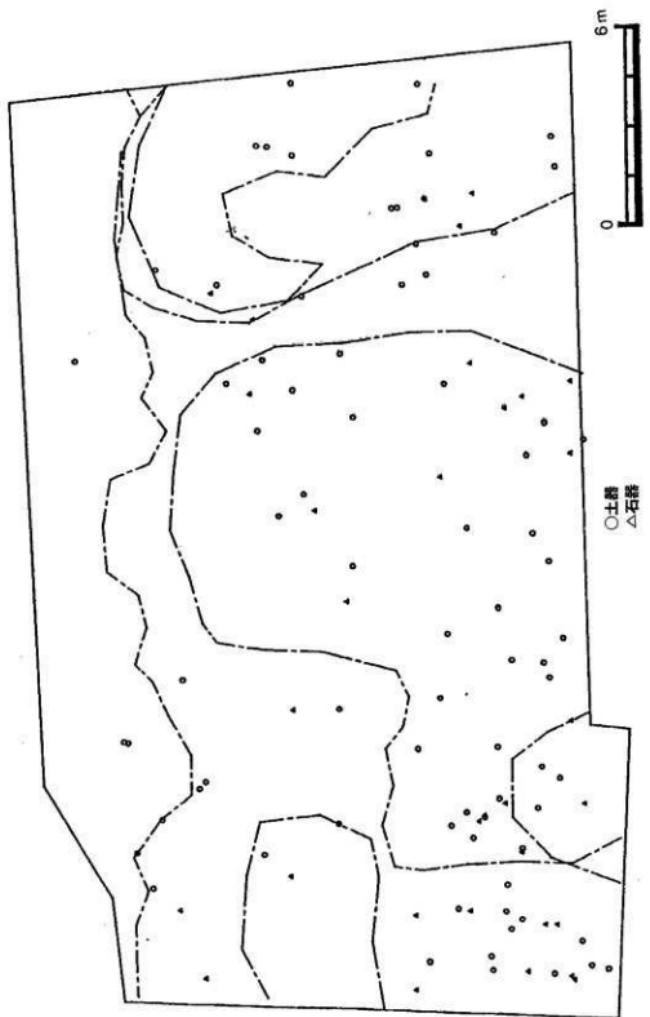


第34図 土層図



第35図 1・2号集石遺構実測図

第36図 1区出土状況図



### 3. 縄文時代の遺構と遺物

#### 1) 遺構 (第35図)

縄文時代の遺構としては集石遺構が検出された。

第1区の集石遺構検出時の特徴は、土器包含層の第1面と第2面では石が比較的密集した散石状態であり、礫の大小、焼礫と通常の礫の混在、円礫と破碎礫の混在が面的に厚く広がっており、土の黒変部や礫の集中部が判別出来なかった点である。そこで礫群の厚みを計るために入れたトレンチの断面により集石を検出した次第である。このトレンチにより、集石の掘り込みの上部に約40cmの礫が堆積していること、また、礫の全体量に対してトレンチの断面で検出された集石の数が少ないことも判明した。

第2区の集石遺構の検出時の特徴は第1区とは異なり、土器包含層と同一面で集石遺構が確認される点である。つまり、散石の間に石の集中した部分や黒変した土の部分が看取され、比較的容易に遺構検出されるものである。このことは2区の削平が深くまで及んでいることとも関係あると思われるが、そのことを差し引いても礫の出土量はかなり少いものであり、1区との状況の差が示唆的である。

集石には大きく2種類のものが見られた。

1類は、円形に円礫や破碎礫が見られるもの

2類は、不正形な状態で礫が集まっているもの（層をなす）

1類の規模は、直径約1m～1.5m、深さ約50cm程度である。2類は云うなれば遺跡南半分全てが該当し、その中の一部というものではない。

このうち、1類はスリバチ状の掘り込みを有し、掘り込み内に礫が隙間なく充填されており、内部の礫の状態により2種類に区分できる。1種は拳大の円礫や破碎礫が掘り込み底部まで一様に詰まっているもの、2種は掘り込み底部30cm程の台石状の平たい石を置きその上に拳大の円礫や破碎礫が詰まっているものである。

2種では掘り込み等は検出出来なかっただため、当初集石が作られた後は単なる礫捨て場となつたとも考えられるが、一部には30cm程の台石状の平たい石が見られたことから、1類の集石が次々に作られては破壊された跡とも考えられる。

#### 2) 遺物 (第36～51図)

出土した縄文時代の遺物は土器と石器を中心とした石器類であり、概ね両調査区南半分から検出された。

1区では2類の集石（礫層）に混じり合う形で各種土器や石器、剝片、チップが出土している。特に調査区西側で石器が多く出土している。

2区では調査区南東部から大量の土器及び石器の出土見られ、それと共に多量の剝片、チップが検出された。

## A. 土器

1区と2区の土器と集石の関係を見るために別々に図示を行う。

### 1区出土土器 (36~41図)

出土した土器は全て縄文時代早期の土器であり、調整、文様、器形等から次のように分類される。

#### 1類 貝殻条痕土器類 貝殻条痕による調整を行う土器である 1~5

1は横方向の条痕の後に縦方向の条痕を施し、文様を意識した構成となっている。

#### 2類 桑ノ丸式土器類 口縁端を平に仕上げ、内外面をナデた後に櫛状施文具（貝殻か）による文様を施すもの。6~26

綾杉状の施文をするもの 6~16

横方向の施文をするもの 18~20

円弧状の施文をするもの 21、22

縦方向の施文をするもの 23~26

文様形態では以上の様に区分できるが、縦方向の綾杉状の文様 7、17 文様の密集したもの 8~10 櫛状施文と沈線の組合せ 17 等の変化がみられる。

#### 3類 下剥峰式土器類

a 口縁端を平に仕上げ、内外面をナデた後に貝殻腹縁の深い刺突により文様を施すもの。

綾杉状の施文をするもの 27、29、30、32、34~39

綾杉状の施文の中に横方向の刺突を施すもの 28、31、33

b 口縁端を平に仕上げ、内外面をナデた後に貝殻腹縁の刺突による列点文を施すもの。

横方向の列点を施文するもの 40~45

綾杉状の列点文と横方向の列点文を組み合わせるもの 46~49

綾杉状の列点を施文するもの 50~53

47の上部には貝殻腹縁の押引が施されている。

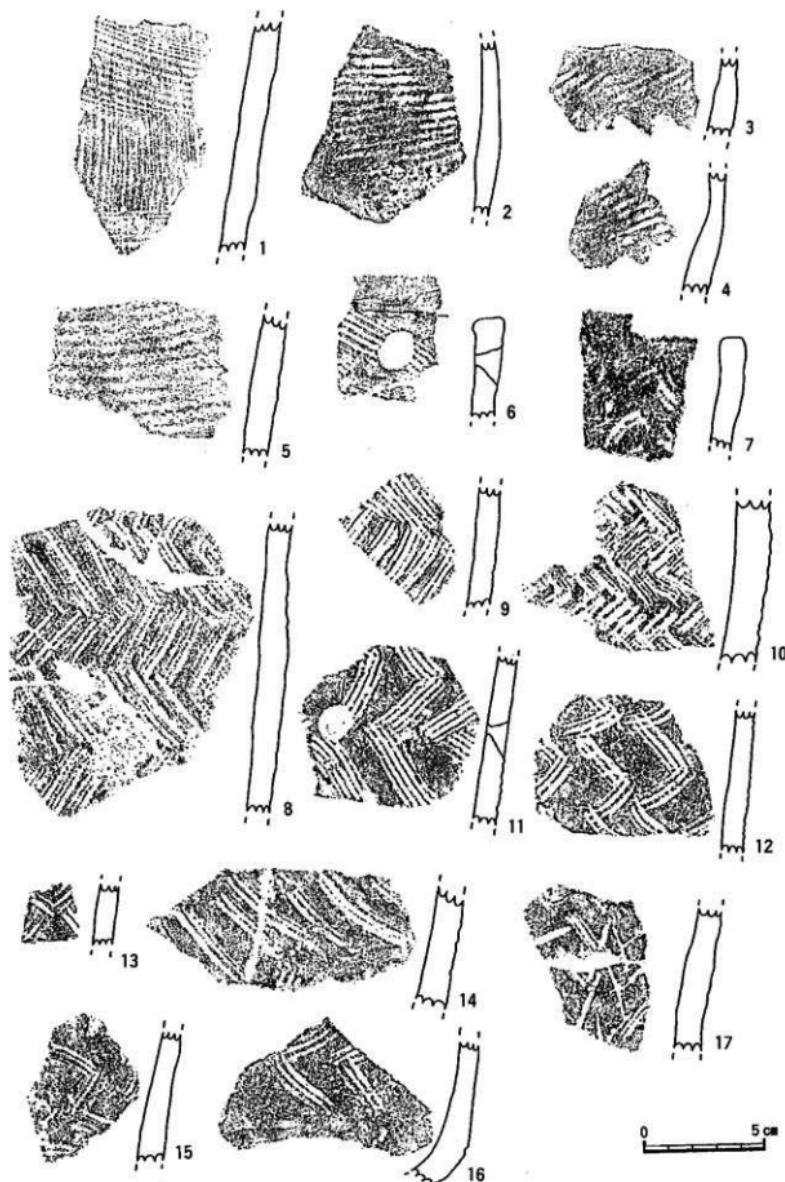
#### 4類 貝殻腹縁の押引を施すもの 54~56

3類土器の一部になる可能性もある。

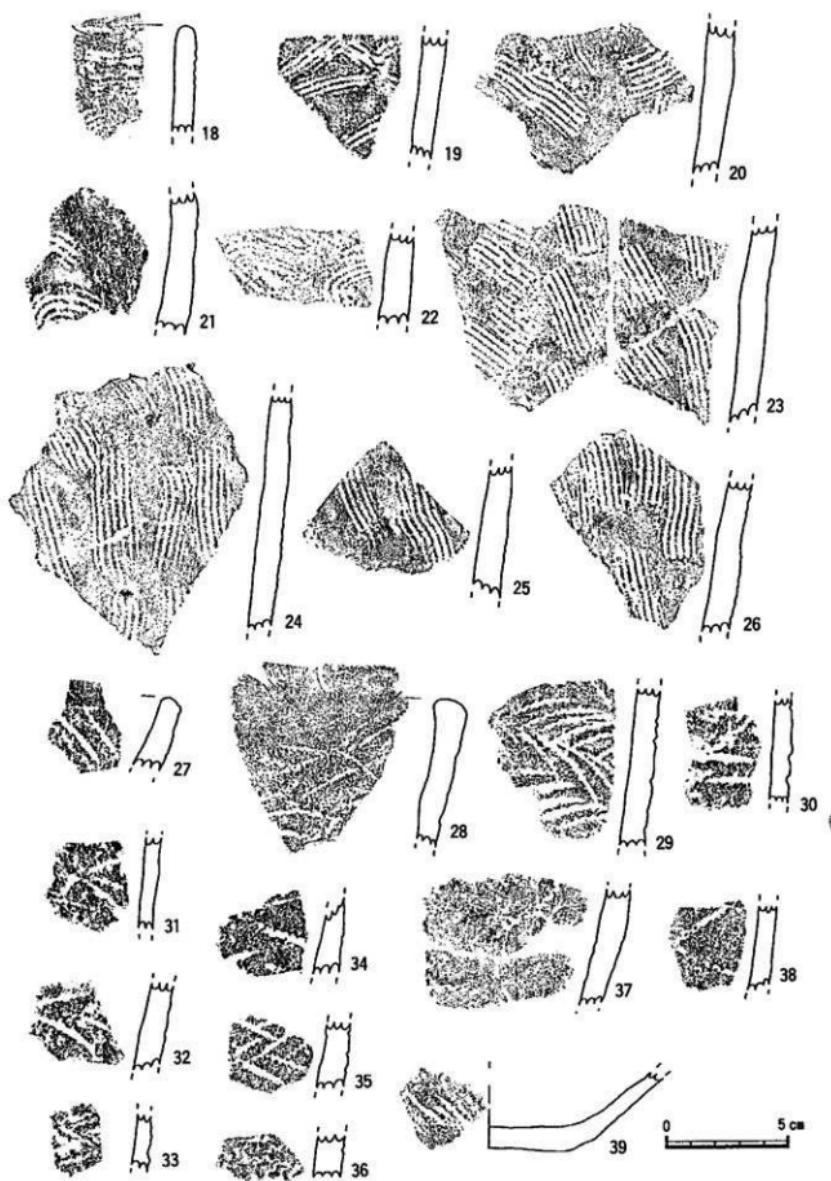
#### 5類 ヘラ状工具による施文を施すもの

斜めの沈線を入れるもの 57、59、60

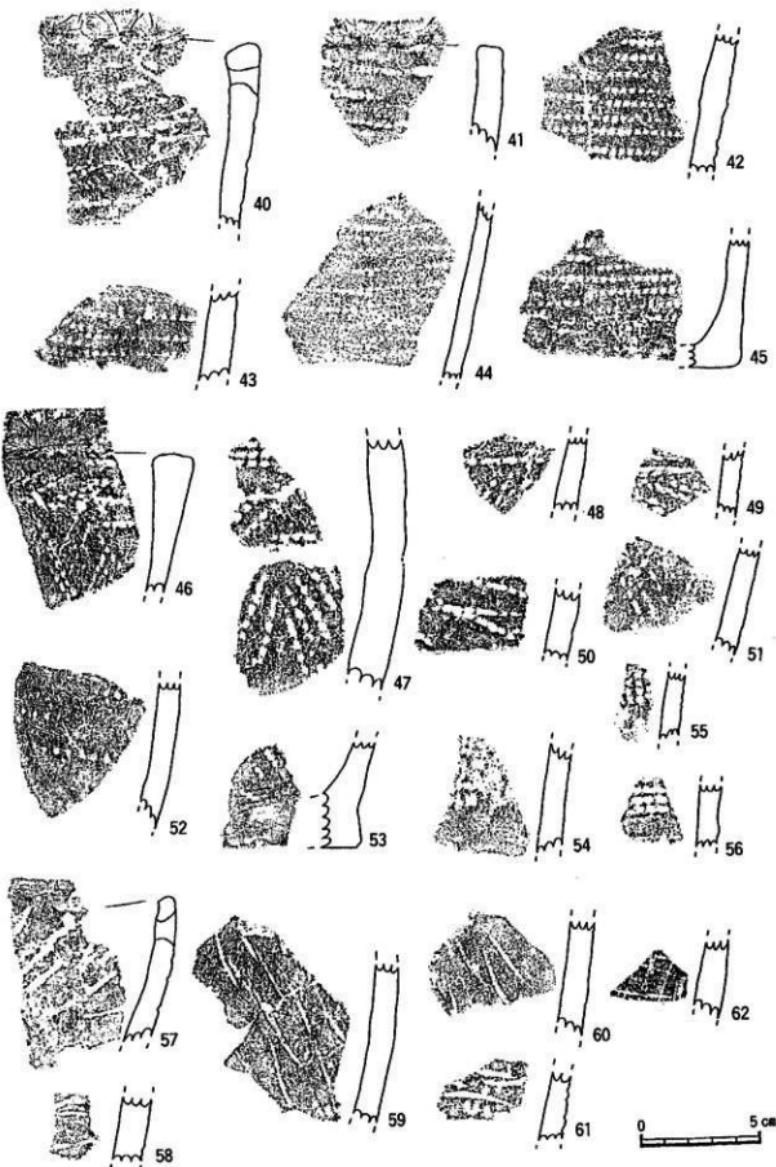
横の沈線を入れるもの 58、61



第37図 出土土器実測図



第38図 出土土器実測図



第39図 出土土器実測図

格子状の沈線を入れるもの 62

57、62は貝殻腹縁の可能性がある。

#### 6類 押型土器

##### a 山形押型

山形押型を外面に施し、内面の口縁部下にヘラ状の押圧を入れその下に山形押型を入れるもの  
63、64

山形押型を外面に施すが2cm程の無文帯を口縁部に残し、内面の口縁部下にヘラ状の押圧を入れその下に山形押型を入れるもの 65

山形押型を外面に施すが2cm程の無文帯を口縁部に残すもの 66、67

山形押型を外面に施すが2cm程の無文帯を口縁部に残し、口唇部に刻日を持つもの 68

山形押型を外面に施し口縁端を平にする 69

また原体の形状により、山形が鋸いもの 71~73、山形が丸みを帯びたもの 70、74~76、山形が帶状になるもの 77~79、山形が極小さいもの 90の4種に分けられる。78、79は網代底である。

b 格子目押型 80、81

c 楕円押型 82~89

原体の楕円の大きさにより、楕円が大型のもの 82~85、楕円が中型のもの 87、楕円が小型のもの 86、88、89に分類される。

86は、細かな楕円押型を外面に施し口縁端を平にするものである。

#### 7類 その他の土器

91は貝殻腹縁の刺突で縦方向に入れる吉田式土器類と思われる。

92、93は貝殻腹縁の押引である。

94、95は櫛状施文具による押引と思われる。

### 2区出土土器（第42~48図）

出土した土器は全て縄文時代早期の土器であり、調整、文様、器形等から次のように分類される。

1類 貝殻条痕土器類 貝殻条痕による調整を行う土器である 96~101

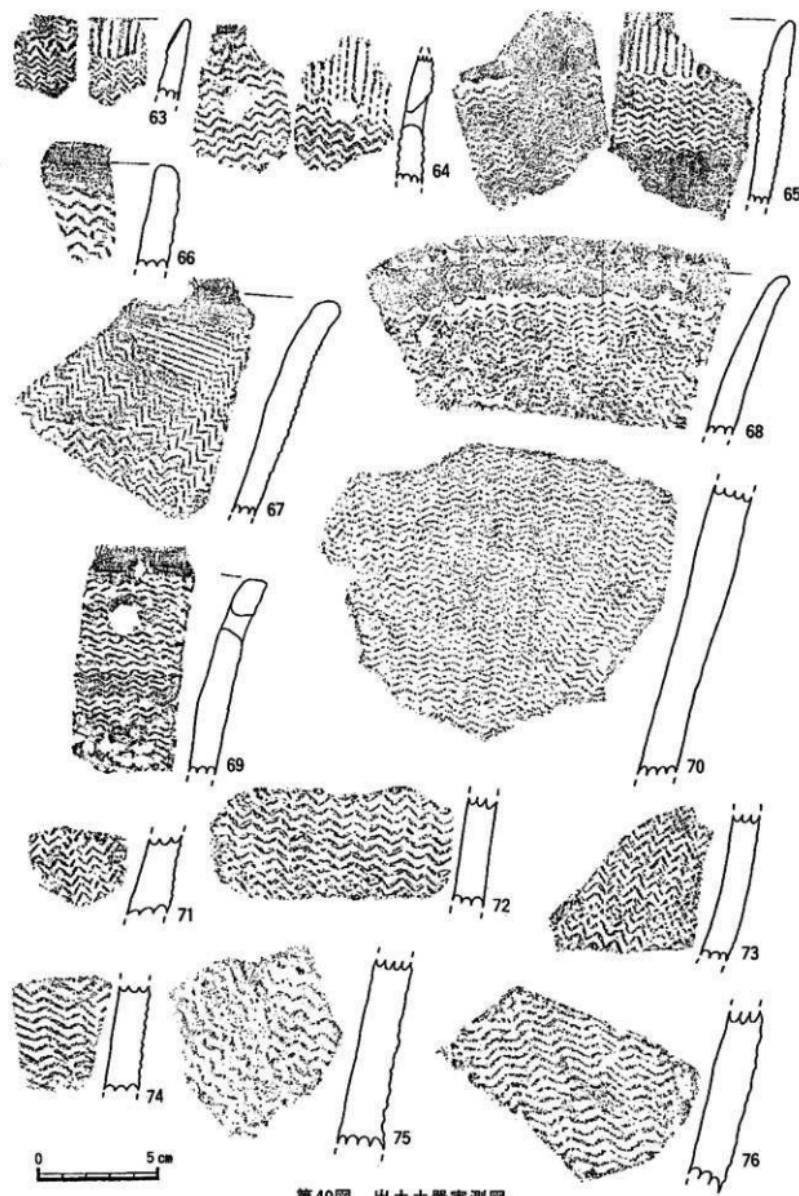
横方向の条痕であるもの 96~99、102、104

条痕が交差するもの 100、101

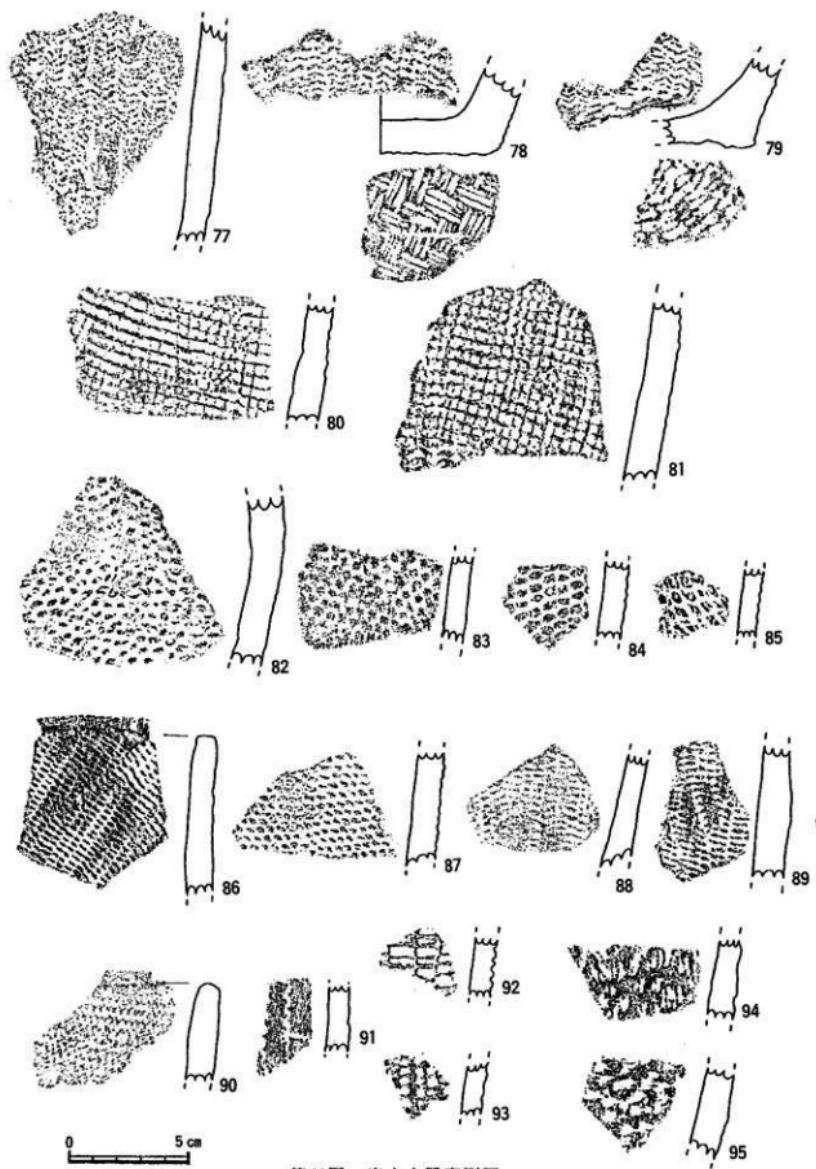
貝殻の背を連続押圧するもの 103

条痕を縦方向に間隔を空け施すもの 105

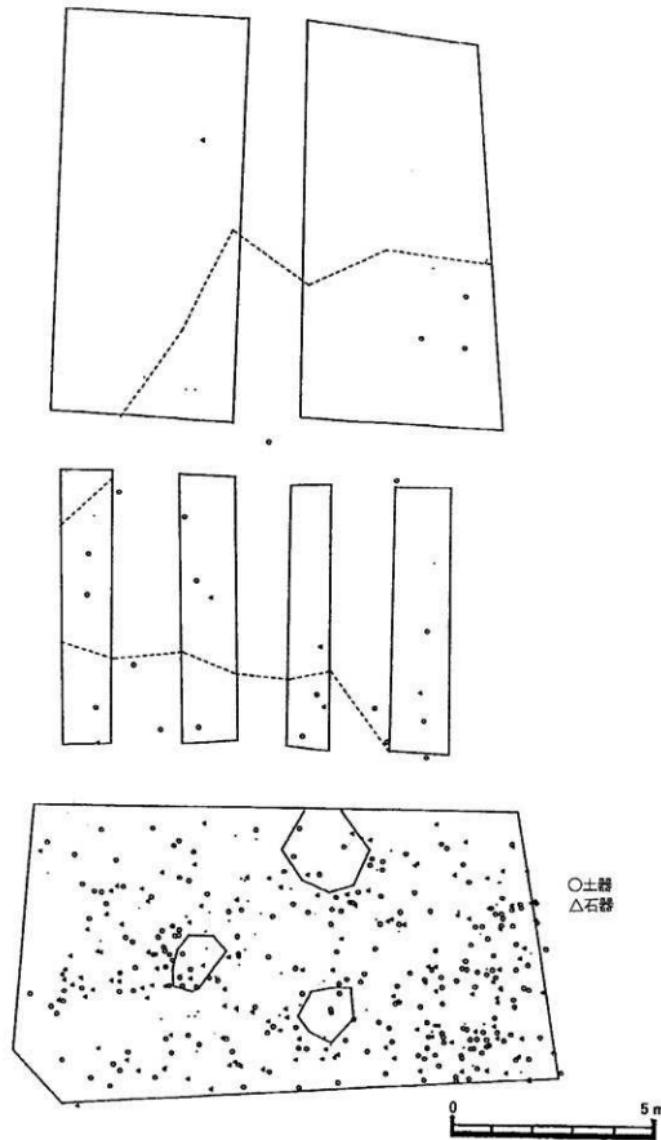
2類 桑ノ丸式土器類 口縁端を平に仕上げ、内外面をナデた後に櫛状施文具（貝殻か）によ



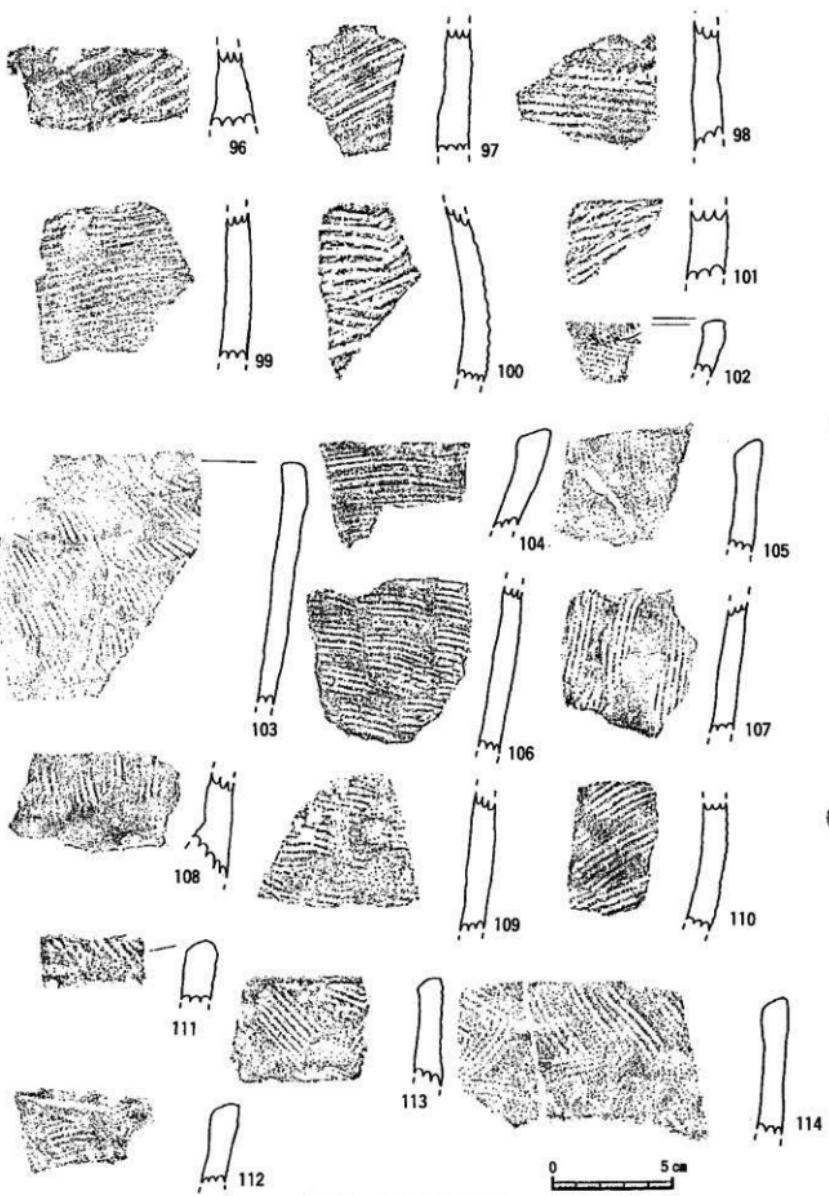
第40図 出土土器実測図



第41図 出土土器実測図



第42図 2区出土状況図



第43図 出土土器実測図

る文様を施すもの。106~136

横方向の施文をするもの 106~109

縦方向の施文をするもの 107、108

斜めの施文をするもの 110

綾杉状の施文をするもの 111~122

流水文状の施文をするもの 123~129

円弧状の施文をするもの 130~133

浅く引搔いた様な施文をするもの 134~136

文様形態では以上の様に区分でき、文様の密集したもの 106、109、115、116がみられる。

### 3類 下剥峰式土器類

a 口縁端を平に仕上げ、内外面をナデた後に貝殻腹縁の深い刺突により文様を施すもの  
11縁端に横方向に刺突し、その下に綾杉状の施文をするもの 137、139

綾杉状の施文をするもの 138、140~143、145、146

綾杉状の施文の中に縦方向の刺突を施すもの 147

綾杉状の施文の下に横方向の沈線を施すもの 144

横方向の施文をするもの 148~150

151は底部である。

b 口縁端を平に仕上げ、内外面をナデた後に貝殻腹縁の刺突による列点文を施すもの

綾杉状の列点文と横方向の列点文を組み合わせるもの 152~154

綾杉状の列点を施文するもの 155~163

156、160はa類とb類の中間的な施文である。

### 4類 貝殻腹縁の押引を施すもの

164は綾杉状貝殻列点文を口縁部に施文し、その下部に貝殻腹縁の押引と条痕の入れ混じった文様帶を入れ、更にその下部に貝殻腹縁の列点文を施すものである。

193~196は器面全体に押引を施すものだが、196の底部には刻線が見られない。

### 5類 ヘラ状工具による施文を施すもの

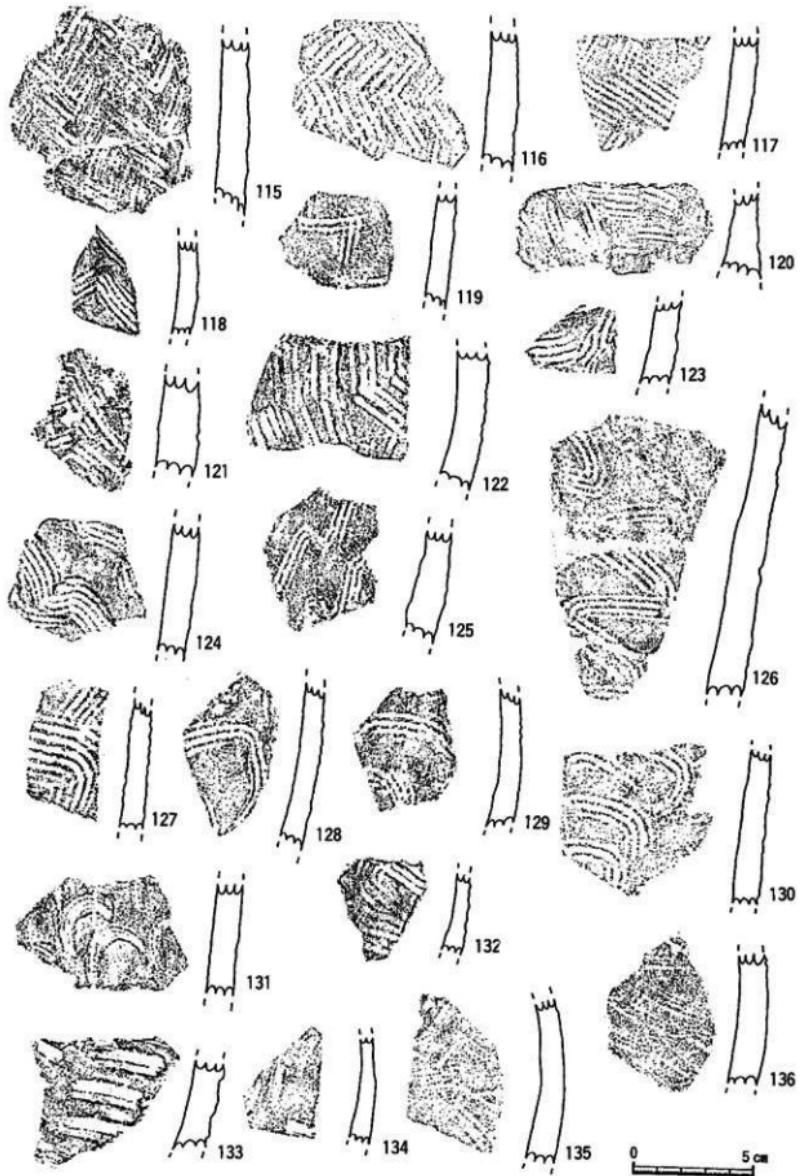
横と斜めの沈線を入れるもの 200

横の沈線を入れるもの 201、204

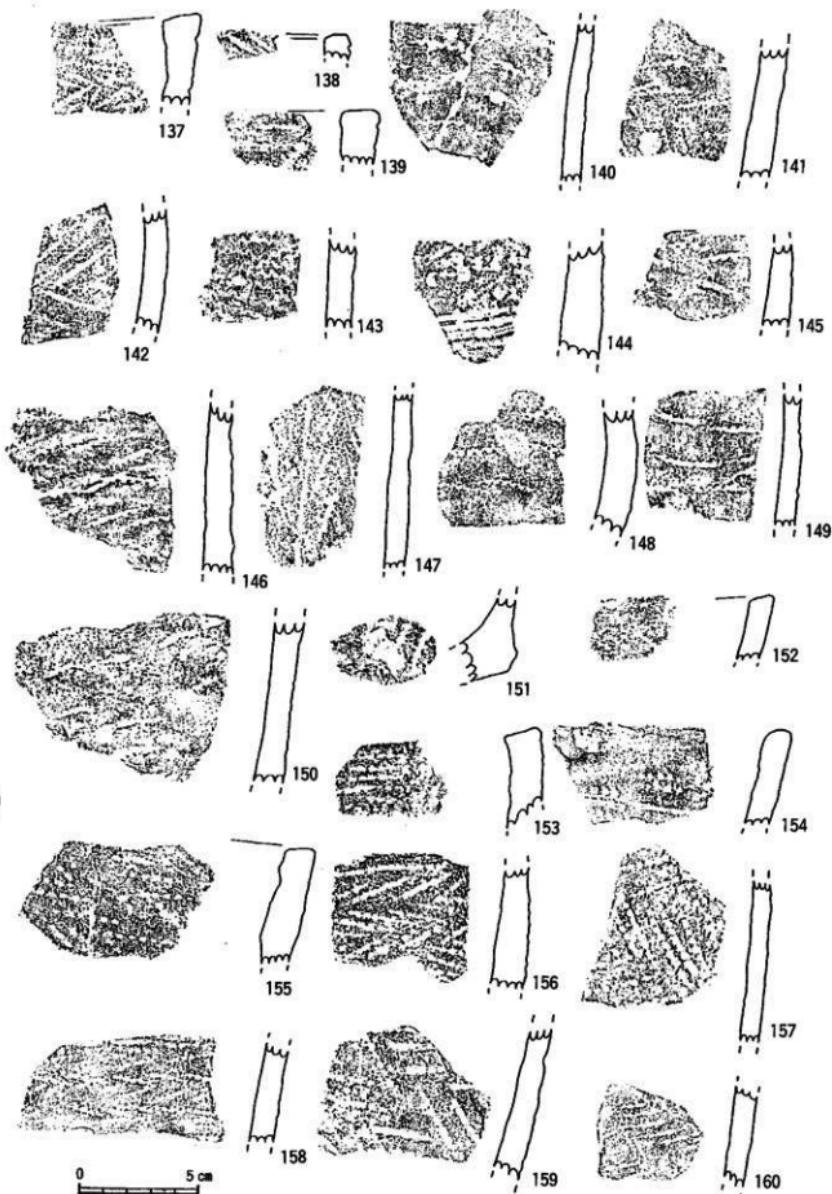
格子状の沈線を入れるもの 199

綾杉状の沈線を入れるもの 202、203、205

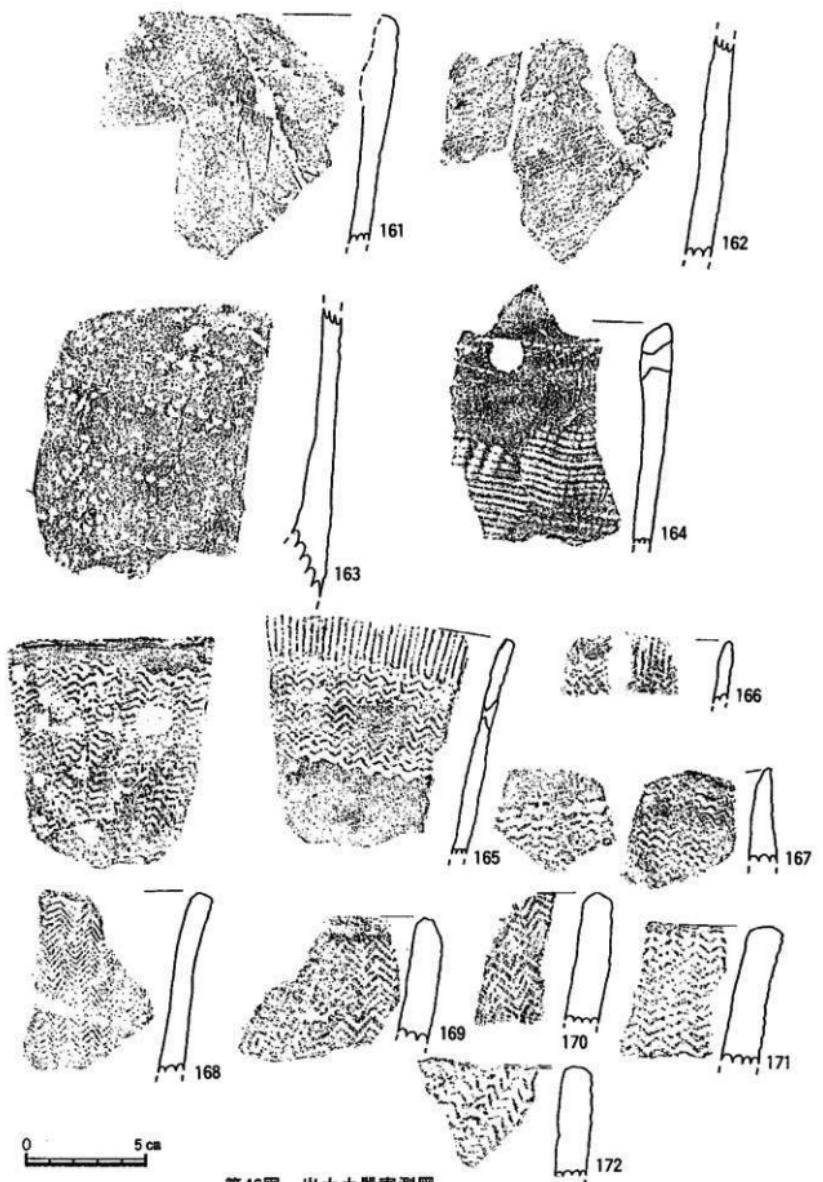
199~201、204は貝殻腹縁の可能性がある。



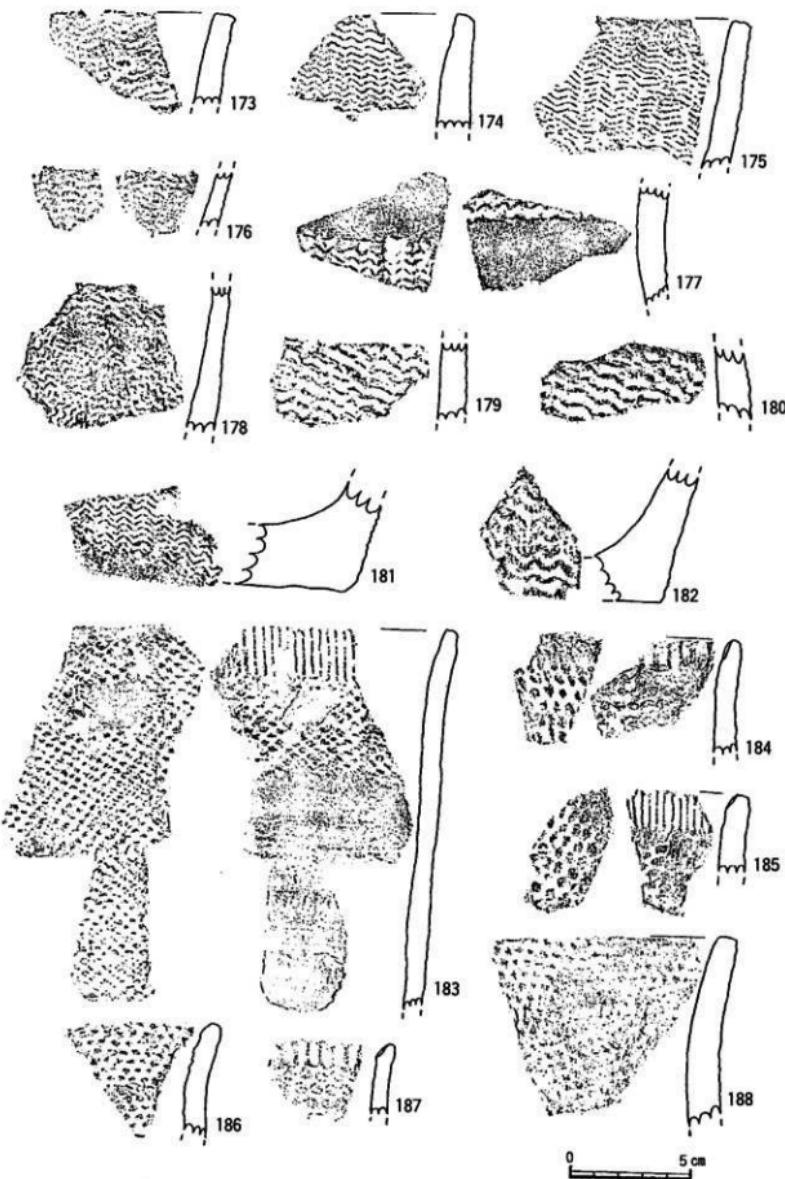
第44図 出土土器実測図



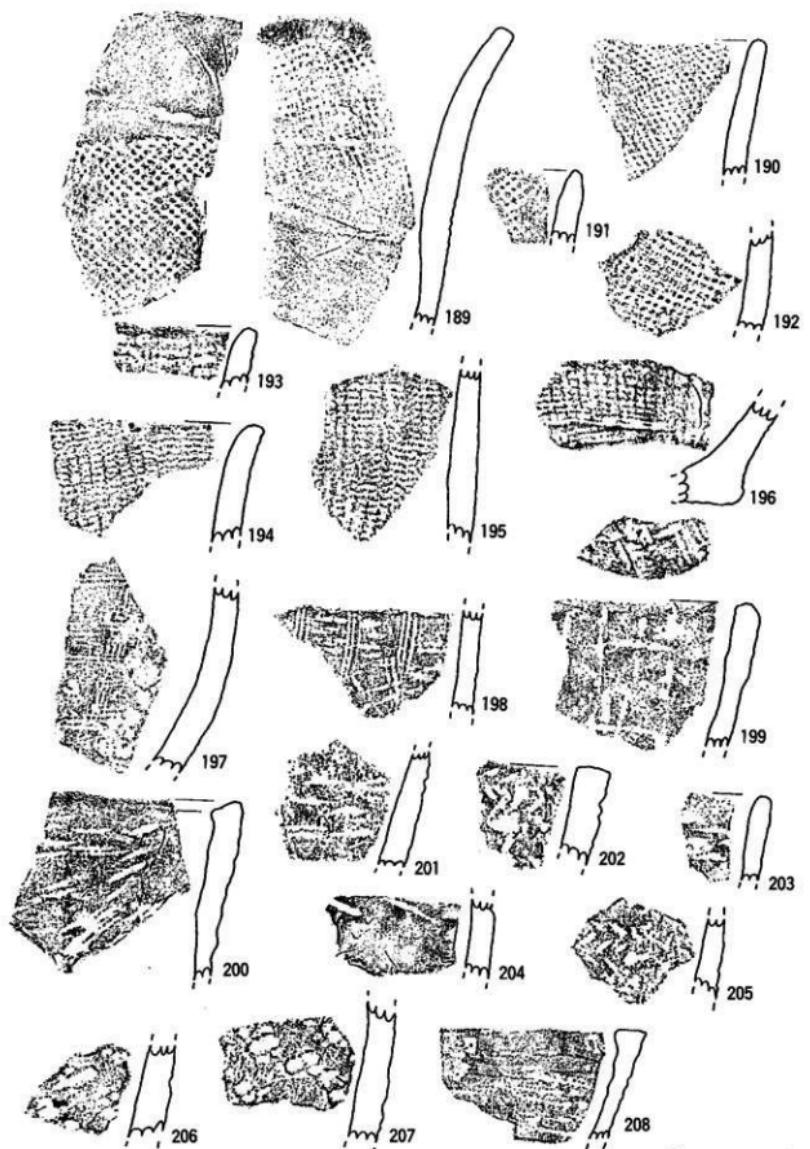
第45図 出土土器実測図



第46図 出出土器実測図



第47図 出土土器実測図



第48図 出土土器実測図

0 5 cm

## 6類 押型文土器

### a 山形押型 165～182

山形押型を外面に施すが1cm程の無文帯を口縁部に残し、内面の口縁部下にヘラ状の押圧を入れ  
その下に山形押型を入れるもの 165～167

山形押型を外面に施すが1cm程の無文帯を口縁部に残すもの 169

山形押型を外面に施し口縁部を平にするもの 168、170～175

口縁部に幅広く無文帯を残すもの 177

また原体の形状により、山形が鋭いもの 168～170、山形が丸みを帯びたもの 165～167、172、

山形が帯状になるもの 173～176、178～180の3種に分けられる。181、182は、底部である。

### b 楕円押型 183～192

楕円押型を外面に施すが1cm程の無文帯を口縁部に残し、内面の口縁部下にヘラ状の押圧を入れ  
その下に楕円押型を入れるもの 183～185

楕円押型を内面に施すもの 186、187 187は口縁部に押圧を持つ

楕円押型を外面全体に施し口縁端を平にするもの 188、190、191

外面は口縁部下に5cm程の無文帯を残し、内面は7cm程に楕円押型を入れるもの 189

原体の楕円の大きさにより、楕円が大型のもの 184、185、187、楕円が中型のもの 183、186、  
188、楕円が小型のもの 189～192に分類される。

## 7類 その他の土器

197は横方向の条痕の後に縱の条痕を1列入れるものである。

198は樹状施文具による縱線とヘラ状工具による横線の組合せである。

206、207は棒状工具による連續刺突と思われる。

208は条痕を荒くナデたものである。

## B. 石 器（第49～51図）

石器は、石鎚、凹石、有孔石器等が出土している。

石鎚は両調査区から出土しているが、圧倒的に2区の出土量が1区の出土量を上回っている。

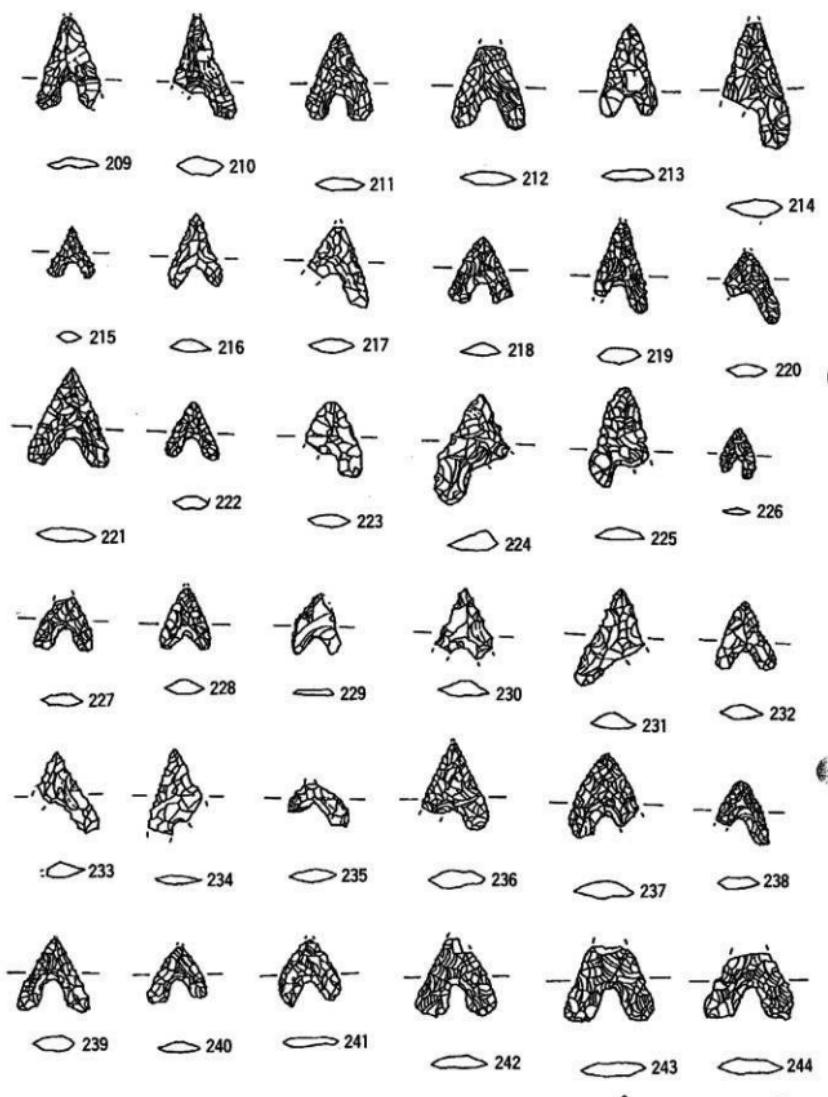
使用石材は、黒曜石、チャート、貞岩等多種である。

凹基鎚 209～276、平基鎚 277～280、所謂トロトロ石器 281～287が有る。大きさは1cm～4cm  
大と多様である。

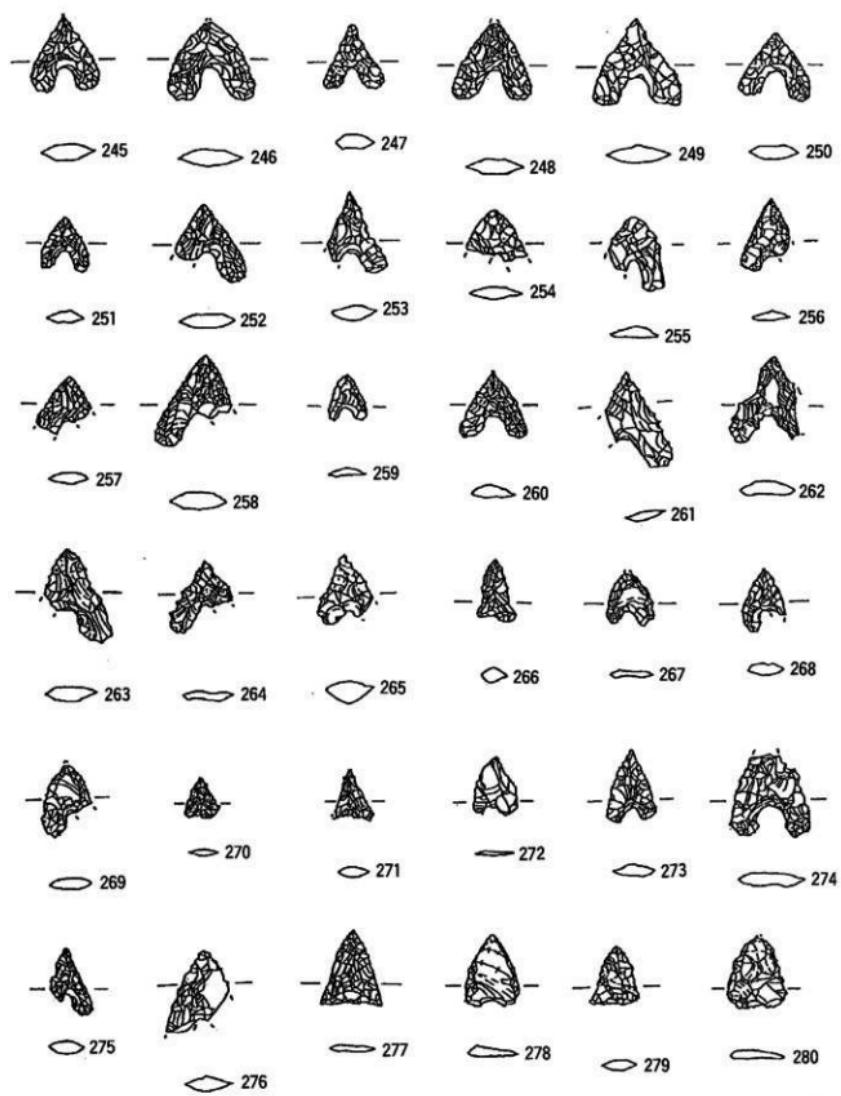
凹石は、円若しくは楕円で中央に窪みを持ち、側面に敲打痕を持つもの 288、側面に擦痕を持つもの 289、290がある。

有孔石器 291 2区の集石近くで出土したが、上下両面は研磨状となっているが側面はやや荒れた状態である。錘としての使用が考えられる。

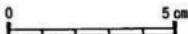
その他、剥片、チップ等は多数出土しているが、掲載はしていない。

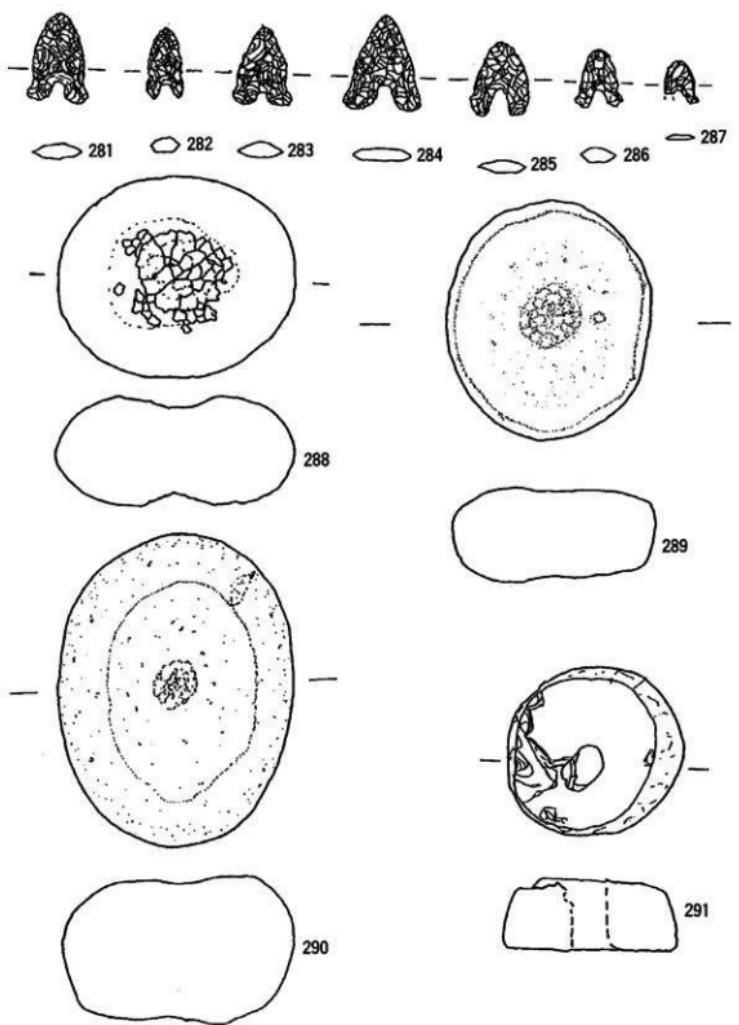


第49図 出土石器実測図



第50図 出土石器実測図

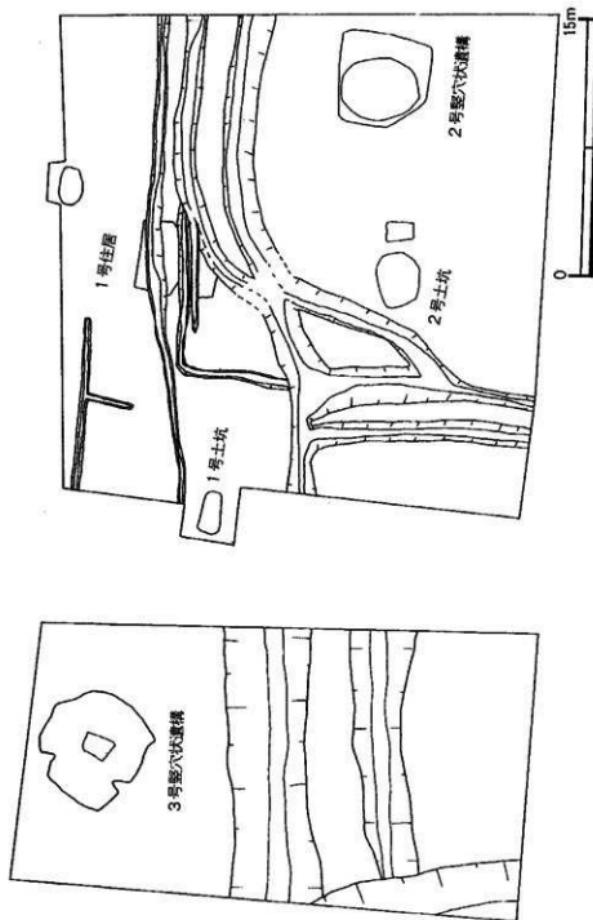




第51図 出土石器実測図

0 5 cm

第52圖 遺構配置圖



#### 4. 弥生時代の遺構と遺物

##### 1) 遺構（第52図）

弥生時代の遺構としては、第1区から竪穴住居が2軒、土坑が2基、第2区から竪穴状遺構が1基、溝状遺構が検出されている。

##### 1号竪穴住居（第53図）

4.4m×4.7mの方形の竪穴住居で深さ約20cmを残し、長軸が磁北方向からやや東に振っている。南東部を近世以降の溝によって切り飛ばされたうえ、東西方向の溝3条によって中央部も切られている。

東西両辺の中央部に突起があることから、方形の間仕切住居であることが判明した。

遺物は、床面から浮いた形で検出され、壺・甕・高杯・土製勾玉が出土した。

柱穴は検出出来なかった。

##### 2号竪穴状遺構（第53図）

5.4m×5.3mの不整な方形の竪穴状遺構で深さ約20cmを残し、長軸が磁北方向からやや東に振っている。

遺構の南3分の2は5m×4m、深さ約40cmの格円形のスリバチ状となっているが、セクションから切り合い関係はつかめなかつたため、同一遺構として扱っている。

遺物は、床面からやや浮いた形で検出され、壺と甕が出土した。

柱穴は検出出来なかった。

##### 3号竪穴状遺構（第54図）

直径5.6mの円形の竪穴状遺構で深さ約10cmを残し、数箇所に間仕切状の突起の痕跡と思われる部分が見られ、円形の間仕切住居の可能性が高い。

遺物は、床面からやや浮いた形で検出され、壺・甕・高杯等が出土した。

柱穴は検出出来なかった。

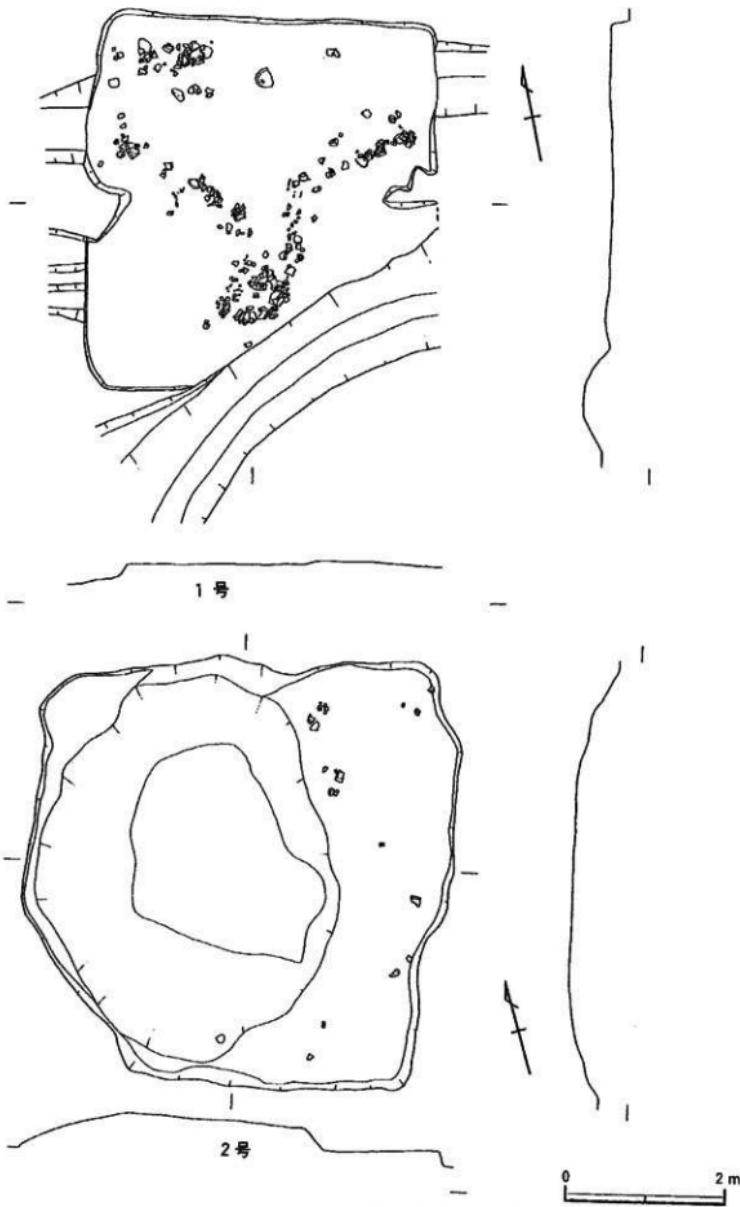
##### 1号土坑（第54図）

2.5m×1.3mの長楕円形で東から西に向かって傾斜しており、東側50cmの所で10cmの段が見られる。

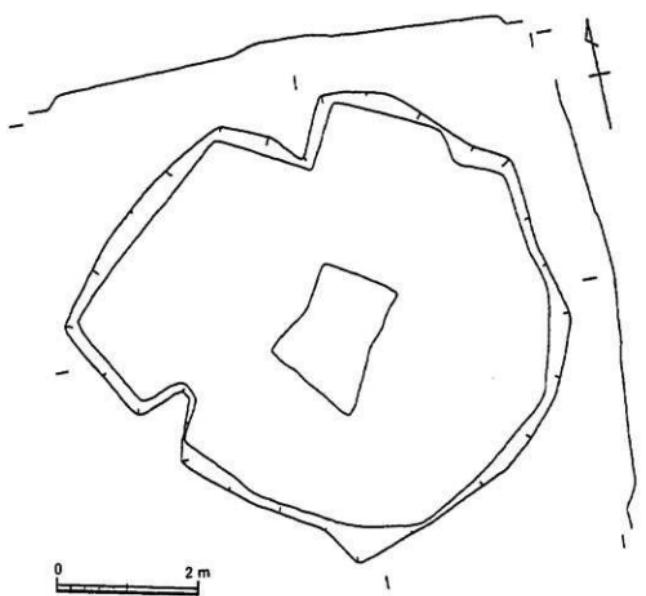
土坑内には2m×0.7mの範囲に土器片を敷き詰めた形になっており、床面から10cm～20cm浮いた位置で東側の段の上端の高さに揃っている。土器は全て破片で使用されており、中心部は平坦に、側部はやや高くして壁を意識した様に感じられる。

土器敷きの上部を使用したのか、土器を覆いにしたのかは不明であり、単なる貯蔵穴の陥没の可能性もある。

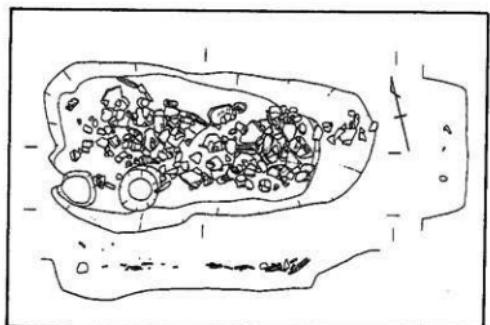
器種としては、壺・甕が出土した。



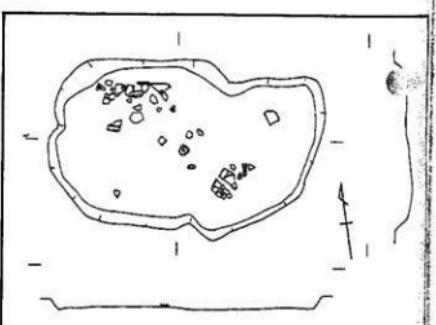
第53図 1号住居、2号竪穴状遺構実測図



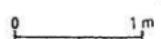
3号竖穴状遺構



1号土坑実測図



2号土坑実測図



第54図 3号竖穴状遺構、1・2号土坑実測図

## 2号土坑（第54図）

2.1m×1.3mの不整格円形で北から南に向かってやや傾斜しており、約10cmの深さを残す。東側1.5m×0.8mの長楕円形と西側1.3m×1.3mの隅丸方形の土坑の切り合いにも思えるが確認出来なかった。

遺物は、床面からやや浮いた形で壺が検出された。

## 2) 遺物

### A. 土器（第55～60図）

堅穴住居出土土器が後期の上器、土坑出土土器は中期後葉の土器中心である。

#### 1号堅穴住居出土土器（第55・56図）

292～294は短頸壺で、292は内面に明瞭にハケ目を残し、293は肩に沈線を入れ小さな平底である。295、296は長頸壺で胴部より頸部が長く、296は2条のヘラ書き文を持つ。297は直行気味の口縁を持つ壺で、298は口縁端をナデ付けて半坦面を作る壺である。299～301は壺で、口縁がくの字外反するもので屈曲部の稜は明瞭ではなく、299は長胴化している。302～304は高坏で、302はII縁部と体部の境に段を持ち強く外反するもの、303、304は脚で裾の開きが短いものである。305は器台で裾の開きは緩やかで円形透かしを入れる。306～310は壺のハの字に聞く底部で310を除き上げ底である。311は土製勾正で尾を欠損し直径1.4cm、残存長4cmである。

#### 2号堅穴状遺構出土土器（第56図）

312～316は壺で、312～314はくの字外反する口縁で、屈曲部の稜はそれぞれである。315、316は上げ底の底部である。

#### 3号堅穴状遺構出土土器（第57図）

317は短頸壺で丸底に近い平底、318は異様に長い頸部を持ち、319はII唇部に刻目を持つ長頸壺である。320は器台で3段の沈線と2段の円形透かしを施す。321は壺の胴部で研磨されている。

#### 1号土坑出土土器（第57・58図）

322～325は壺である。322は口縁部を折曲げ沈線を施し、324は波状文を施し、325は突帯を2条巡らす。326～331は壺である。326、327は逆L字状II縁で、328～331は直線的に延びるII縁のもので刻目突帯を1乃至2条持つものである。332～334は壺の底部である。335～337は壺の底部で、336、337は外開きで上げ底である。

## 2号土坑出土土器（第58図）

338は刻目突帯を持つ壺の口縁部、339は逆L字状の口縁に突帯を持つものである。340は壺の底部で指頭痕が明瞭である。

### 5. その他の遺構と遺物

#### 1) 遺構

1区、2区共に溝状遺構が検出され、1区では4条の溝状遺構が、2区では2条の溝状遺構が検出された。

##### 1区

1号溝 幅5mの大型溝状遺構が調査区東側から中央で直角に曲がり南に向かって行く。この溝は東側では深さ約60cm程あるが、南では痕跡状にしか検出されなかつた。また内部は、幅2mの溝が2条並行した形となっており、北寄りの溝がより深いものであった。

2号溝 1号溝の北側にある、東西方向に延びる幅50cmの溝で、1号住居を切る形で検出された。

3号溝 1号住居の西側で直角に曲がる幅50cmの溝で、東側は1号住居を切った後に1号溝と、南側も1号溝と切り合う溝である。

4号溝 調査区南西部で1号溝と切り合い北側すぐに直角に西に曲がる幅3mの溝で2区にそのまま延びるものである。

##### 2区

4号溝-2 1区から続く溝で西向きに延びている。

5号溝 4号溝の南側で東西に延びる幅2mの溝である。2区東側の部分が幅4m程で落ち込んでおり、その部分で土器が集中的に出土することから竪穴住居を破壊した可能性がある。

#### 2) 遺物（第59・60図）

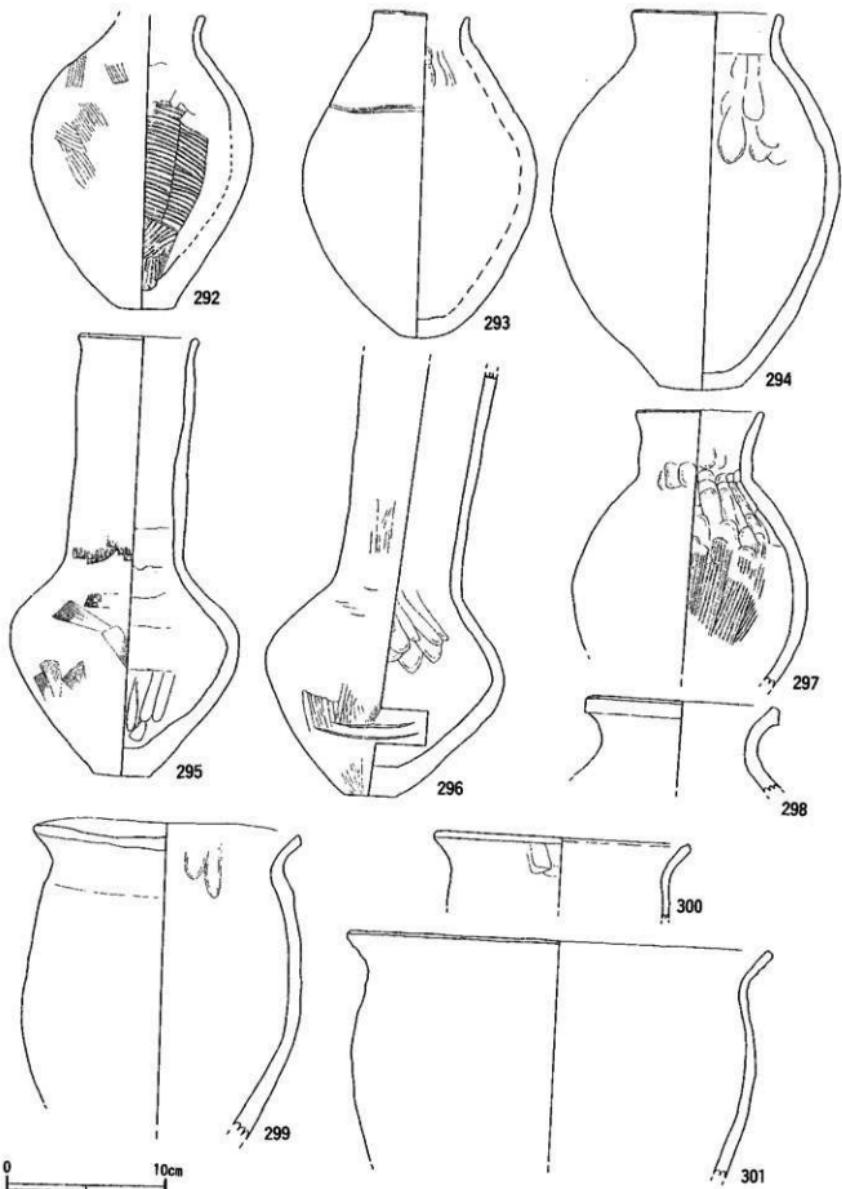
1区の溝状遺構は搅乱状態であり、押型文土器、弥生土器片、陶磁器類まで幅広く出土している。

##### 5号溝出土遺物

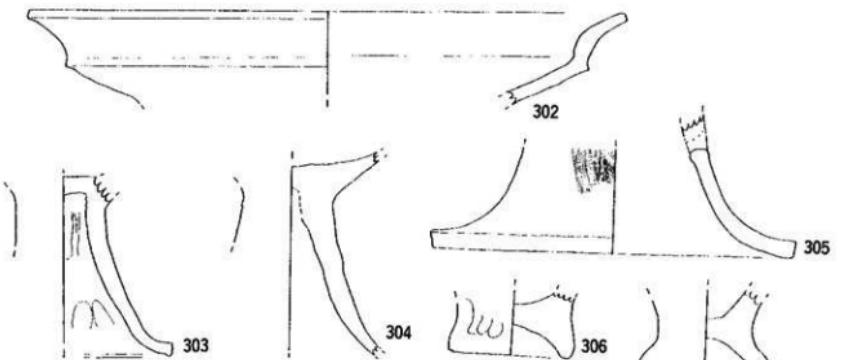
全て2区の落ち込み状部分の出土である。

341は口縁が強くくの字外反する短頸壺で、342は三角突帯を持ち、343は薄い刻目突帯を持つ壺の胴部である。344～351は壺である。344、345、354、355はくの字外反する口縁で刻目突帯を持つもの。346～348、352、353はくの字外反する口縁で屈曲部に稜を持つもの。349は直行する口縁で刻目突帯、350は緩やかに口縁が外反するものである。356、357は高壺の脚部である。358～361は壺の底部である。

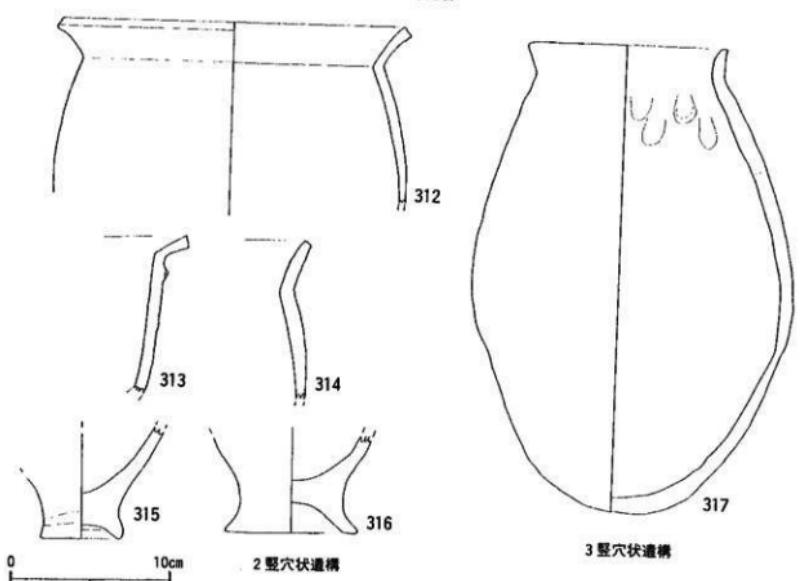
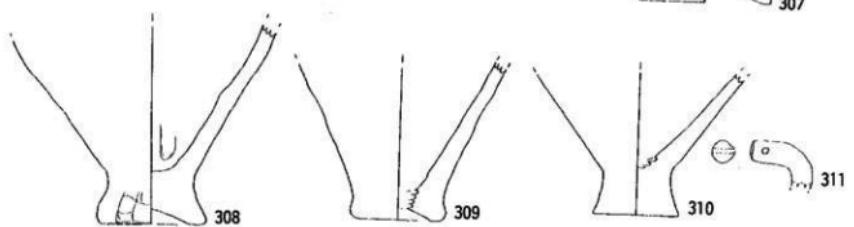
362、363は直行する口縁の壺の底部である。364～367はハの字に開く壺の底部で上げ底である。



第55圖 1號住居出土土器實測圖



1号住居

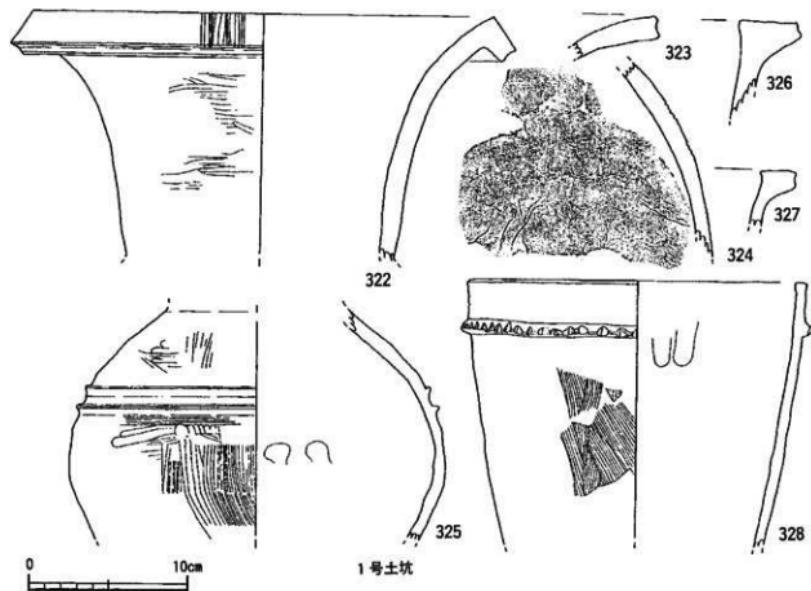
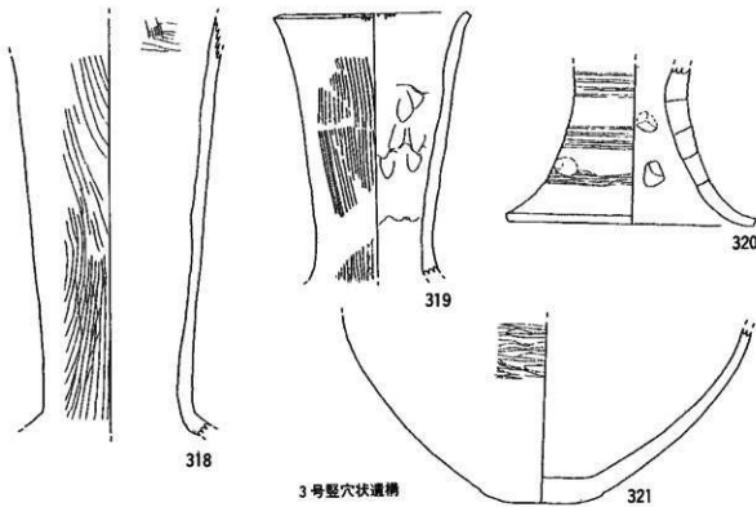


3 穴状遺構

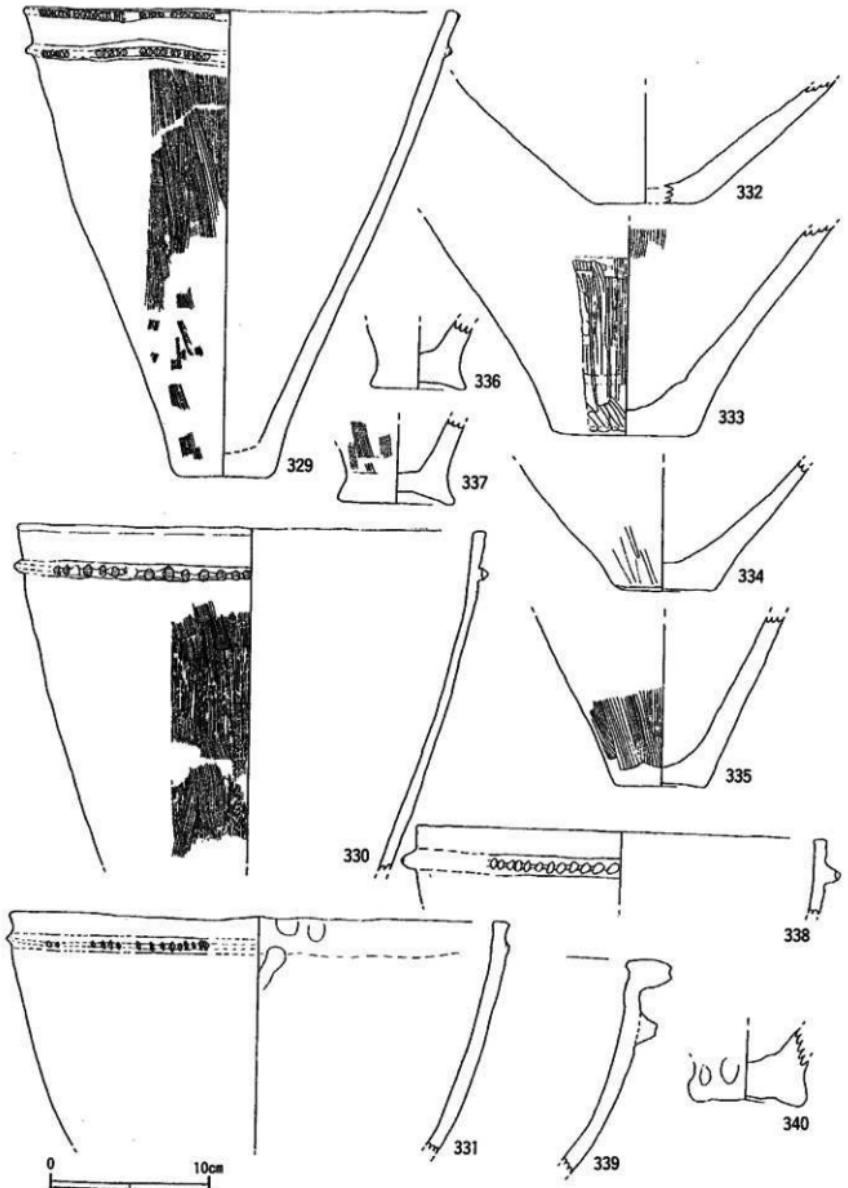
0 10cm

2 穴状遺構

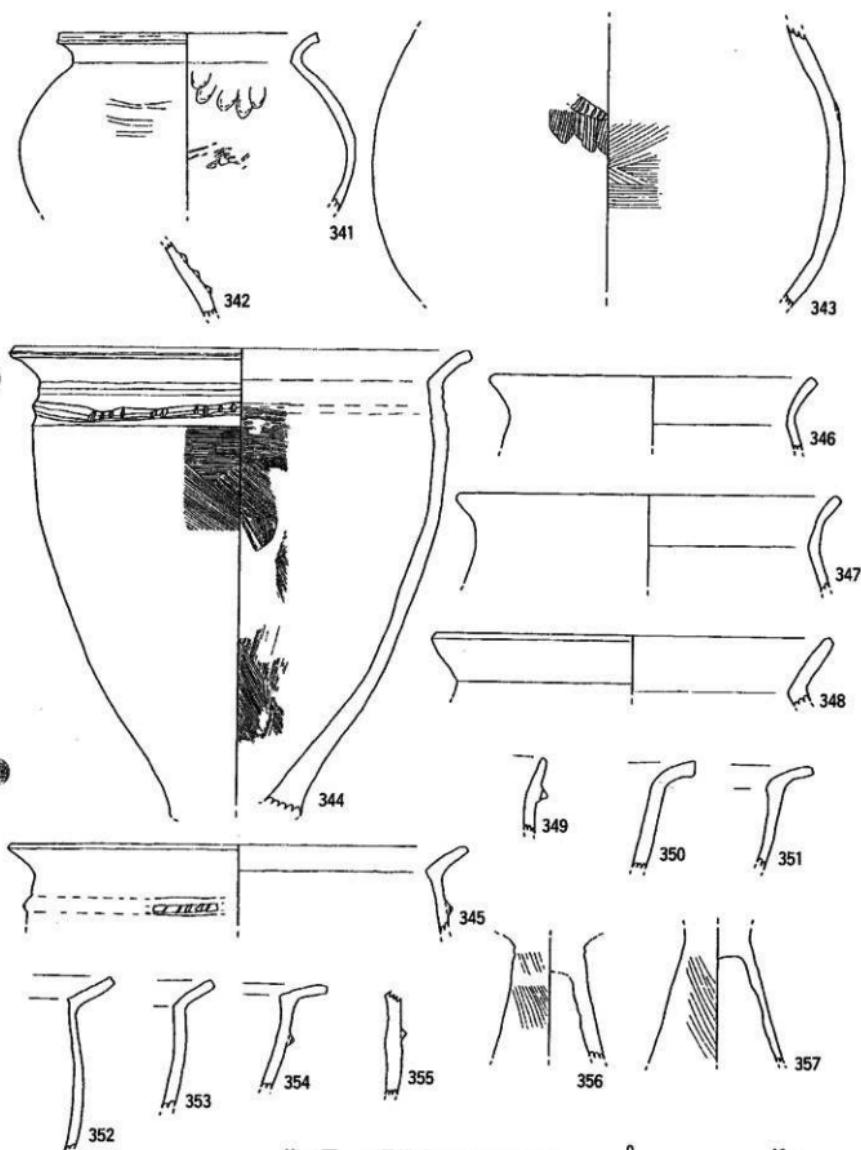
第56図 1号住居、2号・3号穴状遺構出土土器実測図



第57図 3号竖穴状遺構、1号土坑出土土器実測図

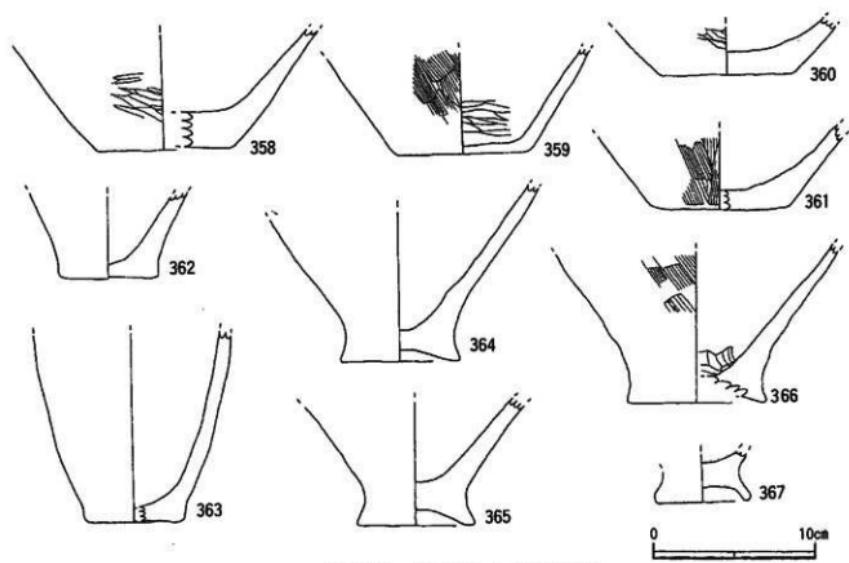


第58図 1・2号土坑出土土器実測図



第59図 5号溝出土土器実測図

0 10cm



第60図 5号溝出土土器実測図

## 6. 小 結

### 縄文時代

車坂第3遺跡の縄文時代早期について特徴を挙げると次のようになる。

- 1 1区では礫、集石の出土量がかなり厚く面的である点
- 2 2区に石礫の出土量が多く集中している点
- 3 土器の出土量がかなり多く面的である点（1区・2区での相違は特に見られなかった）
- 4 押型文土器の出土率がかなり高く5割を越える点

1については、集石の構築数との関係が最も重要となるが、発掘段階では全体を一様に掘り下げて行った訳であるが、大小の焼砾、円砾、破碎砾が土器片、チップ、剥片等と入れ混じった状態で検出されたため、集石の場所を特定出来なかつた。最期に確認トレンチを入れた際に掘り込みを持つ集石を検出したが、これも石の平面的な密集度から判別出来たものではなくトレンチ壁に掘り込みが確認されたものである。総体に言えることは、集石造構の石の密集度に比べると、集石検出面より上層の石の密集度はやや疎ということである。さらに、土器片、チップ、剥片等と入れ混じった状態であることを考え合わせると、1区の礫層は当初集石を構築した後は、礫や土器等の廃棄に依って形成された、謂わば礫塚とでも言えるものではないだろうか。

2については、出土した石礫の9割以上が2区の南側に集中している。2区からも集石や礫群は検出されているが1区の様な密集はしておらず、むしろ間違である。また土器片、チップ、剥片等の多量な出土、有孔石器の出土、並びに1区の状況を考え合わせると、2区には作業場的な役割があったと考えられる。

3については、既に1、2で述べたように本遺跡が作業場や廃棄場としての性格を持った遺跡であれば当然と言えよう。

4については、当遺跡出土の土器は大きく分けて押型文土器、桑ノ丸式土器、下剥峰式土器の3類である。押型文土器の口縁部内面の押圧（沈線）に長短が見られることから2時期あると考えられ、桑ノ丸式土器、下剥峰式土器が時期差と考えられている状況と符号する。また、押型文土器と在地系の土器が併存することは重要であり、本遺跡の性格を示すものであろう。

押型文土器が大分県の状況と同一の変化を辿るということは、ア、常に人の交流があり情報伝達が行われた、イ、常に土器の搬入が行われていたかであろう。

本遺跡が作業場や廃棄場であるならば、1区2区の両面から並行する押型文土器と在地系の貝殻文土器が一様に出土することは、アの場合においては、少なくとも生活空間の内、労働部分は共有していたと考えられ、イの場合においては土器の中に作業や生活に必要な物資が入っていたと考えられる。

このように考えてくると、本遺跡は早期の一時期に形成された訳であり、その期間での居住が定住的なものか、移動的なものであるのかが問題となり、押型文土器の編年観を援用し、他遺跡での状況を踏まえての作業が今後の課題として残された。

### 弥生時代

弥生時代について見ると、1号土坑、2号土坑から逆L字状のII線を持つ甕等が出土しているから中期中葉頃に利用が始まると思われる。

利用当初は、土坑が見られるだけであるが、用途は不明である。

後期の前葉に2号竪穴状遺構、後期の後葉に1号竪穴住居、3号竪穴状遺構が出現する。このうち2号竪穴状遺構は方形住居と土坑との切り合いの可能性が高く、3号竪穴状遺構は円形の間仕切住居と考えられる。そうすると、1号・3号と異なる平面形の間仕切住居がほぼ同時期に存在し、スリバチ状の土坑も近い時期になるのではないだろうか。1号は1辺4.5m、3号は直径約5.6mと大きさが異なっているが、本遺跡の住居は車坂第2遺跡の間仕切住居と規模が近いが後出するものであり、車坂第1遺跡・同第2遺跡との住居数に比べると少ないものであり、集落規模や丘陵利用の相違が窺われる。

本遺跡の調査の年は、希な冷夏であったうえ、大型台風12号の直撃により、隣接するアパートの屋根瓦が吹き飛ばされて調査区内にかなりの量が突き刺さっていたり、神社の杉の木が倒れたり折れたりしていた。その光景を目の当たりにして、縄文時代や弥生時代には台風が直撃した際には、どんな状態になったのだろうと感慨に耽ったものである。

第6表 繩文土器観察表

番号	部位	調 整	文 様	色 調	胎 土	備 考
1	胴 部	内面ナデ 外面貝殻条痕		灰 赤 褐	4mm以下の砂粒を含む	
2	胴 部	内面ナデ 外面タ	貝殻腹縁による押引文	灰 黄 黄	0.5mm以下の砂粒を多く含む	
3	胴 部	内面ナデ 外面貝殻条痕		暗 黄 タ	1mm以下の砂粒を含む	
4	胴 部	内面ナデ 外面ナデ後貝殻条痕		暗 黄 タ	3mm以下の砂粒を含む	
5	胴 部	内面ナデ 外面貝殻条痕		茶 黄 褐	2mm以下の砂粒を多く含む	
6	口縁部	内面丁寧なナデ 外面ナデ	櫛状施文具による綾杉文	茶 灰 黄 褐	3mm以下の砂粒を含む 穿孔あり	
7	口縁部	内面ナデ 外面タ	櫛状施文具による綾杉文	暗 黄 褐 棕	0.6mm以下の砂粒を多く含む スス付着	
8	胴 部	内面ナデ 外面タ	櫛状施文具による綾杉文	淡 茶 褐	3mm以下の砂粒を含む	
9	胴 部	内面丁寧なナデ 外面ナデ	櫛状施文具による綾杉文	黒 茶 褐	1mm以下の砂粒を含む	
10	胴 部	内面丁寧なナデ 外面ナデ	櫛状施文具による綾杉文	茶 茶 褐 タ	3mm以下の砂粒を含む	
11	胴 部	内面ナデ 外面タ	櫛状施文具による綾杉文	茶 茶 褐 茶	1.5mm以下の砂粒を含む 穿孔あり	
12	胴 部	内面丁寧なナデ 外面タ	櫛状施文具による綾杉文	黒 茶 褐	1.5mm以下の砂粒を含む	
13	胴 部	内面丁寧なナデ 外面ナデ	櫛状施文具による綾杉文	茶 茶 褐	2mm以下の砂粒を含む	
14	胴 部	内面丁寧なナデ 外面ナデ	櫛状施文具による綾杉文	黒 茶 褐	2mm以下の砂粒を含む	
15	胴 部	内面丁寧なナデ 外面ナデ	櫛状施文具による綾杉文	茶 茶 褐	2mm以下の砂粒を含む	
16	胴 部	内面丁寧なナデ 外面タ	櫛状施文具による綾杉文	茶 茶 褐	1.5mm以下の砂粒を含む	
17	胴 部	内面丁寧なナデ 外面ナデ	櫛状施文具による綾杉文	暗 茶 褐 茶	2mm以下の砂粒を含む	
18	口縁部	内面ナデ 外面タ	横長施文	暗 茶 褐	2mm以下の砂粒を含む	
19	胴 部	内面ナデ 外面タ	横長施文	暗 茶 黄 褐	0.3mm以下の砂粒を含む	
20	胴 部	内面ナデ 外面タ	横長施文	茶 茶 タ	1.5mm以下の砂粒を含む スス付着	
21	胴 部	内面ナデ 外面タ	弧状の施文	暗 茶 茶 茶	5mm以下の砂粒を含む	
22	胴 部	内面ナデ 外面タ	弧状の施文	茶 茶 茶 茶	4mm以下の砂粒を含む	
23	胴 部	内面ナデ 外面タ	縱長施文	茶 茶 タ	1mm以下の砂粒を含む	
24	胴 部	内面ナデ 外面タ	縱長施文	茶 茶 タ	2.5mm以下の砂粒を含む	
25	胴 部	内面ナデ 外面タ	縱長施文	茶 茶 茶	1mm以下の砂粒を含む	
26	胴 部	内面ナデ 外面タ	縱長施文	茶 茶 茶	3mm以下の砂粒を含む	
27	口縁部	内面ナデ 外面タ	貝殻腹縁による綾杉文	茶 茶 茶 茶	1mm以下の砂粒を含む	
28	口縁部	内面ナデ 外面タ	貝殻腹縁による綾杉文	茶 茶 茶 茶	2mm以下の砂粒を含む	

番号	部位	調整	文様	色調	胎土	備考
29	胴部	内面ナデ 外面々	貝殻腹縁による織杉文	黒 茶	褐色 褐色	1.5mm以下の砂粒を含む
30	胴部	内面ナデ 外面々	貝殻腹縁による織杉文	黒 暗	褐色 褐色	1mm以下の砂粒を含む
31	胴部	内面ナデ 外面々	貝殻腹縁による織杉文	黄 黄	灰 褐色	2mm以下の砂粒を多く含む
32	胴部	内面丁寧なナデ 外面ナデ	貝殻腹縁による織杉文	黒 暗	褐色 褐色	1.5mm以下の砂粒を含む
33	胴部	内面ナデ 外面々	貝殻腹縁による織杉文	褐 明赤	灰 褐色	2.5mm以下の砂粒を含む
34	胴部	内面ナデ 外面々	貝殻腹縁による織杉文	褐 暗	灰 橙	3mm以下の砂粒を多く含む
35	胴部	内面ナデ 外面々	貝殻腹縁による織杉文	茶 々	褐色 褐色	3mm以下の砂粒を含む
36	胴部	内面ナデ 外面々	貝殻腹縁による織杉文	茶 々	褐色 褐色	1mm以下の砂粒を含む
37	胴部	内面ナデ 外面々	貝殻腹縁による織杉文	暗 暗	黄 黄	3.5mm以下の砂粒を含む スス付着
38	胴部	内面ナデ 外面々	貝殻腹縁による織杉文	黒 褐色	褐色 褐色	1mm以下の砂粒を含む
39	胴部～底部	内面ナデ 外面々	貝殻腹縁による織杉文	暗 赤	褐色 褐色	1mm以下の砂粒を含む
40	口縁部	内面ナデ 外面々	貝殻腹縁による横方向の 施文、押引	黒 々	褐色 褐色	2mm以下の砂粒を含む 穿孔あり 列点状
41	口縁部	内面ナデ 外面々	貝殻腹縁による横方向の 施文、押引	暗 施文、押引	褐色 褐色	1.5mm以下の砂粒を含む 列点状
42	胴部	内面ナデ 外面々	貝殻腹縁による横方向の 施文、押引	褐色 々	褐色 褐色	2mm以下の砂粒を含む 列点状
43	胴部	内面ナデ 外面々	貝殻腹縁による横方向の 施文、押引	暗 淡	褐色 褐色	1.5mm以下の砂粒を含む 列点状
44	胴部	内面ナデ 外面々	貝殻腹縁による横方向の 施文、押引	暗 淡	褐色 褐色	5mm以下の砂粒を含む 列点状
45	胴部	内面ナデ 外面々	貝殻腹縁による横方向の 施文、押引	黒 黄	褐色 褐色	2.5mm以下の砂粒を含む 列点状
46	口縁部	内面ナデ 外面々	貝殻腹縁による織杉文	暗 灰	褐色 褐色	0.2mm以下の砂粒を含む スス付着
47	胴部	内面ナデ 外面々	貝殻腹縁による織杉文	暗 々	褐色 褐色	3mm以下の砂粒を多く含む 列点状
48	胴部	内面ナデ 外面々	貝殻腹縁による織杉文	淡 淡	褐色 褐色	1.5mm以下の砂粒を含む 列点状
49	胴部	内面ナデ 外面々	貝殻腹縁による織杉文	暗 々	褐色 褐色	2mm以下の砂粒を含む 列点状
50	胴部	内面ナデ 外面々	貝殻腹縁による織杉文	暗 々	褐色 褐色	2mm以下の砂粒を多く含む 列点状
51	胴部	内面丁寧なナデ 外面ナデ	貝殻腹縁による織杉文	淡 々	茶 褐色	3mm以下の砂粒を多く含む 列点状
52	胴部	内面ナデ 外面丁寧なナデ	貝殻腹縁による押引	茶 々	褐色 褐色	1.5mm以下の砂粒を含む 列点状
53	胴部	内面ナデ 外面丁寧なナデ	貝殻腹縁による押引	黒 橙	褐色 褐色	1mm以下の砂粒を含む 列点状
54	胴部	内面ナデ 外面々	貝殻腹縁による押引	茶 暗	褐色 褐色	1.5mm以下の砂粒を含む 列点状
55	胴部	内面ナデ 外面々	貝殻腹縁による押引	黒 茶	褐色 褐色	1mm以下の砂粒を含む 列点状
56	胴部	内面ヘラナデ 外面ナデ	貝殻腹縁による押引	灰 暗	褐色 褐色	1mm以下の砂粒を含む 列点状

番号	部位	調整	文様	色調	胎土	備考
57	口縁部	内面ナデ 外面々、研磨	ヘラ状施文具による沈線	暗灰	褐色	5mm以下の砂粒を含む 穿孔あり
58	胴部	内面丁寧なナデ 外面研磨	ヘラ状施文具による沈線	茶	褐色	2mm以下の砂粒を含む
59	胴部	内面ナデ 外面研磨	ヘラ状施文具による沈線	暗	褐色	3mm以下の砂粒を含む
60	胴部	内面ナデ 外面々	ヘラ状施文具による沈線	明	茶	2.5mm以下の砂粒を多く含む
61	胴部	内面ナデ 外面研磨	ヘラ状施文具による沈線	黒	褐色	1.5mm以下の砂粒を含む
62	胴部	内面ナデ 外面々	ヘラ状施文具による沈線	赤	褐色	2mm以下の砂粒を含む
63	口縁部	内面ナデ 外面々	ヘラの押圧	暗黄	褐色	微細な砂粒を多く含む
64	胴部	内面ナデ 外面々	ヘラの押圧	明	褐色	1mm以下の砂粒を含む 穿孔あり
65	口縁部	内面ナデ 外面々	ヘラの押圧	淡	褐色	5mm以下の砂粒を含む
66	口縁部	内面ナデ 外面々	山形押型	黄	褐色	1mm以下の砂粒を含む
67	口縁部	内面ヘラナデ 外面ナデ	山形押型	淡	褐色	3mm以下の砂粒を含む
68	口縁部	内面ナデ 外面々	山形押型	黒	褐色	2mm以下の砂粒を含む
69	口縁部	内面ナデ 外面々	山形押型	暗灰	褐色	5mm以下の砂粒を多く含む 穿孔あり
70	胴部	内面ナデ 外面々	山形押型	灰	褐色	8mm以下の砂粒を含む
71	胴部	内面ナデ 外面々	山形押型	暗	橙褐色	5mm以下の砂粒を含む
72	胴部	内面ナデ 外面々	山形押型	赤	褐色	5mm以下の砂粒を含む
73	胴部	内面ナデ 外面々	山形押型	茶	褐色	3mm以下の砂粒を含む
74	胴部	内面ナデ 外面々	山形押型	暗	褐色	2mm以下の砂粒を含む
75	胴部	内面ナデ 外面々	山形押型	黄	褐色	3mm以下の砂粒を含む
76	胴部	内面ナデ 外面々	山形押型	暗	橙褐色	5.5mm以下の砂粒を多く含む スス付着
77	胴部	内面ナデ 外面々	山形押型	黒	褐色	4mm以下の砂粒を含む
78	胴部	内面ナデ 外面々	山形押型	淡	褐色	6mm以下の砂粒を含む 網代底
79	胴部	内面ナデ 外面々	山形押型	暗	褐色	2mm以下の砂粒を多く含む 網代底
80	胴部	内面ナデ 外面々	格子押型	明	褐色	2mm以下の砂粒を含む
81	胴部	内面ナデ 外面々	格子押型	赤	灰	3mm以下の砂粒を含む
82	胴部	内面ナデ 外面々	格子押型	茶	褐色	0.4mm以下の砂粒を多く含む
83	胴部	内面ナデ 外面々	格子押型	暗黄	褐色	0.4mm以下の砂粒を多く含む
84	胴部	内面ナデ 外面々	格子押型	明	褐色	1mm以下の砂粒を含む

番号	部位	調整	文様	色調	胎上	備考
85	胴部	内面ナデ 外面々	楕円押型	赤 褐	1mm以下の砂粒を含む	
86	口縁部	内面ナデ 外面々	楕円押型	明黄 褐	8mm以下の砂粒を含む	
87	胴部	内面ナデ 外面々	楕円押型	暗黄 褐	1mm以下の砂粒を含む	スス付着
88	胴部	内面ナデ 外面々	楕円押型	黄 褐	1mm以下の砂粒を含む	
89	胴部	内面ナデ 外面々	楕円押型	茶 黄 褐	2.5mm以下の砂粒を含む	
90	口縁部	内面ナデ 外面々	楕円押型、山形押型	淡 々	2mm以下の砂粒を含む	
91	胴部	内面丁寧なナデ 外面ナデ	貝殻腹縁による刺突	淡黒 褐	1.3mm以下の砂粒を含む	
92	胴部	内面ナデ 外面々	貝殻腹縁による押引	暗 茶 褐	1mm以下の砂粒を含む	
93	胴部	内面ナデ 外面々	貝殻腹縁による押引	茶 褐	2mm以下の砂粒を含む	
94	胴部	内面ナデ 外面々	櫛状施文具の押引	茶 々	1.5mm以下の砂粒を含む	
95	胴部	内面ナデ 外面々	櫛状施文具の押引	茶 々	2mm以下の砂粒を含む	
96	胴部	内面ナデ 外面々		灰 褐	1mm以下の砂粒を多く含む	
97	胴部	内面ナデ 外面々		褐 々	砂粒を含む	
98	胴部	内面ナデ 外面貝殻条痕		暗赤 褐 々	1mm以下の砂粒を多く含む	
99	胴部	内面ナデ 外面貝殻条痕		明赤 褐 々	1.5mm以下の砂粒を多く含む	
100	胴部	内面ナデ 外面貝殻条痕		黒 淡 褐	砂粒を含む	
101	胴部	内面丁寧なナデ 外面貝殻条痕		暗灰 黄 褐	2mm以下の砂粒を含む	
102	口縁部	外面々	横方向の貝殻条痕	黄 褐	1mm以下の砂粒を含む	
103	口縁部	内面ナデ 外面々	貝殻腹縁による押出	灰 褐 褐	2mm以下の砂粒を含む	
104	口縁部	内面ヘラナデ 外面ナデ	横方向の貝殻条痕	暗灰 黄 褐	1mm以下の砂粒を含む	
105	口縁部	内面ヘラナデ 外面ナデ	縱方向の貝殻条痕	灰 黄 褐	2mm以下の砂粒を含む	
106	胴部	内面ナデ 外面々	櫛状施文具による 横方向の施文	黒 褐 褐	1mm以下の砂粒を含む	
107	胴部	内面ナデ 外面々	櫛状施文具による 縱方向の施文	灰 黄 褐	1mm以下の砂粒を含む	
108	胴部	内面丁寧なナデ 外面ナデ	櫛状施文具による 縱方向の施文	黒 褐	5mm以下の砂粒を含む	
109	胴部	内面ナデ 外面々	櫛状施文具による 横方向の施文	灰 暗 褐	2mm以下の砂粒を含む	
110	胴部	内面丁寧なナデ 外面ナデ	櫛状施文具による 斜め方向の施文	暗 黄 褐	3mm以下の砂粒を含む	
111	口縁部	内面ナデ 外面々	櫛状施文具による綾杉文	暗 黄 褐 々	3mm以下の砂粒を含む	
112	口縁部	内面ナデ 外面々	櫛状施文具による綾杉文	黄 褐 黄 褐	4mm以下の砂粒を含む	

番号	部 位	調 整	文 样	色 調	胎 土	備 考
113	口縁部	内面ナデ 外面タ	櫛状施文具による綾杉文	暗 橙 暗 橙	2mm以下の砂粒を多く含む	
114	口縁部	内面ナデ 外面タ	櫛状施文具による綾杉文	黒 橙 暗 橙	1mm以下の砂粒を多く含む	
115	胴 部	内面ナデ 外面タ	櫛状施文具による綾杉文	暗 赤 橙 暗 橙	1mm以下の砂粒を含む	
116	胴 部	内面ナデ 外面タ	櫛状施文具による綾杉文	暗 橙 暗 橙	3mm以下の砂粒を多く含む	
117	胴 部	内面丁寧なナデ 外面ナデ	櫛状施文具による綾杉文	暗 黄 橙 暗 黄 橙	3mm以下の砂粒を多く含む	
118	胴 部	内面丁寧なナデ 外面タ	櫛状施文具による綾杉文	明 橙 灰 暗 橙	1mm以下の砂粒を含む	
119	胴 部	内面ナデ 外面タ	櫛状施文具による綾杉文	黒 橙 暗 橙	1mm以下の砂粒を含む	
120	胴 部	内面ナデ 外面タ	櫛状施文具による綾杉文	黒 橙 暗 橙	1mm以下の砂粒を含む	
121	胴 部	内面丁寧なナデ 外面ナデ	櫛状施文具による綾杉文	暗 橙 暗 橙	2mm以下の砂粒を多く含む	
122	胴 部	内面ナデ 外面タ	櫛状施文具による綾杉文	灰 橙 暗 橙	3mm以下の砂粒を多く含む	
123	胴 部	内面ナデ 外面タ	流水文状	暗 黄 暗 黄	1.5mm以下の砂粒を含む	
124	胴 部	内面ナデ 外面タ	流水文状	暗 黄 橙 明 橙	5mm以下の砂粒を含む	
125	胴 部	内面ナデ 外面タ	流水文状	暗 橙 暗 橙	1mm以下の砂粒を含む	
126	胴 部	内面ナデ 外面タ	流水文状	黄 明 橙	7mm以下の砂粒を多く含む	
127	胴 部	内面ナデ 外面タ	弧状の施文	黑 橙 暗 橙	1mm以下の砂粒を含む	
128	胴 部	内面ナデ 外面タ	弧状の施文	明 橙 灰 黑 灰 橙	2mm以下の砂粒を多く含む	
129	胴 部	内面ナデ 外面タ	弧状の施文	暗 灰 黄 明 黄 橙	1mm以下の砂粒を含む	
130	胴 部	内面ナデ 外面タ	弧状の施文	黄 橙 明 黄 橙	2mm以下の砂粒を含む	
131	胴 部	内面ナデ 外面タ	弧状の施文	灰 橙 暗 橙	1mm以下の砂粒を含む	
132	胴 部	内面ナデ 外面タ	弧状の施文	黑 橙 暗 橙	砂粒を含む	
133	胴 部	内面ナデ 外面タ	弧状の施文	暗 灰 黄 暗 黄 橙	2mm以下の砂粒を多く含む	
134	胴 部	内面ヘラナデ 外面ナデ	櫛状施文具による 浅く搔いたような施文	黒 橙 暗 橙	砂粒を含む	
135	胴 部	内面ナデ 外面タ	櫛状施文具による 浅く搔いたような施文	暗 黄 橙 暗 橙	3mm以下の砂粒を多く含む	
136	胴 部	内面ナデ 外面タ	櫛状施文具による 浅く搔いたような施文	暗 橙 暗 橙	3mm以下の砂粒を多く含む	
137	口縁部	内面ナデ 外面タ	貝殻腹線による綾杉文	暗 橙 暗 橙	2mm以下の砂粒を含む	横方向の刺突あり
138	口縁部	内面ナデ 外面タ	貝殻腹線による綾杉文	暗 橙 暗 橙	1mm以下の砂粒を含む	
139	口縁部	内面ナデ 外面タ	貝殻腹線による綾杉文	灰 橙 暗 橙	微細な砂粒を含む	横方向の刺突あり
140	胴 部	内面ナデ 外面タ	貝殻腹線による綾杉文	暗 橙 暗 橙	1mm以下の砂粒を含む	

番号	部位	調整	文様	色調	胎土	備考
141	胴部	内面ナデ 外面△	貝殻腹縁による綾杉文	黒 暗	褐色 褐色	1mm以下の砂粒を含む
142	胴部	内面ナデ 外面△	貝殻腹縁による綾杉文	暗 黒	黄 褐色	2mm以下の砂粒を多く含む
143	胴部	内面ナデ 外面△	貝殻腹縁による綾杉文	暗 △	褐色 褐色	3mm以下の砂粒を含む
144	胴部	内面ナデ 外面△	貝殻腹縁による綾杉文	暗 △	褐色 褐色	1mm以下の砂粒を含む
145	胴部	内面ナデ 外面△	貝殻腹縁による綾杉文	暗 △	褐色 褐色	2mm以下の砂粒を含む
146	胴部	内面ナデ 外面△	貝殻腹縁による綾杉文	暗 △	褐色 褐色	砂粒を含む
147	胴部	内面ナデ 外面△	貝殻腹縁による綾杉文	灰 暗	黄 褐色	5mm以下の砂粒を含む
148	胴部	内面ナデ 外面△	貝殻腹縁による横方向 の施文	黒 暗	褐色 褐色	1mm以下の砂粒を含む
149	胴部	内面ヘラナデ 外面ナデ	貝殻腹縁による横方向 の施文	黒 暗	褐色 褐色	1mm以下の砂粒を含む
150	胴部	内面ナデ 外面△	貝殻腹縁による横方向 の施文	暗 暗	灰 褐色	1mm以下の砂粒を多く含む
151	底部	内面ナデ 外面丁寧なナデ	貝殻腹縁による刺穴	黄 暗	褐色 褐色	3mm以下の砂粒を多く含む
152	口縁部	内面ナデ 外面△	貝殻腹縁による綾杉文、 横方向の列点文	暗 暗	黄 褐色	1mm以下の砂粒を多く含む
153	口縁部	内面ナデ 外面△	貝殻腹縁による綾杉文、 横方向の列点文	△ △	褐色 褐色	1mm以下の砂粒を多く含む
154	口縁部	内面ナデ 外面△	貝殻腹縁による綾杉文、 横方向の列点文	暗 黒	褐色 褐色	6mm以下の砂粒を含む
155	口縁部	内面ナデ 外面△	貝殻腹縁による綾杉状 の列点文	暗 黒	褐色 褐色	1mm以下の砂粒を多く含む
156	胴部	内面ナデ 外面△	貝殻腹縁による綾杉状 の列点文	灰 暗	黄 褐色	2mm以下の砂粒を多く含む
157	胴部	内面ナデ 外面△	貝殻腹縁による綾杉状 の列点文	黒 暗	褐色 褐色	2mm以下の砂粒を含む
158	胴部	内面ヘラナデ 外面ナデ	貝殻腹縁による綾杉状 の列点文	灰 暗	褐色 褐色	2mm以下の砂粒を多く含む
159	胴部	内面ヘラナデ 外面ナデ	貝殻腹縁による綾杉状 の列点文	暗 △	褐色 褐色	1mm以下の砂粒を含む
160	胴部	内面ナデ 外面△	貝殻腹縁による綾杉状 の列点文	黒 暗	褐色 褐色	3mm以下の砂粒を含む
161	口縁部	内面ヘラナデ 外面ナデ	貝殻腹縁による綾杉状 の列点文	暗 黒	褐色 褐色	2mm以下の砂粒を多く含む
162	胴部	内面ナデ 外面△	貝殻腹縁による綾杉状 の列点文	暗 暗	灰 黄褐色	2mm以下の砂粒を多く含む
163	胴部	内面ヘラナデ 外面ナデ	貝殻腹縁による綾杉状 の列点文	暗 △	黄 褐色	3mm以下の砂粒を多く含む
164	口縁部	内面丁寧なナデ 外面ナデ	貝殻腹縁による列点文、 押引	黄 赤	灰 褐色	2mm以下の砂粒を多く含む
165	口縁部	内面ナデ 外面△	ヘラの押圧、山形押型	灰 暗	褐色 褐色	3mm以下の砂粒を含む
166	口縁部	内面ナデ 外面△	山形押型	明 暗	黄 褐色	0.5mm以下の砂粒を含む
167	口縁部	内面ナデ 外面△	山形押型	暗 黒	褐色 褐色	1mm以下の砂粒を含む
168	口縁部	内面ナデ 外面△	山形押型	△	黄 橙	3mm以下の砂粒を多く含む

番号	部位	調 整	文 様	色 調	胎 上	備 考
169	口縁部	内面 ナデ 外面 タ	山形押型	暗 +	2mm以下の砂粒を含む	
170	口縁部	内面 ヘラナデ 外面 ナデ	山形押型	暗 黄 揭	4mm以下の砂粒を含む	
171	口縁部	内面 丁寧なナデ 外面 ナデ	山形押型	灰 黄 暗 黄	4mm以下の砂粒を含む	
172	口縁部	内面 ナデ 外面 タ	山形押型	明 黄 暗 黄	1mm以下の砂粒を含む	
173	口縁部	内面 ナデ 外面 タ	山形押型	暗 黄 +	微細な砂粒を含む	
174	口縁部	内面 ナデ 外面 タ	山形押型	淡 黄 黄 暗 黄	1mm以下の砂粒を含む	
175	口縁部	内面 丁寧なナデ 外面 ナデ	山形押型	暗 黄 タ	5mm以下の砂粒を含む	
176	胴 部	内面 ナデ 外面 タ	山形押型	暗 黄 タ	2mm以下の砂粒を多く含む	
177	胴 部	内面 ナデ 外面 タ	山形押型	暗 黄 黄 タ	2mm以下の砂粒を多く含む	
178	胴 部	内面 ナデ 外面 タ	山形押型	暗 赤 黄 タ	7mm以下の砂粒を多く含む	
179	胴 部	内面 ナデ 外面 タ	山形押型	黒 黄 暗 黄	1mm以下の砂粒を含む	
180	胴 部	内面 ナデ 外面 タ	山形押型	暗 黄 タ	6mm以下の砂粒を多く含む	
181	胴 部	内面 ナデ 外面 タ	山形押型	暗 黄 タ	2mm以下の砂粒を含む	
182	胴 部	内面 ナデ 外面 タ	山形押型	灰 黄 黄 淡 黄 黄	砂粒を含む	
183	口縁部	内面 ナデ 外面 タ	楕円押型	暗 赤 黄 タ	5mm以下の砂粒を含む	
184	口縁部	内面 ナデ 外面 タ	楕円押型	灰 黑 黄 タ	砂粒を含む	
185	口縁部	内面 ナデ 外面 タ	楕円押型、ヘラの押圧	暗 黄 +	砂粒を含む	
186	口縁部	内面 ナデ 外面 タ	楕円押型	暗 黄 黄 暗 黄 黄	5mm以下の砂粒を含む	
187	口縁部	内面 ナデ 外面 タ	楕円押型、ヘラの押圧	灰 黄 黄 暗 黄 黄	1mm以下の砂粒を含む	
188	口縁部	内面 ナデ 外面 タ	楕円押型	灰 黑 黄 暗 黑 黄	6mm以下の砂粒を多く含む	
189	口縁部	内面 ナデ 外面 タ	楕円押型	暗 黄 黄 タ	5mm以下の砂粒を多く含む	
190	口縁部	内面 ナデ 外面 タ	楕円押型	暗 黄 +	6mm以下の砂粒を多く含む	
191	口縁部	内面 ナデ 外面 タ	楕円押型	暗 黄 灰 黄 暗 黄	3mm以下の砂粒を含む	
192	胴 部	内面 ナデ 外面 タ	楕円押型	暗 黄 タ	5mm以下の砂粒を含む	
193	口縁部	内面 ナデ 外面 タ	貝殻腹縁による押引	灰 黄 タ	1mm以下の砂粒を含む	
194	口縁部	内面 ナデ 外面 タ	貝殻腹縁による押引	暗 黄 +	2mm以下の砂粒を含む	
195	胴 部	内面 ナデ 外面 タ	貝殻腹縁による押引	暗 黄 黄 黄 橙	1mm以下の砂粒を含む	
196	胴 部	内面 ナデ 外面 タ	貝殻腹縁による押引	暗 赤 黄 明 赤 黄	4mm以下の砂粒を多く含む	網代底

番号	部位	調整	文様	色調	胎土	備考
197	胴部	内面ナデ 外面貝殻条痕	縦方向の条痕	灰 黄 褐 暗 赤 梅	5mm以下の砂粒を多く含む	
198	胴部	内面ナデ 外面々	棒状施文具による縦線、 ヘラ状施文具による横線	灰 黄 褐 暗 黄 梅	2mm以下の砂粒を多く含む	
199	口縁部	内面ナデ 外面々	ヘラ状施文具による格子文	灰 黄 褐 暗 梅	2mm以下の砂粒を多く含む	
200	口縁部	内面ナデ 外面々	ヘラ状施文具による横、 斜めの沈線	暗 梅	1mm以下の砂粒を多く含む	
201	胴部	内面ナデ 外面々	ヘラ状施文具による横の沈線	黒 褐 梅	2mm以下の砂粒を多く含む	
202	口縁部	内面ナデ 外面々	ヘラ状施文具による綾杉文	暗 梅 々	1mm以下の砂粒を多く含む	
203	口縁部	内面ナデ 外面々	ヘラ状施文具による綾杉文	暗 黄 々	2mm以下の砂粒を含む	
204	胴部	内面ナデ 外面々	ヘラ状施文具による横の沈線	暗 黄 明 赤 褐	2mm以下の砂粒を含む	
205	胴部	内面ナデ 外面々	ヘラ状施文具による綾杉文	暗 黄 褐 梅	1mm以下の砂粒を多く含む	
206	胴部	内面ナデ 外面々	棒状施文具による刺突	暗 褐 赤 梅	1mm以下の砂粒を多く含む	
207	胴部	内面ナデ 外面々	棒状施文具による刺突	暗 赤 梅 々	1mm以下の砂粒を含む	
208	口縁部	内面丁寧なナデ 外面貝殻条痕ナデ		暗 褐 灰 梅	砂粒を含む	

第7表 石器観察表

番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
209	石鎚	2.7	1.9	0.35	1.50	チャート	
210	石鎚	3.1	1.85	0.5	1.60	チャート	
211	石鎚	2.55	2.0	0.4	1.27	チャート	
212	石鎚	2.45+α	2.15	0.45	1.75	チャート	
213	石鎚	2.7	1.75	0.4	1.24	チャート	
214	石鎚	3.7+α	2.0+α	0.55	2.40	チャート	
215	石鎚	1.5	1.4	0.35	0.41	チャート	
216	石鎚	2.2	1.6	0.4	0.92	チャート	
217	石鎚	2.4+α	1.9+α	0.4	1.39	チャート	
218	石鎚	2.0	1.9	0.4	0.90	チャート	
219	石鎚	2.65	1.6	0.5	1.23	チャート	
220	石鎚	2.1+α	1.6+α	0.4	0.74	チャート	
221	石鎚	2.9	2.4	0.45	2.24	チャート	
222	石鎚	1.7	1.6	0.35	0.57	チャート	
223	石鎚	2.2	1.7	0.4	1.15	チャート	
224	石鎚	3.3	2.1	0.6	2.38	安山岩	
225	石鎚	2.95	1.8	0.4	1.29	チャート	
226	石鎚	1.45	1.1	0.2	0.23	黒曜石	
227	石鎚	1.6+α	1.75	0.4	0.76	チャート	
228	石鎚	1.85	1.5	0.45	0.82	チャート	
229	石鎚	1.85	1.45	0.2	0.34	黒曜石	
230	石鎚	2.1+α	1.75	0.55	1.35	流紋岩	
231	石鎚	2.9	2.1+α	0.55	2.21	頁岩	
232	石鎚	2.0	1.8	0.5	1.10	チャート	
233	石鎚	2.4	1.8+α	0.5	1.29	チャート	
234	石鎚	2.5+α	1.6+α	0.4	1.29	流紋岩	
235	石鎚	1.25+α	1.8+α	0.4	0.60	チャート	
236	石鎚	2.55	1.95	0.65	1.60	チャート	

番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
237	石鑊	2.45	2.1+α	0.6	2.01	チャート	
238	石鑊	1.85	1.6+α	0.4	0.70	チャート	
239	石鑊	2.15	2.1	0.45	1.14	チャート	
240	石鑊	1.65	1.8	0.3	0.54	チャート	
241	石鑊	1.9	1.8	0.3	0.88	チャート	
242	石鑊	2.3+α	2.4	0.4	1.42	チャート	
243	石鑊	2.2+α	2.7	0.45	2.25	チャート	
244	石鑊	1.95+α	2.65	0.45	1.86	チャート	
245	石鑊	2.2	2.05	0.5	1.64	チャート	
246	石鑊	2.3	2.55	0.5	2.11	チャート	
247	石鑊	1.9	1.8	0.5	0.85	チャート	
248	石鑊	2.2	2.4	0.45	1.66	チャート	
249	石鑊	2.55	2.55	0.5	1.83	チャート	
250	石鑊	2.0	2.1	0.5	1.05	チャート	
251	石鑊	1.6	1.4	0.35	0.55	チャート	
252	石鑊	2.35	2.05	0.4	1.20	チャート	
253	石鑊	2.35	1.75	0.5	1.23	チャート	
254	石鑊	1.55+α	1.3+α	0.4	0.81	チャート	
255	石鑊	2.2	1.7+α	0.35	0.93	チャート	
256	石鑊	2.1	1.4+α	0.35	0.62	黒曜石	
257	石鑊	1.7+α	1.65+α	0.4	0.74	チャート	
258	石鑊	2.7	2.2+α	0.5	1.76	黒曜石	
259	石鑊	1.35	1.1	0.3	1.32	チャート	
260	石鑊	1.9	2.0	0.35	1.03	チャート	
261	石鑊	2.9	1.7	0.5	1.80	チャート	
262	石鑊	2.6	2.1	0.45	1.54	チャート	
263	石鑊	2.8+α	1.56	0.45	1.42	チャート	
264	石鑊	2.15+α	1.62+α	0.28	0.79	黒曜石	

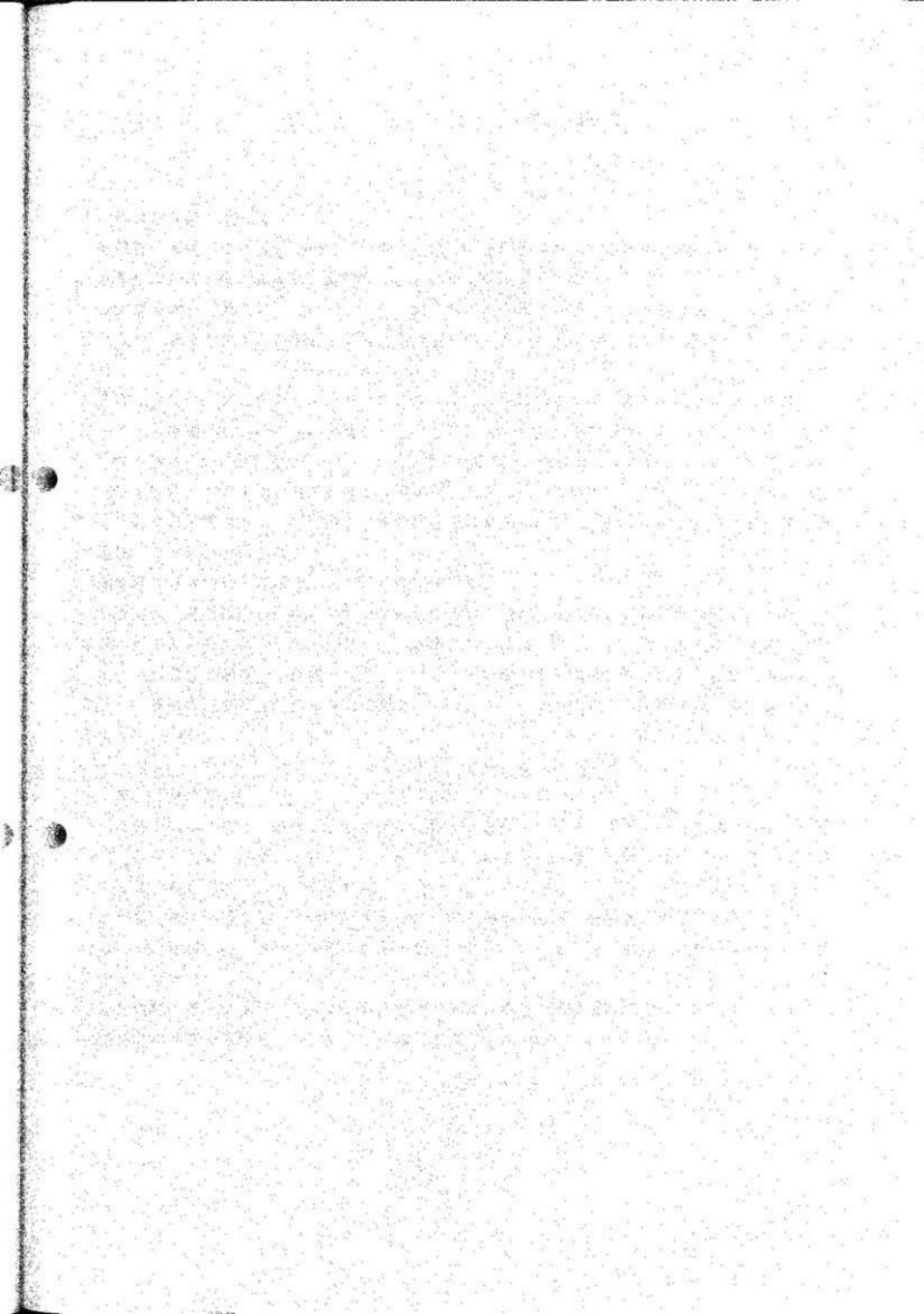
番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
265	石鎚	2.0	2.12	0.56	1.17	チャート	
266	石鎚	1.9	1.2	0.45	0.65	チャート	
267	石鎚	1.55	1.4	0.25	0.45	チャート	
268	石鎚	1.9	1.25	0.4	0.54	黒曜石	
269	石鎚	2.1	1.5+α	0.35	0.80	黒曜石	
270	石鎚	1.2	1.0+α	0.2	0.18	黒曜石	
271	石鎚	1.5	1.2	0.3	0.35	黒曜石	
272	石鎚	1.7	1.4	0.2	0.39	チャート	
273	石鎚	2.1	1.5	0.35	1.05	チャート	
274	石鎚	2.4	2.4	0.4	2.21	チャート	
275	石鎚	2.0	1.3	0.35	0.57	黒曜石	
276	石鎚	2.4	1.9	0.4	1.66	チャート	
277	石鎚	2.25	1.9	0.2	0.72	チャート	
278	石鎚	2.1	1.9	0.4	0.99	チャート	
279	石鎚	1.7	1.5	0.35	0.61	チャート	
280	石鎚	2.1	1.75	0.3	1.01	チャート	
281	石鎚	2.9	1.95	0.55	2.75	チャート	
282	石鎚	2.3	1.2	0.55	1.31	チャート	
283	石鎚	2.5	1.9	0.55	2.07	チャート	
284	石鎚	3.05	2.55	0.45	2.65	チャート	
285	石鎚	2.35	1.9	0.45	1.53	チャート	
286	石鎚	1.9	1.55	0.45	0.97	チャート	
287	石鎚	1.4	1.1+α	0.2	0.23	チャート	
288	凹石	6.5	7.95	3.5	255	砂岩	
289	凹石	7.6	6.6	3.0	230	砂岩	
290	凹石	10	7.6	4.5	477	砂岩	
291	有孔石器	5.4	4.8	2.23	100	頁岩	

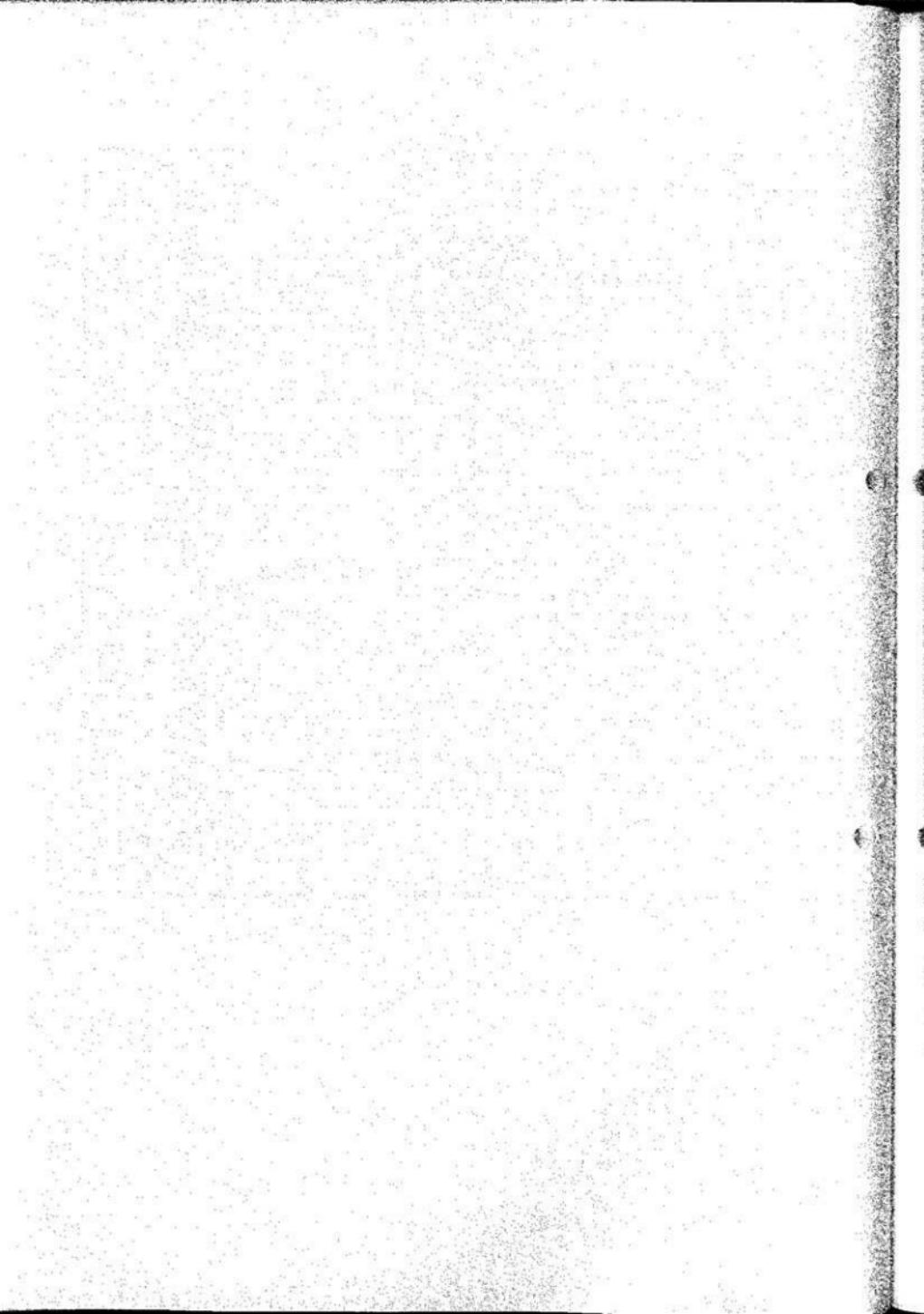
第8表 弥生土器観察表

番号	器種	調 整	色調	胎 土	備 考
292	壺	内面ナデ、ハケ 外面々、々	茶 赤	褐 茶	3mm以下の砂粒を多く含む
293	壺	内面ナデ 外面々	赤	茶	7mm以下の砂粒を多く含む 肩に沈線
294	壺	内面ナデ 外面々	肌	茶	4mm以下の砂粒を多く含む
295	壺	内面ナデ 外面々、ハケ	黒 肌	灰	4.5mm以下の砂粒を多く含む
296	壺	内面ナデ 外面々、研磨	褐	肌	5mm以下の砂粒を多く含む ヘラの沈線
297	壺	内面ナデ、ハケ 外面々	赤	茶	4mm以下の砂粒を多く含む
298	壺	内面ナデ 外面々	黄	土	0.5mm以下の砂粒を含む
299	壺	内面ナデ 外面々	肌	土	3mm以下の砂粒を多く含む スス付着
300	壺	内面ナデ 外面々、ヘラナデ	淡	茶	0.3mm以下の砂粒を含む スス付着
301	壺	内面ナデ 外面々	赤	茶	0.4mm以下の砂粒を含む
302	高 坯	内面ナデ 外面々	肌	土	5mm以下の砂粒を含む
303	高 坯	内面ナデ 外面々	肌	土	4mm以下の砂粒を多く含む
304	高 坯	内面ナデ 外面々	灰	黒	3mm以下の砂粒を含む
305	器 台	内面ナデ 外面々、ハケ	黄	褐	3mm以下の砂粒を含む 透し
306	壺	内面ナデ 外面々	黄	土	3mm以下の砂粒を含む
307	壺	内面ナデ 外面々、ヘラナデ	こげ	茶	3mm以下の砂粒を含む
308	壺	内面ナデ 外面々	赤	茶	4mm以下の砂粒を多く含む
309	壺	内面ナデ 外面々	黒	灰	4mm以下の砂粒を含む
310	壺	内面ナデ 外面々	肌	土	4mm以下の砂粒を含む
311	土 製 玉 勾	内面ナデ 外面々	淡	灰	2mm以下の砂粒を多く含む
312	壺	内面ナデ 外面々、ハケ	黄	白	砂粒を多く含む
313	壺	内面ハケ後ナデ 外面ナデ	黄	灰	2mm以下の砂粒を含む 貼り付け突帯
314	壺	内面ハケ後ナデ 外面ナデ	黄	橙	2mm以下の砂粒を含む スス付着
315	壺	内面ハケ後ナデ 外面々	赤	橘	2mm以下の砂粒を多く含む
316	壺	内面ナデ 外面ハケ後ナデ	黄	白	2mm以下の砂粒を含む
317	壺	内面ナデ 外面ハケ	淡	褐	0.5mm以下の砂粒を含む
318	壺	内面研磨、ナデ 外面々	黒	土	2mm以下の砂粒を含む
319	壺	内面ナデ 外面々、ハケ	黄	褐	5mm以下の砂粒を含む

番号	器種	調整	色調	胎土	備考
320	器台	内面ナデ 外面丁寧なナデ	淡 ・	米 0.1mm以下の砂粒を含む	透し、沈線
321	壺	内面ナデ 外面研磨	黒 焦茶	灰 1mm以下の砂粒を含む	
322	壺	内面丁寧なナデ 外面ナデ、研磨	黄 ・	土 5mm以下の砂粒を含む	
323	壺	内面ナデ 外面タ	褐 赤	褐 1mm以下の砂粒を含む	
324	壺	内面ナデ 外面タ、研磨	灰 茶	茶 0.1mm以下の砂粒を含む	沈線、波状文
325	壺	内面ナデ 外面研磨、ハケ	淡 茶	茶 4mm以下の砂粒を含む	貼り付け突帯
326	壺	内面ナデ 外面タ	茶 淡	茶 3mm以下の砂粒を含む	
327	壺	内面ナデ 外面タ	茶 茶	褐 2mm以下の砂粒を多く含む	
328	壺	内面ナデ 外面タ、ハケ	淡 ・	茶 5mm以下の砂粒を含む	貼り付け突帯
329	壺	内面ナデ 外面タ、ハケ	黄 ・	褐 4mm以下の砂粒を含む	スヌ付着
330	壺	内面ナデ 外面タ、ハケ	淡 黄	茶 褐 10mm以下の砂粒を多く含む	刻目、沈線 貼り付け突帯
331	壺	内面ナデ 外面タ	茶 淡	褐 微細な砂粒を含む	スヌ付着
332	壺	内面ナデ 外面タ	黄 ・	土 砂粒を含む	
333	壺	内面ハケ 外面タ、ナデ、研磨	黄 ・	土 1.3mm以下の砂粒を含む	
334	壺	内面ナデ 外面タ、研磨	灰 淡	茶 2mm以下の砂粒を多く含む	
335	壺	内面ナデ 外面ハケ	茶 ・	茶 5mm以下の砂粒を含む	
336	壺	内面ナデ 外面タ	灰 黄	褐 1mm以下の砂粒を含む	
337	壺	内面ナデ 外面タ、ハケ	茶 ・	褐 砂粒を含む	
338	壺	内面ナデ 外面タ	茶 ・	褐 1.5mm以下の砂粒を含む	貼り付け突帯、刻目
339	壺	内面ナデ 外面タ	茶 淡	茶 1mm以下の砂粒を含む	貼り付け突帯
340	壺	内面ナデ 外面タ、ハケ	茶 赤	茶 2mm以下の砂粒を多く含む	
341	壺	内面ナデ 外面タ、研磨	茶 黄	土 0.2mm以下の砂粒を多く含む	
342	壺	内面ナデ 外面タ	茶 ・	茶 砂粒を含む	貼り付け突帯
343	壺	内面ハケ 外面タ	黑 茶	灰 褐 微細な砂粒を含む	
344	壺	内面ハケ後ナデ 外面ハケ後丁寧なナデ	淡 ・	褐 3mm以下の砂粒を含む	刻目
345	壺	内面ナデ 外面タ	茶 黄	褐 0.3mm以下の砂粒を含む	貼り付け突帯
346	壺	内面ナデ 外面タ、ハケ	茶 ・	褐 砂粒を含む	
347	壺	内面ナデ 外面タ	茶 ・	褐 0.4mm以下の砂粒を含む	スヌ付着

番号	器種	調整	色調	胎土	備考
348	甕	内面ナデ 外面々	明茶 々	微細な砂粒を含む	
349	甕	内面ナデ 外面々、ハケ	淡褐 々	5mm以下の砂粒を含む	貼り付け突帯、刻目
350	甕	内面ナデ、ハケ 外面々、々	灰褐 々	0.3mm以下の砂粒を多く含む	
351	甕	内面ナデ 外面々	淡褐 褐	砂粒を含む	貼り付け突帯
352	甕	内面ナデ 外面々	茶 々	砂粒を含む	スス付着
353	甕	内面ナデ 外面々	灰褐 淡褐	砂粒を含む	スス付着
354	甕	内面ナデ 外面々	黄褐 淡褐	砂粒を含む	貼り付け突帯、刻目
355	甕	内面ハケ 外面々、ナデ	淡黒 褐	2mm以下の砂粒を含む	貼り付け突帯
356	高坏脚	内面ナデ 外面々、研磨	黒 々	1mm以下の砂粒を含む	
357	高坏脚	内面ナデ 外面々、研磨	黄褐 黄土	1mm以下の砂粒を含む	
358	壺	内面ナデ 外面々、ハケ、研磨	灰 赤茶	微細な砂粒を多く含む	
359	壺	内面研磨 外面ナデ、ハケ	黒 肌	微細な砂粒を含む	
360	壺	内面ナデ 外面研磨	黒 灰	0.3mm以下の砂粒を含む	沈線
361	壺	内面一 外面ハケ	一 淡褐	微細な砂粒を含む	スス付着
362	甕	内面ナデ 外面ハケ	褐 焦茶	砂粒を含む	スス付着
363	甕	内面ナデ 外面々	黄土 々	砂粒を含む	
364	甕	内面ナデ 外面々	黄褐 々	1mm以下の砂粒を含む	
365	甕	内面丁寧なナデ 外面ナデ	茶 々	3mm以下の砂粒を含む	
366	甕	内面ナデ 外面々、ハケ	淡黒 赤茶	微細な砂粒を含む	スス付着
367	甕	内面ナデ 外面々	茶 茶	1mm以下の砂粒を含む	





## 第5章 山下第1遺跡の調査

### 1. 調査の概要（第61図）

本遺跡は車坂・山下遺跡群のほぼ中央に位置し、車坂第3遺跡のある本丘陵とは小さな入り込み谷を挟んだ枝丘陵上にあり、蜜柑園として利用されていた区域である。

発掘調査は、丘陵全体を対象としたが、縄文時代の調査は丘陵の平坦部を対象として東西方向にグリッドを2列設定し、南側をA列、北側をB列、西から東に向かってそれぞれ1～4に分割した。

丘陵は全体的に東に緩やかに傾斜しており、南側は東に向かうにつれて1段下がった形になっている。蜜柑園にする際に、排水溝や1m四方の苗を植える穴等を空けているうえに蜜柑の栽培中に枝や摘果したものを埋め込む穴等が掘られているため、全体としてはかなり搅乱されている。

時期不明の大型の溝状遺構が丘陵のほぼ中央を東西に延びている。

弥生時代の遺構は表土直下の赤ホヤ層で確認されており、調査区全体に広がる堅穴住居群、溝状遺構、土器窯が検出された。

縄文時代早期の集石遺構を赤ホヤ層下面で検出した。

弥生時代の遺構は調査区の東半分では残りの良いものがあったが、総体に壁の残りは悪く床面のみの検出例も多く見られた。縄文時代の遺構としては集石が見られただけであるが丘陵平坦面に広く検出され、取り分け東側のB-4グリッドでは疊が密集状態になり集石との区分が出来なかった。遺物は散石と入り混じった状態で出土し、中には30cm大の石の下敷きになって検出された土器もあった。

### 2. 層位（第62図）

本遺跡の基本層序は、I層 表土（耕作土）、II層 赤ホヤ層、III層 黄白色ローム層、IV層 黒褐色ローム層、V層 黄褐色ローム層、VI層 褐色ローム層、VII層 黒色ブロック混入褐色ローム層、VIII層 シラス層である。

本来は、赤ホヤ層の上に黒色土層があったものと思われるが、削平及び耕作によりなくなっている。丘陵南側に行くにつれて徐々に削平されており、B-4グリッドではIV層黒褐色ローム層まで及んでいた。

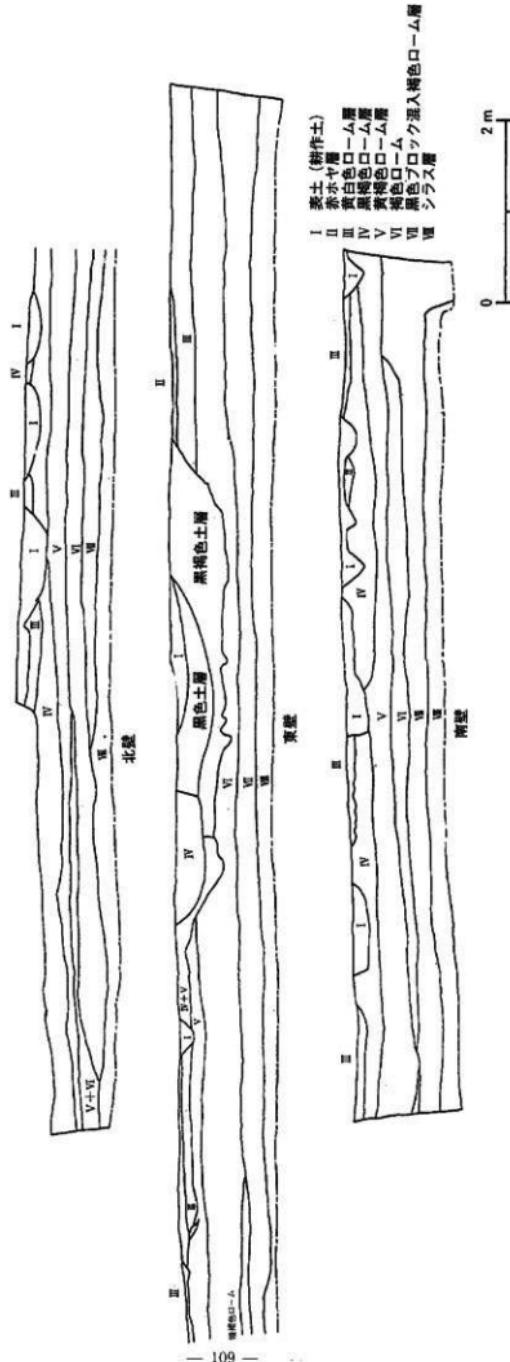
溝状遺構の埋土は黒色土と表土の搅乱状態であり、弥生時代の遺構埋土は淡黒色土であった。

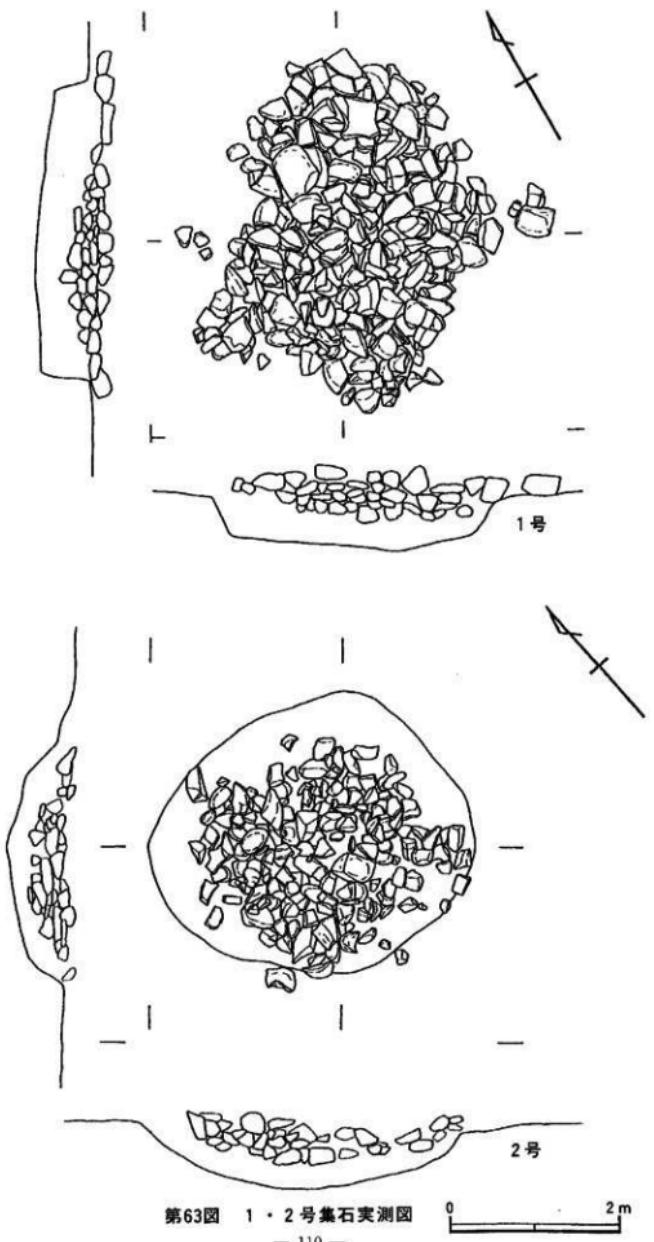
縄文時代早期の遺物は、IV、V、VI、VII層で検出された。

第61図 山下第1遺跡位置図



第62図 A1グリッド土層図





第63図 1・2号集石実測図

### 3. 縄文時代の遺構と遺物

#### 1) 遺構 (第63図)

縄文時代の遺構としては集石遺構が検出された。

集石遺構は検出状況により3種類に分けられる。

1類は、円形に円碟や破碎碟が集中するもの

2類は、黒色土の回りに碟が見られるもの

3類は、不整形な状態で碟が集まっているもの

B-4グリッドを除くと集石遺構は土器包含層と同一面で確認され、散石の間に石の集中した部分や黒く変色した土の部分が看取されるため、比較的容易に1類・2類は検出される。しかし、B-4グリッドでは、碟の密集が著しく下部にある集石が判別できない状態であり、言うなれば1類、2類の集石遺構の上に3類集石遺構が載る様なものである。

2類の集石遺構は1類の集石遺構から上部の碟を取り除いたもので、3類はその取り除いた碟を廃棄した1類2類の集石遺構の上に被せたものとも思われる。

このうち、1、2類はスリバチ状の掘り込みを有し、掘り込み内に碟が隙間なく充填されており、内部の碟の状態により2種類に区分できる。

1種は拳大の円碟や破碎碟が掘り込み底部まで一様に詰まっているもの

2種は掘り込み底部に30cm程の台石状の平たい石を置き、その上に拳大の円碟や破碎碟が詰まっているものである。

#### 2) 遺物 (第64~71図)

出土した縄文時代の遺物は早期の土器と石器を主とした石器類であり、調査区全域から検出された。中でも押型文土器の出土量が約6分の1程あること、縦型の石匙が出土したこと、大量のチップ、剝片が出土したことが特徴である。

#### A. 土器 (第65~70図)

出土した土器は全て縄文時代早期の上器であり、調整、文様、器形等から次のように分類される。

1類 貝殻条痕土器類（前平式・石板式土器類）貝殻条痕による調整を行うもの 1~20

口唇部に刺突、口縁部にヘラ状の押圧文を施すもの 1~3、5

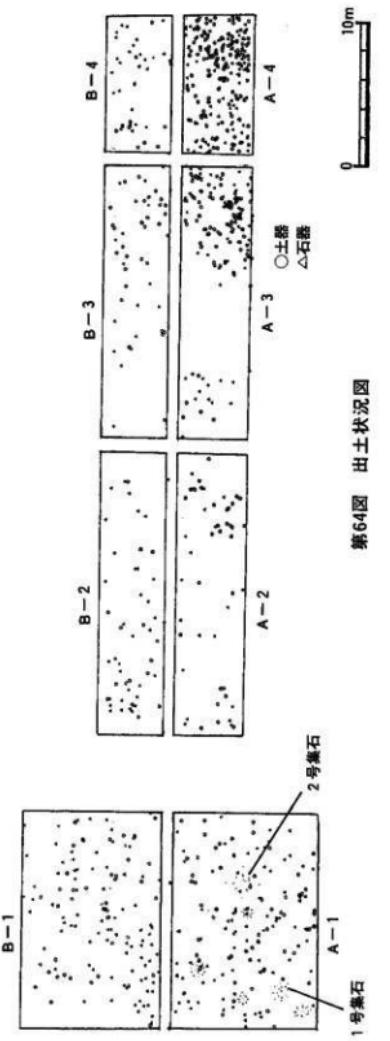
口縁部にヘラ状の押圧文を施すもの 4、6、7、8

口縁部に貝による刺突文を入れるもの 9

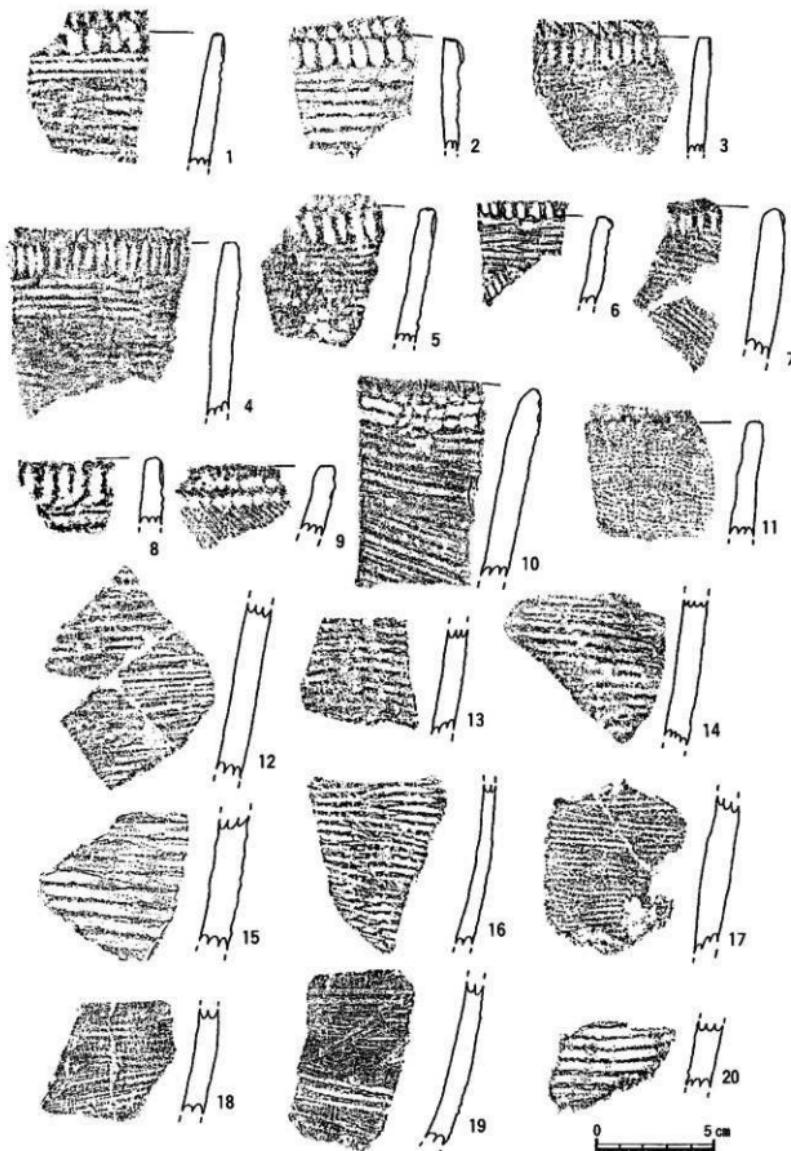
口縁部にヘラ状施文具による押引状の刺突を入れるもの 10

口縁部をナア、以下を横の条痕 11

12~20は脇部で横方向の条痕である。条痕の入れ方は太く幅広のものから細く密なものまで多様である。



第64圖 出土狀況圖



第65図 出土土器実測図

2類 桑ノ丸式土器類 口縁端を平に仕上げ、内外面をナデた後に櫛状施文具（貝殻か）による文様を施すもの。21～43

a 口唇部に刻目を入れ、胴部に荒く斜格子状の施文をするもの 21、22、23

口唇部に刻目を入れ、横と斜めの施文をするもの 24

口唇部はナデ、胴部は縱に近い斜めの施文 25、26

27～29は胴部で綾杉文に近いものがある。

b 綾杉文状の施文をするもの 30～36、38～43

流水文状の施文をするもの 37

文様形態では以上の様に区分できるが、文様の密集したもの 30、31、40 格子状となるもの 32～34 等の変化がみられる。

3類 下剥峰式土器類 口縁端を平に仕上げ、内外面をナデた後に貝殻腹縁の刺突による列点文を施すもの。44～54

横方向の列点を施文するもの 44、51、52、54

縱方向に列点を施文するもの 45、53

綾杉状の列点を施文するもの 46～50

52～54は列点文と刺突文の中間的な施文となっている。

4類 ヘラ状工具による施文を施すもの 55～59

口唇部に刻目を入れ、ヘラ状工具によるナデを施すもの 55

斜めの沈線を入れるもの 56

綾杉状の沈線を入れるもの 57～59

格子状の沈線を入れるもの 62

57、62は貝殻腹縁の可能性がある。

5類 押型文土器

a 楠円押型 60～63

原体の楕円の大きさにより、楕円が大型のもの 61、楕円が中型のもの 60、楕円が小型のもの 62、63に分類される。

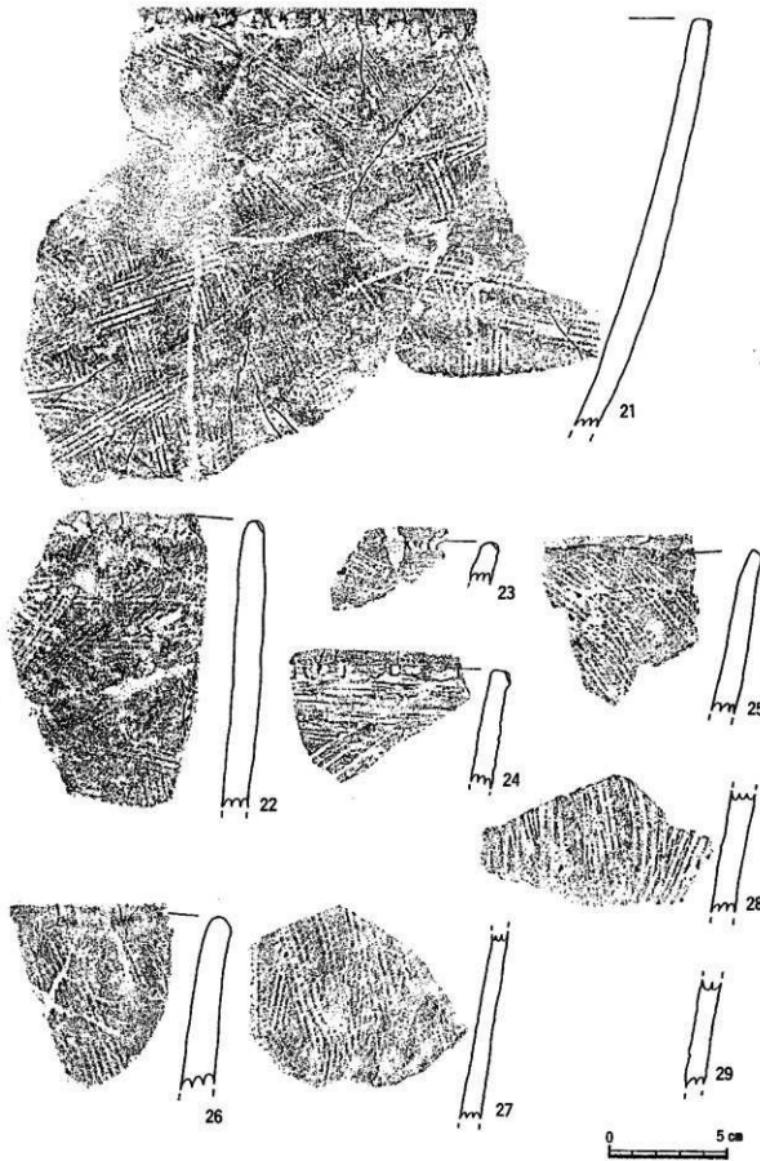
60は楕円押型を外面上に施し、内面口縁端部にヘラ状工具による短い押圧を入れ、下部に山形押型を施すもの。

61は楕円押型を外面上に施し、内面口縁端部にヘラ状工具による長めの押圧を入れ、下部に楕円押型を施すもの。

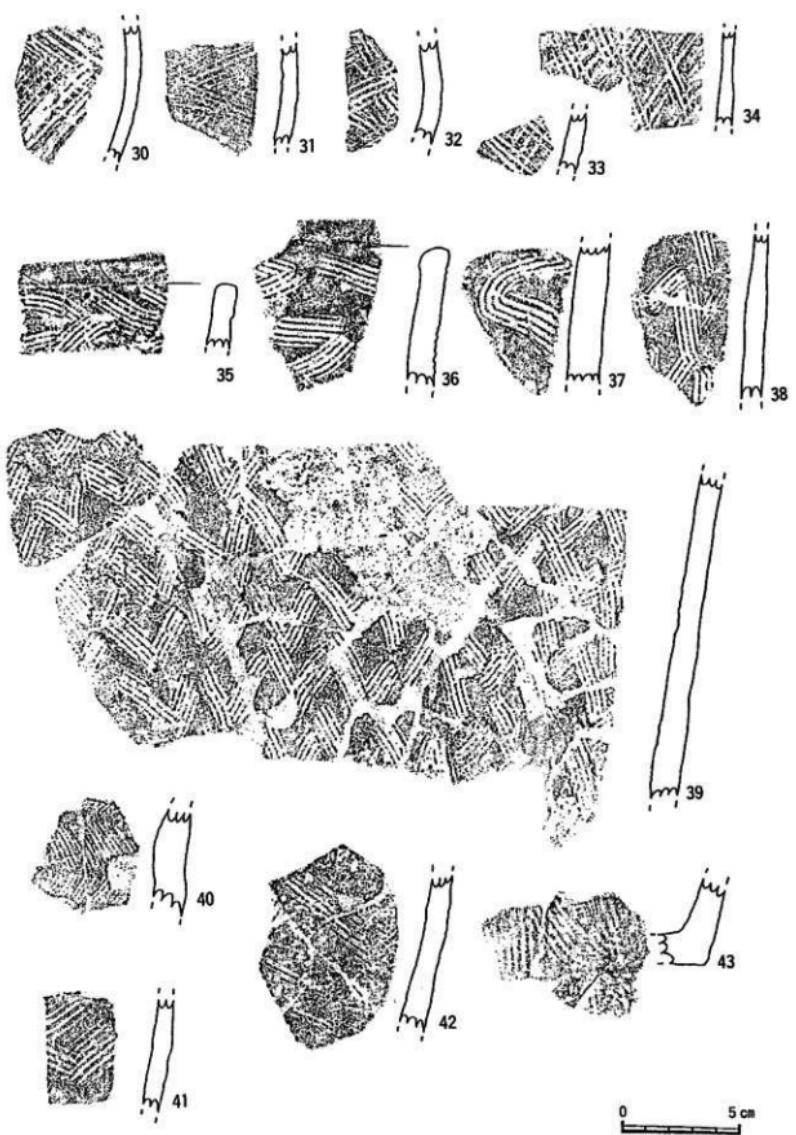
63は網代底である。

b 山形押型 64～68

縦位の山形押型を外面上に施し、内面に横位の山形押型を入れるもので、65～68は手向山式土器



第66図 出土土器実測図



第67図 出土土器実測図